カテキョ怪談

えつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カテキョ怪談

【Ｎコード】
Ｎ４３４５Ｕ

【作者名】
えつ

【あらすじ】
高校受験をひかえた中学二年生の夏。
進学校めざしてるくせに成績がどん底だった私に、親が家庭教師をつけた。
家庭教師は霊感もちで少し意地悪だった。

高橋さん

高校受験をひかえた中学二年生の夏。
進学校めざしてるくせに成績がどん底だった私に、親が家庭教師をつけた。
「よろしく」
「……よろしくお願いします」
人見知りするから少し不安だったけれど、初めての授業の日、玄関で母の肩ごしに目が合ったとたん「あ、なんか大丈夫かも」と力が抜けた。
上手くいえないが、第一印象で気が合うかどうかわかる時ってあると思う。
あとから「思ってたのとぜんぜん違う！」となることもあるから、あまりアテにはならないが、話しやすく優しそうな人に見えた。
名前は高橋さん。
教え上手でおしゃべりな爽やかイケメン大学生。
背は平均より少し高いくらいで、家庭教師だけあって真面目そうな外見。少々ミスしようが宿題をやり残していようが、嫌な顔一つせず優しく教えてくれる。そのせいか、私はすぐになついた。漫画や動物が好きなど、いくつか共通点があったのも大きいかもしれない。
おかげで、勉強がほんのり面白くなってきたある日の夜。
私はいつものように自分の部屋で高橋さんとイスを並べ、机に向かっていた。
窓からは生ぬるい風が入ってきて、じんわりと暑い。
めずらしくセミの声がしないせいか静かで、扇風機とシャーペンを走らせる音だけが室内に響いている。
そんなとき、ふわりとフローラル系の香水の匂いがした。
男物にしては甘すぎるし、たまに高橋さんがつけているものとは

系統が違う。
移り香ってやつかな、なんて下世話なことを考えていたら、「ぎしっ」とだれかが背後のベッドに座った気配がした。
え？
室内には私と高橋さん以外だれもいない。
そして彼はずっと左に座っている。
さっき確かにベッドが人の体重できしんだ音がしたと思ったが、ふり返ってもそこにはなにもない。
なんだか背筋がぞわぞわした。
ただの気のせい、かな。
気をとり直してテキストの続きを解いていると、頭のすぐ上で「はあ……」とため息が聞こえた。
まるでだれかにノートをのぞきこまれたような距離だと思ってしまって、ぞわっと全身に鳥肌が立つ。
明らかに女性の声だった。
幻聴にしては嫌に生々しく、隣家の声にしては近すぎる。
ため息がした辺りや部屋中をみわたすが、やっぱり他にだれもいない。
恐怖にかられて高橋さんをふり返ると、彼はこちらを見てニヤニヤ笑っていた。
「わかる？」
「え？」
「わかる？」
あまりに落ちつきはらった態度なので、解いている最中の問題のことを聞かれているのだと思った。
「あ、まだ考え中」
我に返ってみれば、下の階には家族もいるし、同じ部屋に高橋さんもいるのに幽霊だなんだと騒ぐのは恥ずかしい気がした。
勉強が嫌だからボイコットするつもりだと思われるかもしれない。
あわててテキストに向き直ると、意味不明なことを言われた。

「大丈夫。ちゃんと連れて帰るから」
何のことだと思ったが、「３０分で」と言われた問題の制限時間がせまっていたので、その日は聞き流した。
後日、同じく家庭教師の時間。
高橋さんが軽く告げた。
「実はあのとき、肩に女が乗ってたんだ。大学からついてきちゃってさ」
「女？」
冗談めかした口調だったのでツッコミまちかと思ったが、「電波あつかいされたらヤだな」という保険のようにも見えたので、私は普通にしていた。
第一、オカルトは大好きだ。
「そう、悪いもんじゃないんだけど。ずっと服ひっぱってくるし寒いし肩こるし、まいった」
こんな感じ、とつんつん服をひっぱってくる。
風がそよぐ程度の力だが、さすがにちょっと気味が悪い。
「変なの連れてこないで」
つい身を固くすると、高橋さんが笑った。
「大丈夫、もういないから」

◆

自分が怖い目にあうのは嫌だけど、怪談を聞いたり話したりするのは大好きだ。
そんな私が霊感もちの家庭教師に怪談をせがむのは自然の摂理というか、レンジに卵を入れたら爆発するのと同じくらい当然で、これはその内の一つ。
「大学にでる教室があるんだ」
授業の合間、たくさんテキストを広げた机の前で高橋さんがいった。

「黒い人影、白目がない女、普通の人。見るやつによって証言はバラバラだけど、目が合うと家までずーっとついてくるってのが共通点で。もう一度その教室に行くまで毎晩金縛りにあうんだってさ。面白そうだろ？」
「聞くだけならね」
私だったら絶対行かないが、彼はくだんの教室をのぞいてみたらしい。
夏休み中のオープンキャンパスで人はごった返していたが、その教室は使われておらず、がらんとしていた。
その中に、ぽつんと席に座る女。
ここの学生だったんだろう、二十歳くらいで、黒髪のショートカット。ニットの長そでにジーンズと明らかな冬服で、憂鬱そうに頬杖をついている。
目が合うと、これまた無愛想についてきた。
「自分の家も、どうしてずっと教室にいるのかも思い出せないから、とりあえず目が合ったやつについて行ってるんだってさ」
「それってまさかこの前の」
顔を引きつらせると、彼は笑顔でうなずいた。
「そ。この家にいる間とか、俺の家についた時とか”ちがう、ちがう、ここじゃない”って俺の服ひっぱりながらずーっとぶつぶついってた」
「それで、その人どうしたの？」
まだこの部屋にいるとかいうんじゃないだろうな。
「ん？　教室に戻したから、まだあそこにいるんじゃない？　昼も夜もずーっと。それか、別のやつにくっついてるよ」
「ついてこられたら嫌だけど、ちょっと可哀想だね」
うちわで扇ぎながら告げると、意味深な瞳がこちらを見た。
「同情すると憑かれるよ」
「その大学には行かないから平気」
高橋さんがけらけら笑う。

「あんなの怖くないって。前もいったけどそんな悪い奴じゃないから。あれより下の階のほうがよっぽど怖い」
「何があるの？」
「ベタだけど、トイレ。掃除してあって清潔感はあるし、ちゃんと電気ついてんのになーんか全体的に暗い。ふっと顔上げたら個室にでっかい顔がすんごい形相で浮かんでてさー。それからあそこは使ってない。見えてない奴でもなんか怖いってすぐ出てくるし」
その話を聞いて、私はある事を思い出した。
一時期よく通っていたデパートがあるのだが、そこのトイレが高橋さんの話と同じように『電気がついているのにとても暗い感じがして、不気味で背筋が寒くなる』トイレだったのだ。
他に人がいなければ怖くて入れない不気味さだったのだが、そのデパートには他のトイレがなかったため、我慢して何度か使っていた。
とはいっても、怖いだけで害はなかったけれど。
高橋さんが帰ってから、パソコンでそのデパートの名前、トイレ、などのキーワードで検索してみる。
適当にクリックした記事にはこう書かれていた。
「●●デパートのトイレには逆さづりの女の幽霊が出る」

◆

夏の盛。
じっとりした熱気に包まれたある晩、私は友達と五人で花火大会へ出かけた。
駅でまち合わせして、河川敷へ歩く。
花火が始まる前に晩ご飯と飲み物を買いに行こうという話になったのだが、全国的に有名な花火大会だからかどこの露店もすごい人混みで、並ぶだけでも苦労しそうだった。友達の一人が靴ずれをして足が痛いと訴えたこともあり、買いに行くものと残るもので分か

れることにした。
私は買い出し組になり、明里という友達と二人で人混みへ入った。
アイドルみたいな雰囲気のある、華やかでお洒落な子だ。この日も大きな髪飾りがピンクの浴衣によく似合っていた。
花火を観るポイントと露店は離れており、けっこう歩く。
やがて、ものすごい渋滞に入ってしまった。
道が満員電車みたいなのだ。
視界がすべて人で埋まっていて進む速度も遅いが、ここを抜けないと露店へ行けない。
早く座って花火を観たかった私はちょっとでも先へ進もうと躍起になっていた。
前の方へ進めそうなスペースができたので、「あそこへ行こう」と明里をふり返る。
同時に彼女に手をつかまれた。
「引き返そう」
「えっ」
せっかくここまで来たのに。お腹も空いたしのども乾いたし。
そう思ったが、次の一言で頭が冷えた。
「こんな所にいたら将棋倒しになる」
いわれてみれば。
周囲は満員電車もかくやと言わんばかりだし、彼らは前へ進みたくてイライラしている。
私も彼らと同じだったわけだが、こういう状況で理性的に物事を考えられる彼女は賢いなあ、とちょっと尊敬したのを覚えている。
普段から明里は賢いが。
私は友達に手を引かれるまま、元来た道を引き返していった。
しばらく歩いて、
「晩ご飯どうしよっか。遠くの夜店に行ってみる？」
他の友達の分も頼まれてるしとつぶやくと、ようやく彼女が足をゆるめる。

「あたし、今から帰ろっかなぁ」
「え？　なんで？」
いつの間にか、明里はひどく青ざめていた。
「ひなちゃん、今どこ通ってきたか覚えてる？」
「どこって……」
ついふり返る。
後ろにさっき通ってきたばかりの道がある。
大きな鉄橋の下で、他の場所より一層うす暗い。
そこにはだれもいなかった。
今の今までおぼろげに見えていたはずの露店の灯りや、上に飾られていた提灯もない。
少し目を離したすきに、花火会場から外れたどこかへ迷いこんでしまったかのようだ。
「……さっきまで、いっぱい人がいたよね？」
ずっと人の川が続いているかのように、道の先まで人で埋まっていたはずだ。
「あたしにはみんな黒こげに見えたけど」
背筋が寒くなった。
その後、まっていた友達には「すごい人混みで買えなかった」とだけ告げ、花火を鑑賞してからファミレスで食事をして帰った。
帰り道にはなにもおこらなかった。
ただ、あのとき明里が「引き返そう」といわなかったらどうなっていたのかと考えると、しばらく夜に出歩く気にはなれなかった。

◆

「変なとこ行っただろ」
家庭教師の日、来るなり高橋さんが指摘した。
なにも話していないのに確信に満ちていて、「やーいやーい」とはやしたてそうな笑顔だ。

「●●の花火大会に行っただけだよ。変な目にはあったけど」
詳しく話すと、
「ハイハイ、あそこね。あの鉄橋の下のとこだろ。俺も行ったことあるけどあそこよく出るよ。知らなかった？」
そんな事をいわれて絶句する。
大学にトイレに河川敷までそうなんて。
「全国、心霊スポットだらけじゃん……！」
「うん、幽霊なんてそこらにいるよ」
私の宿題をパラパラめくりながら、高橋さんが笑う。
「ひなだけだったら何もなかっただろうけど、たぶんその友達がひかれやすい体質なんだろうな。でもその子が引き返してくれたんだから、イイお友達じゃん？」
「うん」
私の名前は”ひなた”だが、高橋さんは”ひな”と呼ぶ。呼びやすいのかわからないが、友達にもそう呼ばれることが多かった。
「次のカテキョまで怪談はやめといた方がいいな。怖い話は読むのも聞くのも観るのも禁止。楽しいことだけ考えな」
バシ、と高橋さんに軽く背中をたたかれた。
「あとは……怖かったら窓に塩盛っとけ」
だんだん不安になってくる。
あれからなにもないけれど、実は危なかったりするんだろうか。
「自分の部屋だけでいいの？　ていうか何かいるの？」
「この部屋だけでいーよ」
「なにかいるの？」
「次くる時まで怖い話は禁止っていったろ」
そんなことといわれたら余計気になる。
不満げな視線を送ると、高橋さんはぽつりといった。
「茶、飲みすぎ」
彼が来てから約３０分。
その間に私はお徳用ペットボトル二本分の麦茶を消費していた。

「何かあったら電話しておいで」
授業が終わったあと、不吉な言葉とともに高橋さんは帰って行った。
「怖かったら盛り塩」ということは特にやらなくても問題ないだろうと判断して盛り塩はせず、楽しいことをしろといわれたので、その夜は友達に借りたＤＶＤを観ていた。
あまり興味のないドラマだったが観てみると面白く、気づけば夜中の二時四十分になっていた。
部屋にテレビがないのでパソコンで観ていたのだが、いきなり部屋の電気だけがフッと消えた。
モニターの光だけが目に焼きつく。
ＤＶＤは何事もないかのように再生されている。
反射的に肩がはねたものの、すぐに電気のスイッチを押す。
部屋の電気がついた。
電球の接触が悪いんだろうか。そろそろ換え時かもしれない。
そんな事を考えて、その日は切りの良い所までＤＶＤを観て眠った。

コン、コン。

恐怖を覚えたのは翌日の夜からだった。
いつも眠ると朝までおきないのだが、その日はどこからかノックの音がして夜中に目が覚めた。
まだ眠たいので構わずに目を閉じていたら、「コン！」とひときわ大きな音。
少しイラッとして目を開けると、暗い室内で時計の針だけがぼんやり光っていた。蛍光塗料がぬられたそれは3時前くらいをさしている。
辺りを見回すと、真横から「コン、コン」。
それはベッドの真横にある窓の外から聞こえてきていた。
「……」
背中がヒヤリとする。
私の部屋は二階にあるし、窓の下に足場もないから人間じゃない。
ふと「幽霊的なものが外から窓をノックしていたらどうしよう」と嫌なことを考えてしまった。
でも、今は夏だ。カブトムシやカナブンが窓に体当たりしているだけかもしれない。
そうは思ってもカーテンを開けるのが怖かった。
まともに幽霊らしきものを見たのはあの花火大会が初めてだし、それすらもよく覚えていない。今までそんな感じだったんだから、これからも幽霊を目撃する可能性は低い……と思いたい。だいたい行きたくて心霊スポットに行ったわけじゃないんだし、祟られる覚えもない。
でも、万が一窓の向こうに嫌なものが見えたら。
それが虫じゃないことが確定してしまったら。
コン、コン。
音はずっと続いている。

私はそっとベッドをぬけだし、壁にある部屋の電気のスイッチを押した。
つかない。
ぶわっと嫌な汗をかいた。
カチカチ、カチカチ、カチカチカチカチ。
何度も何度もスイッチを押すが、反応がない。
パニックになりそうになって、昨夜のことを思い出す。
単に電球が切れただけだ。他の部屋の電気ならつくかもしれない。
だが、この状況でドアを開けて真正面にあるトイレを見るのが怖かった。
怖い話にトイレはつきものだ。
しかも、この前の「トイレに出るという逆さづりの女」が頭に浮かんでしまって余計怖い。いくら何でも自宅のトイレには出ないことくらいわかっているが、怖いものは怖い。
かといって、窓のそばのベッドで寝直す度胸もない。
かなり迷い、ためらったあげくにドアノブに手をかけた。
廊下はまっ暗だが、すぐそばに両親や姉のいる部屋がある。姉をたたき起こして一緒に寝てもらおう。
そう思っていたのに、ドアは開かなかった。
私の部屋にカギはついていない。
たてつけが悪いわけでもない。
ドアノブが動かないのだ。
それも奇妙な感触がする。力加減によって動く範囲が違う。軽く手をかけただけだとぴくりともしないが、思い切り力をこめると一瞬ドアノブが動いて、その後すぐに戻されるのだ。
まるで、だれかが外からドアノブを押さえているみたいで気持ち悪い。
もう泣きそうだった。
大声で助けを呼ぼうか。でも夜中だし。緊急事態ということで。
いやでも大声を出したら逆に窓やドアの外にいる何かからリアクシ

ョンがあって怖いかもしれない。
「……」
どうしようもなく、私は壁を背に座って窓を見ながら朝をまった。
窓にはカギがかかっているが、ドアから入ってこられたら怖いのでドアの前にはイスを置いた。
やがて外が明るくなり、新聞配達の音が響いてくる。
気がつくと窓の音は消えていた。
おそるおそる電気のスイッチを押す。
普通に電気がついた。
電球も切れていないらしく十分明るく、点滅するような様子もない。
イスをどかして部屋のドアノブに手をかける。
今度はちゃんと開いた。
もう、大丈夫だ。
部屋のカーテンを開けた。
窓はすすだか土だか、得体のしれない茶色いもので汚れていた。

◆

それから姉のベッドにもぐりこんで眠り、昼ごろ高橋さんに昨夜の出来事をメールした。
「水とか線香とかお供えしたほうがいいかな？」
明里が「みんな黒こげに見えた」といっていたのと、あれからずっと異様にのどが渇くのは何か関係があるかもしれないと思ったからだ。窓についていた茶色い汚れも気になる。
火事か何かで亡くなった人たちが憑いてきているのでは？　というのは考えすぎだろうか。
高橋さんからの返信は。
「仮に水が欲しくてたまらない１００人がいたとして、その内１人だけに水をあげたらどうなると思う？　一生そういうのとつき合い

たいなら別だけど、そうじゃないなら何もしない方がいい。全部ただの気のせいだと思え」
との事だったのでお供えはやめておいた。
夜は姉に事情を話し、一緒に寝させてもらうつもりでいたのだが、
「今日から友達とキャンプ行くから。グッドラック！」
そんな一言で薄情者は午後にはいなくなってしまった。
こうなったらお母さんと……と思ったものの、中学生になってまで母親と一緒に寝るのはいかがなものか。
結局、廊下で暑そうにのびていた愛猫チャロを拉致してリビングにいすわった。
トラ模様のオス。おデブだがだれにでも愛想のいい、かわいいやつである。
念のため、自分の部屋とリビングの窓には塩を盛ってある。
あられもない格好で眠るチャロを横目に、私は安心してコメディドラマを観た。
深夜の2，3時が怖いと感じるようになっていたので早く寝るつもりだったのだが、夏休みで少し体内時計が狂っていて寝つけず、そのまま2時を過ぎてしまった。
軽く緊張しつつ、チャロの腹をなでる。
こちらの心境などお構いなしに笑うドラマの俳優の声と、時計の音だけが室内に響いている。
……なにもおきない。
一応3時を過ぎてから眠ろうか、とうとうとしていたとき、唐突にテレビの電源が切れた。
もちろんリモコンには触っていない。
十歩くらい離れたテーブルに置いていたリモコンをとってスイッチを押す。
テレビがついた。
が、リモコンをテーブルに戻したとたんにまた消えた。
だんだん背中がぞわぞわしてくる。

電源のついていないテレビのまっ暗なブラウン管に幽霊が映っていた、なんて怪談でよく聞く話だ。嫌だぜったい見たくない。
リモコンから電池をぬき、直接テレビをつける。
今度は消えなかった。
が。
「ニャアン」
床で万歳して転がっていたチャロが、リビングの窓に向かって鳴いた。
この猫が家の外へ遊びに行くのは日常茶飯事だが、鳴くのは珍しい。外へ出して欲しい時は無言で足に身体をすり寄せるか、人の手に自分の鼻をタッチしてくる。そういう風に教えていた。
チャロはじいっと窓の外を見つめている。
今夜は一人じゃないし、と勇気をだしてカーテンをめくるがそこにはなにもない。墨をぬったような暗闇にうっすらと外の景色が映っているだけだ。
チャロを抱き寄せ、テレビをつけたまま毛布を被った。
暑かったせいかチャロはすぐ床に逃げたが、それから奇妙なことはおこらなかった。
……そう思っていたが、朝目をさますと母が青ざめた顔つきでベランダに塩をまいていた。
ベランダはリビングの窓を開けてすぐの所にある。
「なにやってんの？」
問うと、母がそそくさと中へ入ってくる。
「チャロを外に出そうとして窓を開けたら、一瞬ベランダに黒い影がいたの」
あ、やっぱりいたんだ。
彼女には家庭教師に霊感があるらしいことも、我が家で怪奇現象がおこっていることも知らせていない。けれど、母は幽霊を見るのが嫌で毎晩電気をつけて寝るほどで、過去にも何度か幽霊を目撃したり予知夢らしいものを見たりしていたので納得した。

その晩は怖いことはおこらず、翌日の夕方に高橋さんが授業にやってきた。
「どうだった？」
私の部屋に入るなり、面白がるように問う。
「ちょっとあせった」
数日間の冷や汗体験を話すと、少しつまらなそうというか、ひょうしぬけしたような顔をした。
「ひなはホント見えないんだな。一度ヤバめの心霊スポット行ってみるか？　見えるようになるかもよ」
「ぜったい行かない」
そもそも見たくない。
速攻でお断りすると彼はおもむろに席を立ち、イスの後ろに回って背もたれを片手でつかんだ。
「なに？」
「背もたれがひなの肩な。このまえ来たとき、こんな感じで黒こげの骸骨がひなをつかんでたわけ。で、それを」
もう一つの手でバシっとふり払う。
「こんな風にしたから怒って微妙な出来事をおこすようになったと」
「そういえば、花火大会に行った日の翌日は大丈夫だったような……あと、昨日も平気だったけど」
高橋さんが笑った。
「お盆が終わったからな。もうなにもないと思う」
本当にしばらくはそうだった。

◆

私には霊感もちっぽい知り合いが数人いる。
その内の一人、クラスメイトの戸和（とわ）さんは「他人の守護霊が見える」と評判で、軽い占いや霊視もできるらしく、クラスメイト以外にもいろんな人が彼女に頼んでいる姿をたまに見かける。私も他の

子達のように守護霊を見てもらいたかったけれど、仲良くもないのにそんなミーハーな頼みごとをしたら嫌われそうで、頼んだことはなかった。

ある日、学校の休み時間にクラスの女子だけでカラオケに行こうという話になった。

友達が行くので私も行くと答え、近くにいた戸和さんはどうするかたずねると、

「私いそがしいから行かない」

愛想よく笑って彼女はいい切った。

霊感がある、というと暗い感じの子を想像しがちだが、戸和さんは高橋さんみたいに明るくて社交的なタイプの子だ。態度もサバサバきびきびしていて、野球かサッカー部あたりのマネージャーにいそうなイメージがある。

オカルト関係の話題も自分から積極的に語ることはせず、知っている人から問われたときは正直に答えている。ひけらかさないが、かくしもしない。そんな彼女のスタンスがひそかに好きだった。

「そっか、残念」

「行かないほうがいいよ」

小声でささやかれてギョッとする。

「なんで？」

「奈緒美（なおみ）ちゃんが行くから」

奈緒美ちゃんはクラスのリーダーみたいな子だ。私はまだ話したことがなく、好きでも嫌いでもない。

「嫌いなの？」

こちらも小声でこそっと問う。

「苦手かな」

それきり、彼女はさっと立ち上がってトイレに行ってしまった。

ナオ

カラオケ当日。
店内で一時間ほど過ごしたころ。
何回目かに奈緒美ちゃんが歌っていたら、だれかが「気持ち悪い声がする」といい出した。
「歌声が気持ち悪いなんて失礼な」と冷や汗をかいたが、明らかに奈緒美ちゃんではない声が曲に混じっているのに気づく。
「おおお」だか「あああ」だか知らないが、男とも女ともわからない奇妙なもの。
クラスメイトたちは小声でざわつき、友達の沙也は頭を押さえてうずくまってしまった。
明里は今日他に用事があったので来ていないが、沙也は明里と同じくらいよく遊ぶ子だ。
ボーイッシュな外見でたまにきつい物いいをすることもあるが、友達思いで面倒見がよく、サバサバしている。
「大丈夫？」
「……頭いたい」
それきり、黙りこんでしまう。
彼女を介抱、というかただ単に見守っていたら、他のクラスメイトが奈緒美ちゃんに声をかけて曲を止めた。
「なに？」
彼女が首をかしげると同時に、ハッキリ不気味な声がした。
「ナーオー、ナーオー、ナーオー、ナーオー、ナーオー」
奈緒美のナオ？
その野太い、間延びした声は彼女を愛称で呼んでいるように聞こえた。
私をふくめ、室内にいた全員がぞっとこおりつく。
声は一度かぎりではなく、ずっと続いている。

ふと、ネコのおたけびに似ていると思った。うちのチャロもたまにこんな声をだす。
だれかが奈緒美を呼んでいるわけではなく、野良ネコが迷いこんでいるか、機械の故障かもしれない。
他にもそう思った者がいたらしく、9人のうち2，3人が声のするあたりへ寄っていった。部屋の右隅あたりからのようだが、そこにはなにもない。私も後ろからのぞきこんだけれど、壁しかなかった。
隣に部屋はないし、外にいるのかもしれない。
「ちょっと壁の反対側みてくる」
そう告げると、沙也がついてきた。
「大丈夫？」
「外のほうがマシ」
そういうものか。
壁の反対側はただの廊下で、ネコも何もいなかった。
沙也が「このまま廊下でまってる」というので荷物をとりに部屋へ戻ると、さらにパニックがおきていた。
「テレビに逆さまの女が映った！」
”女幽霊は逆さまでなければならない”という法律でもあるんだろうか。
一人でいるときにこんな状況になったら泣きわめくけれど、あいにくその場には私をふくめて八人もいたのでまったく怖くなかった。
ちなみに、すでにさっきの声は消えていた。
クラスのみんなが店員を呼び、部屋の前でさっきの怪異について説明する。
店員は「今までこの部屋でそんな現象がおこったことはない」と青ざめて他の部屋を使うかどうか聞いてきたが、もちろん満場一致で否決され、そのまま帰宅することになった。
今まで冷静でいられたが、そこからはとても落ちつけなかった。
バス停や駅で沙也やクラスメイトと別れ、ついには奈緒美ちゃん

と二人きりの帰り道になってしまったからだ。
その頃には「戸和さんがいっていたのは奈緒美ちゃんの性格じゃなく、彼女に憑いてる変なものかもしれない」と思い始めていたので、何とも背中がぞわぞわする。
けれどクラスメイト相手にだんまりを決めこむわけにもいかず、口を開いた。
「今日なんか怖かったね～。お祓いとか行ったほうがいいかもね」
「は？」
「怖かったね」
奈緒美ちゃんは嘲笑するように口元を歪めた。
「あんなのだれかのイタズラに決まってんじゃん」
保月さんって騙されやすそー、と。
「……イタズラって、どうやって？」
「知らない」
それきり口を閉ざす。
まあ信じていないなら放っておこうと、私も黙っていた。
しばらくして電車を乗り換えたあと、ホームで「じゃあね」と簡単な挨拶をして別れ、ほっと一息をつく。
同時に肩をたたかれて、心臓が飛びだしそうになった。
「あの子、友達？」
バイト帰りだろうか、高橋さんが背後に立っていた。
まさか家庭教師の授業以外で出会うとは思いもしなかったが、考えてみれば彼は自宅から通勤しているのだから、そう遠くない場所に住んでいるだろうし、地元を歩けば遭遇する確率はそれなりにあるのだ。
「く、クラスメイト」
「ふうん。仲いいの？」
「いや、全然。クラスで遊びに行ったら帰り道が一緒になって……」
高橋さんが笑った。
「ならいい。なにやらかしたか知らないけど、あの子ヤバイもんが

憑いてる。あんま関わるなよ」
戸和さんと同じものを見たんだろうか。
「なにが見えたの？」
「え？　聞いちゃう？　それ聞いちゃう？」
高橋さんはたまに変なテンションになる。
「なんだろな……人じゃないかも」
すっと片手で駅名が書かれた看板を指す。
天井からつられているそれはだいたい2、3メートルくらいの高さだろうか。
「背があれくらいで、全身まっ黒で、首と手足が異様に細長くてボキボキしてんの。ヤバそうだったから顔は見てない。それがこんなかがんで、三角座りするみたいにして電車のりこんで、あの子についてった」
それと関係があるかどうかはわからないけれど、あのカラオケ屋の前で鳥の死骸が大量に発見されたり、奈緒美ちゃんが学校の階段から落ちて腕を骨折したりした。
彼女とは違う高校へ行ったので、その後どうなったかは知らない。

◆

小学生のころ。
夏休みに祖母の家へ遊びに行き、近所の川で泳いでいたら、父がつけもの石くらいの大きさの石を持ってきた。
全体的に白っぽくてごつごつした横長の石で、そんなに重くはない。
「見てみろ、これ水晶だぞ！」
いわれて見てみると確かに石の一部に楕円形のくぼみがあり、その中にはガラスにも似た半透明の石ができている。
日本の川で水晶ができるのかは知らないが、確かにそれは限りなく水晶に似ていた。

父はウキウキとそれをもって帰り、ご満悦だった。
その翌日。
親戚の結婚式に家族で出席したのだが、父と姉が食中毒で倒れた。
ちなみに同じ料理を食べた私と母、祖母など他の出席者はなんともなかった。
二人とも点滴をして二、三日くらいで回復したのだが、そのあと姉が川で溺れて岩にひっかかり、足から流血。父も夏風邪を引いて高熱を出した。
それなりに心配してはいたのだが、二人の看病は母と祖母がしているし、たまに様子をみるくらいしかやることもないのでヒマをもてあまし、私はフォーティーワンゲームで遊んだり従兄弟と宿題を分担したりしていた。
さらに二日ほど経った夜、部屋でたまたま荷物を整理している時にあの石を見つけた。
うちに持って帰るつもりらしく、バケツの中に入れられている。
私もこの石を気に入っていたので、なんの気なしにとり出してながめた。
これまでも川や移動中の車内などでうっとりとながめており、その度に綺麗な水晶だと思っていたのだが……どうしてか、その時はちっとも綺麗に見えなかった。
まるで石に寄生虫の卵がくっついているみたいに気持ち悪い。
こんな不気味な色をしていただろうか？　まっ白で透明がかっているのは変わらないが、なんだかガラスに入ったクモの巣みたいにも思える。
これをまた車に載せて家まで持って帰るなんて冗談じゃないと、こっそり近くの空き地に捨ててしまった。
まっくらで灯り一つない夜道を引き返す間、気のせいか草むらに置いてきたあの石に見られているような、あるいは石が追いかけてくるような妄想に襲われて、家まで走って帰った。
関係があるかは定かでないが、次の日ようやく父の熱が引き、だ

いぶ調子も良くなったので自宅に帰ることになった。
本当は念のためもう一日滞在したいところだが、仕事の都合でこれ以上いられないらしい。
荷物を車につめこむ最中、バケツからあの石が消えたことに気がついたはずなのに、父はなにもいわなかった。

◆

順調に成績が上がって親に喜ばれたり、テストでケアレスミスをしてしごかれたりしていた9月。
いつも通り私の部屋に入り、授業をはじめるまえに高橋さんがごそごそとぬいぐるみをとり出した。
抱き枕にできそうな感じのでっかいやつで、ふわふわしている。別に誕生日でもなんでもないのだが、昨日たまたまゲーセンでとれたのでくれるそうだ。
「ありがとう」
かわいいやつだし嬉しいけど、ちょっと背のびしたい年ごろの中学生としては子供あつかいは面白くない。
複雑な心境でぬいぐるみをいじっていると、高橋さんが意外そうに聞いた。
「趣味じゃなかった？」
「趣味だけどね」
ぬいぐるみを本棚の上にかざってみるが、少々バランスが悪い。
これは枕にしよう。
ベッドの上にぽんと置くと、高橋さんが爽やかに笑った。
「じゃあ今日は人形の怖い話な！」
「やめて」
まさかコレいわくつきじゃないだろうなと身構えたが、冗談だったらしい。
代わりにチケットをわたされた。

「うちの大学で学園祭やるんだけど、良かったら来る？」
大学の学園祭は思っていたより派手で盛大なものだった。
客で賑わい、花火大会なみの人混みができている。
入り口でゲストシールとパンフレットをもらい、ぶらぶらまち合わせ場所へ行くと、高橋さんとその友達らしい青年が三人いた。
しまった、友達誘ってくるんだった。
後悔しつつ声をかけると、案の定四人ともこちらにやってきた。
「けっこーここの本格的だろ？」
と高橋さん。
他三人もほぼ同時に声をかけてくる。
「ちっちゃいなー。うちの妹より可愛いわ」
「これが三年くらいしたらＪＫになるのか」
「暑かったろ。ジュース券をあげよう」
元々人見知りするタチだが、でっかい大人四人に囲まれると威圧感というか迫力があり、逃げ出したくなる。
高橋さんと三人のうち一人はわりと女顔というか、中性的な外見だからまだ平気だけれど、他二人はけっこうゴツイので特に緊張する。
「カテキョの生徒なんだっけ。こいつ、教え上手だろ。１聞いたら１０も５０も教えるからな。話長いんだ」
「わかりやすく教えてもらって助かってます。優しいし」
答えながら背中を冷や汗が伝う。
「正直に”あの人面倒くさい”っていっていいよ」
三人がどっと笑う。
「おまえらもう助けてやんねー」
高橋さんが笑って私の背を押す。
「じゃあ、後でな」
ずっと五人で行動するのかとヒヤヒヤしたが、そうではないとわかって内心胸をなで下ろした。
三人とはそこで別れ、たこ焼きをおごってもらったりミニゲーム

に参加したり、うっかり忘れていた例の幽霊がよく出る教室に連れて行かれたりと学園祭を満喫した。更に怖いというトイレは全力で拒否した。

和風喫茶で一息ついたとき、高橋さんがほほえんだ。

「次、お化け屋敷行こう」

学園祭

行ったことがないので興味はある。
たぶん暗い部屋にいくつかハリボテが置いてあって、物陰にお化け役の人がかくれているとか、そんな感じだろう。
「うん、行く！」
貞子みたいな格好してても、人間なんか怖くない。
と思ったが全然そんなことはなかった。
お化け屋敷が本格的すぎたのだ。
わくわくと入り口の黒いすだれをくぐって、足が固まる。
第一の部屋は、本物そっくりのお札で埋めつくされていた。
暗い室内が赤いライトで一部だけ照らされていて、よく見ると心霊写真まではってある。マネキンの首や人形など不気味な小道具が転々と置かれ、ＢＧＭはお経で、気味の悪いＤＶＤがえんえんと映されている。
進路の先にはお化け役の人間がすすり泣いてうずくまっているのだが、それが超怖い。なぜって、アレが人間なことはわかりきっているが、先へ進んだら確実に追いかけてくるのもわかるから怖いのだ。しかもその道がやたら細く、天井からも邪魔な障害物がぶら下がっている。二人連れの客の場合、後ろを歩く人間はアレに捕まるに違いない。
「私先行く」
「いいよ」
予想通りアレが奇声を上げながら猛ダッシュして追いかけてくる。
私もダッシュで逃げたが、高橋さんはお化けに捕まりながら「たしか何回か同じ講義受けたことあるよね」などと楽しそうに話しかけていた。その後も網をくぐったとたん不気味な音声が流れる廊下とか、笑う人形など様々な難所をぬけ、５分後には足がガクガクし、大変すずしくなっていた。

お化け屋敷なんか二度と行かない。
そんな決意を新たにして先へ進むと、最後の部屋にあったのはエレベーターだった。
特にこれといった装飾もなく、脅かす人もいない。
ただずっとドアが開かれている。
これに乗って他の階へ移動してくださいという事だろうか。
「これに乗るのかな？」
高橋さんは「さあ？」というだけで、進む気配がない。
先に見えている出口っぽい所へ行くかエレベーターで移動するか、私が決めていいようだ。
軽く前のめりになってエレベーターの中をうかがうが、なんの変哲もない。それでもなにか仕掛けがありそうで怖くて、結局入らず出口へ向かった。
が、出る前に高橋さんに呼び止められる。
「ひな、もう一度エレベーター見てみな」
ふり返ってギョッとした。
いつの間にか、エレベーターの扉が閉じている。
高橋さんはずっと真後ろにいたので、エレベーターのスイッチを押したりはしていない。
しかもその扉には『学園祭中使用禁止。このエレベーターを使用しないでください』と書かれた紙がはられていた。
「変なしかけだね」
「これに繋がってるエレベーターは他の階でも使用禁止になってるんだ。汚いエレベーターを見られないようにするためと、あとチケット持ってない客がここからお化け屋敷に入らないために。……なのにどうしてドアが開いてたと思う？」
嫌な予感。
「演出のためじゃないの？」
目の前でエレベーターのドアが開いた。
だれも乗っていない。

「じゃあ、今一人でにドアが開いたのはどうしてでしょう？」
エレベーターをずっと開けっぱなしにしておくことは簡単にできても、自動的に開けたり閉めたりするようになんて、まして遠隔操作なんてこの古いエレベーターでできるとは思えない。
「……まさか」
「そ。このエレベーター、でるって評判なんだ」
パキン、と天井が大きくきしむ。
私は走るようにしてお化け屋敷を出た。
出口でお清めの塩を受け取って、周囲に人がいることに安心していたら、高橋さんがニヤニヤしながらやってきた。
「大丈夫、あんなの全然ヤバくないから」
いわく、その筋でちょっと有名な人がここの講師にいて、その人が監修したお化け屋敷なのもあって本物が3、4匹まぎれこんでいたという。だがどれも危険なものではないので大丈夫だ、と。
「心霊スポット嫌いだっていったじゃん……」
「なんで？　怪談は好きだろ？　慣れれば楽しいって」
「楽しくないっ」
もちろん、この大学には二度と行かなかった。

◆

一時期、学校で”失神ごっこ”という遊びが流行った。
一人の鼻と口をふさいで心臓の辺りを10～20回強打するという悪趣味なものだ。たいていはなにもないが、ごく稀に失神する者がいるのが面白いらしい。
私も友達もこの手の遊びは嫌いなので話題にもしなかったのだが、運悪くそういうことが好きな連中に目をつけられ、一人で行動しているすきに空き教室に連れこまれ、二人がかりでやられてしまった。
「……っ」
床に座りこんだまま深呼吸する私の頭上で笑い声が響く。

「失神しないね」
「力がたりなかったんじゃない？」
「あたし握力あるんだけどなあ」
「ざんねーん。チャイム鳴ったし、いこ」
ばたばたと楽しげに去っていく。
他人をオモチャとしか見ていない価値観が信じられなくて、ショックでしばらく呆然としてしまった。
幸い二人とも女子だったので力が弱く、ちょっと息苦しいだけですんだのでだれにも言わなかったが、なぜか高橋さんにはバレてしまった。
「なんか危ない事しなかった？」
私の部屋で問題の解説をしている最中、なんの前触れもなくいきなりこれである。
霊感もち怖いとちょっと思った。
「してないよー」
正確にはされたわけだし。
いじめられたなんて恥ずかしくていえない。命に関わるような事ならいう決心もつくが、あれ以来たまに問題児二人が嫌味をいってくるくらいで、特に害もない。放っておけばそのうち声をかけてくる事もなくなるだろうと思われた。
「ならいいけど」
高橋さんは心なしか私の背後を見つめて、つぶやいた。
それから一週間くらいしたころ。
私に失神ごっこをやらかした二人が一ヶ月の停学処分になった。
うちの学校は屋上が施錠されているが、屋上の扉までの階段は普通に登れるし、そこまでは滅多に人が来ない。
そこに他のクラスの生徒を連れこんでまた強制失神ごっこを行ったところ、よろけたその子が階段から落ち、鎖骨が折れたらしい。
そこまで被害が出たのは一人だけだが、他にも被害者がいるのでけっこう内申に響くのではとクラスで噂になっていた。

私がすぐ先生にチクっておけば彼女は被害に遭わなかったかもしれない。
「……」
少し反省して「実は私も失神ごっこやられました」と担任にチクったところ、通りすがりに立ち聞きした沙也が「なんでいわなかったの！？　ＰＴＡにもチクってあいつら退学に追いこんでやれ！」と怒ってくれた。
先生は、
「いや、退学は……人生変わっちゃうから」
とかモゴモゴいっていた。
次の家庭教師の日、
「よかったな」
家に来るなり高橋さんがそういって、授業をはじめた。
まったく説明していないのに、全部見透かされていたような気がする。

◆

ある晩、夜中の3時ごろに崖から落ちたように全身がビクッとなって目が覚めた。
最近部活でいそがしいから疲れてるんだ、と気にしなかったけれど、次の夜は気持ち悪い夢を見て、その直後に同じようにしておきた。
内容はすぐ忘れてしまったが、ハエが視界いっぱいに広がっていたような気がする。
次の日もまた3時ごろに飛びおきた。
夢はまた忘れてしまったが、今度は拷問されたようなひどい恐怖感に襲われ、目が覚めてしばらくは肩が震え、あまりに怖かったのでそれからずっと電気をつけておきていた。
次の夜は泣きながら飛びおきて、自分の顔が涙でぐしょぐしょな

のが”漫画みたいだ”と思った。
次は、夢の中でずっと悲鳴を上げていた。それでいて妙に息苦しくて、叫びながら口をパクパクしていたら現実で少し口が開いて目が覚めた。
そんな状態がだいたい二週間近く続いて、私は高橋さんに相談した。
「もっと早くいえばいいのに。俺はてっきりテスト前だから無理なつめこみ勉強してんのかと」
宿題を広げた机を前に腰かけ、彼が心配そうな視線を投げてくる。
「テスト前日なら徹夜するけど、一週間前から徹夜なんてしないよ」
「……テスト前でも徹夜なんかしないといって欲しかったんだけど。俺が出した課題を毎日きちんとこなして学校の授業を真面目に受けて予習復習宿題さえやっておけばテスト勉強なんてする必要はないんだからな？　テストってのは今までの総復習にすぎないんだから、もっとつきつめれば必要な公式覚えて応用解けるようになれば――」
長いお説教が終わったあと、高橋さんは目を細めた。
「なんか罰当たりなことしなかったか？」
予想もしなかった言葉だ。
「え……まったく心当たりないけど。神社もお寺もお正月くらいしか行かないし」
高橋さんがしかめるようにして目をこらす。
目が悪いのだが、ギリギリ眼鏡をかけなくてもいいレベルなので裸眼でがんばっているそうだ。
「でもこれ神様っぽいぞ。すげー見えにくいしその辺の霊じゃない」
「神様！？　もしかして、うちの神棚にもお正月くらいしかお参りしないから？」
我が家にはささやかな神棚があるのだが、手入れは母が毎日していて、私はまったく手をつけていない。
「違う。でも神様ってのは神社でぽろっと悪口いっただけでも祟るからな。なんか、そういう些細な事したんだ」

「神様の悪口なんて……あ」
「いったのか」
高橋さんがニヤリとした。
「あー……いや、悪口じゃないけど、心当たりが……」
非常にいいにくい。
が、相談しておいて打ち明けないわけにもいかず、白状した。
当時私は友達数人と交換日記のような要領でノートに漫画を描いていたのだが、適当に考えたキャラの名前が日本神話にでてくるとある神様の名前と被っていたのだ。友達にそう教えてもらったが、かえって箔がついて良いかもとそのまま使っていた。基本的にカッコイイキャラとして扱ってはいたが、ノリツッコミの描写でそのキャラを「ウザイ」と描いたりもした。
高橋さんはしばらくお腹を抱えて大爆笑していた。
「なんだコレ、交換日記は聞いたことあるけど、今の子って交換で漫画描いたりすんの!?　コレか、ひなが描いたのコレか!?」
某幼女向けアニメが好きな大学生にそこまで笑われるすじあいはないと思う。
散々からかわれた後、しびれを切らして私はたずねた。
「……あの、それでコレ、どうすればいいの？」
「ん」
ひょいと消しゴムをわたされる。
「これで神様の名前書いたとこ全部消して当たり障りない名前に書き換えな。あとは寝る前にゴメンナサイしとけば十分」
「神社に持って行ったりしなくていいの？」
「うん。へーきへーき」
本当に、たったそれだけで悪夢を見なくなった。

宝石商の育て方

少し肌寒い季節になったころ。
「宝石商の育て方って知ってる？」
家庭教師の授業中、高橋さんが妙なことをいい出した。
「知らない」
「商人の中でも特に宝石を専門にあつかうやつを宝石商っていうのはわかるよな？　宝石商は本物と偽物の宝石の見分けがつかなきゃいけない。だから商人が後継者を育てるときは、小さいころから本物の宝石だけ見せて育てるんだ。そうして大きくなると、偽物を見たときに”これは違う”と一目でわかるようになる」
「へー、面白い」
偽物を見分けるにはまず本物を知れ。
これはどの業界にもいえそうだ。
「そうそう、今度の土日空いてる？」
「空いてるけど、なにすんの？」
高橋さんがにっこり笑う。
そういう顔をされると某男性アイドルによく似ていて、なんでもいうことを聞いてしまいそうになる。
「知り合いと車で出かけるんだけど、ひなも来る？」
が、このまえ痛い目にあったばかりだ。
「やめとく。心霊スポットだったら嫌だし」
「あーたーりー。じゃあ土曜日の昼な。昼間なら大丈夫だろ」
「嫌だっつってんじゃん！　知り合いさんと楽しんでおいでよ」
「俺、そいつ嫌いなんだよね。二人っきりとかありえねー。なんの拷問だよ」
高橋さんから笑顔がひっこんでちょっと驚いたが、流されるわけにもいかない。
「なんで嫌いな人と出かけるの。断るか、他の人誘えばいいじゃん。

高橋さん友達多そうだし」
「ひながいい。このまえぷるぷるしてて面白かったし」
こっちは笑い事じゃなかったというのに。
高橋さんはからかうように笑う。
「いつも助けてあげてるだろ？」

◆

土曜日の昼すぎ。
お守りやパワーストーンをカバンに忍ばせて渋々まっていると、知らない車が迎えに来た。
いつも高橋さんは車でうちに来るので、てっきり彼の車で行くのかと思っていたが違うらしい。
運転手は高橋さんの知人遠藤さん、助手席に二人と同じ大学の山田さん、後部座席に高橋さんと私が乗った。遠藤さんはチャラくて筋肉質だけどモテそうな感じの男性で、山田さんは”美人秘書”というイメージがぴったり似合いそうなスタイル抜群のセクシー美女だった。
「四人で行くことになったんだね」
こっそり聞くと、
「俺も聞いてなかった」
俺と二人でなんておかしいと思ったけど、と高橋さん。
どうやら遠藤さんはオカルト好きの山田さんをくどくのが目的のようだが、万が一怖い目に遭ったら嫌なので高橋さんを強引に呼んだらしい。
「それで、今日はどこ行くの？」
「●●●トンネル」
心霊特集などでよく聞く場所だ。
「必ず心霊写真が撮れるらしいよ」
今までに撮ったやつ見せてあげようか、と山田さん。

「山田さん俺とツーショットで心霊写真とろ山田さん」
家宝にするから、と遠藤さん。
「いいねー」
メンバーの中では高橋さんだけがそこに行った事があるらしく、たまに遠藤さんが高橋さんに道を聞いたり、高橋さんが指した行き先の地図を見て山田さんがナビしたりして、だいたい一時間後くらいに到着した。
山道に繋がる古びたトンネルがあり、左右には木が生い茂っていて、少し手前の歩道に緑の公衆電話ボックスが設置されている。車の交通量はかなり少ないようで昼間なのに薄暗く、カビ臭い雰囲気の場所だ。
「それじゃ、歩いて中まで行ってみっか」
高橋さんがいって、車を降りる。
一人だけ車に残っていようかとも考えたが、昼間だし思ったより怖くないので私も続いた。
直後、
「痛っ」
遠藤さんが肩を押さえて顔をしかめる。
「大丈夫ですか？」
「ああ、俺つかれやすいからさ～。こういう所くるともう、入る前から肩重くなったり頭痛くなったりするんだ」
「……そんな体質なのによくきましたね」
ちょっと呆れていると、遠藤さんが笑った。
「だって、面白いじゃん」
トンネル内では先頭が遠藤さんと山田さん、その後ろを私、そのまた後ろに少し遅れて高橋さんという順番に歩いた。
テレビでたまに見るくらいであまり知らないのだが、もしかして今は使われていないトンネルなんだろうか。
トンネルの中には灯りが一切なく、まっくらというよりまっ黒だ。かすかに見える出口からの光だけがうっすら不気味にさしこみ、

湧き水なのか雨水が残っていたのかわからない、得体のしれない液体が天井の一部からしたたっている。そのせいか空気も少しひんやりしている。どぶのような匂いが漂っていて、軽く鼻を押さえた。
「怖い？」
追いついて隣にならんだ高橋さんが問う。
「意外と平気。昼間だとあんま怖くないね」
以前友達と行ったカラオケの事を思い出しながら、「周囲に人がいれば結構大丈夫かも」なんて考えていた。
「じゃ、また今度昼間に心霊スポット行くか」
「絶対イヤ」
それとこれとは別である。
不意に前方から二人分の悲鳴が響いた。
遠藤さんがなにかを指さして、山田さんはその背にしがみついている。
「どうした？」
高橋さんがゆっくり歩み寄ると、
「そこに変な黒い影が！」
確かに黒い影がいた。
らんらんと緑に光る二つの目で警戒するようにこちらをにらみ、いつでも逃げ出せるように身構えている。
なんていうか……ネコだ。
「ネコだよ」
高橋さんが近づくと、怖がって出口へ走って逃げていく。
しっぽをボワボワにふくらませた黒ネコで、とても可愛かった。
「え、でも今確かにうめき声したよな。男の野太い声で」
「私には聞こえなかったけど、もう出よ。怖い」
二人がかけ足でトンネルを出る。
私たちも後を追うと、車の前でまた悲鳴が上がっていた。
窓、ボンネット、ミラーなど、車の大部分に人の手形がつきまくっていたのだ。少しなら気のせいですむが、こんなにおびただしい

量だとなにもいえない。
「すげー！　やっぱ本物だ●●●トンネル」
引きつった顔で写メを撮る遠藤さん。
トンネル内で撮った写メも心霊写真だったそうで、見せてもらったのだが、そっちの方はただの光の屈折にしか見えなかった。
「さすがにコレは光の加減じゃないですか？」
「ここ見てみ。顔が映ってるじゃん」
いわれてみれば、ギリギリそう見えなくもないような。
コメントに困って高橋さんに渡すと、チラッと見ただけで遠藤さんへ返した。
「高橋、なんか俺頭と肩がすげー寒いんだけど大丈夫かな？」
「高橋さんってそういうの詳しい人なの？」
遠藤さんの腕をつかんだまま山田さんが問う。
わざわざこんな所に連れて来なくても両想いなのでは。
「ああ、こいつちょっと大学で有名なんだ。親戚が神社やってるんだって。山田さんも何かあったらいえばいいよ。俺にいってもいいけど」
「へー、カッコイー。ひなたちゃんも霊感あるの？」
「私はただのつきそいなんで、全然」
苦笑すると、高橋さんが皮肉っぽく口元を歪めた。
「いいふらさないでね。あと俺、金とるから」
何回か相談した気がするが、私の相談料はカテキョ代に含まれているんだろうか。単に遠藤さんと関わりたくないから、牽制としていっただけのような気もする。
その後はファミレスに寄って帰宅した。
帰り道私は眠り、高橋さんはＰＳＰで遊んでいた。
遠藤さんは「トンネルの話をしていたら急にコンビニ袋がフロントガラスにぶつかってきた！」と騒いでいた。

◆

後日、家庭教師の時間に高橋さんがたずねた。
「この前のトンネルどーだった？」
「んー、昼間行ったからだと思うけど、テレビとかで有名なわりにあんま怖くなかった。でも遠藤さんは大変そうだったね」
「ああ、あれから三日間”微熱がでた”って大学休んでる」
「へー。霊感ある人は大変だね」
高橋さんがじとりとこちらを見た。
「……なーんで気づかないかな」
「え？」
物いいたげな視線を送られて考えてみるが、なんのことだかわからない。
やがて、盛大なため息とともに頭をなでられた。
「まあ、ひなはいいよ。まだ中坊だし、アレに比べりゃ現実的だ。でも、他人の話をうのみにしやすいのはちょっと問題だからそこは気をつけような」
「意味がわからないんだけど」
「あのな、この前行ったトンネルは心霊スポットなんかじゃない。ふっつーのトンネルなんだ。霊なんかいなかった」
耳を疑った。
「え！？　でも、●●●トンネルは本当にヤバいってよく聞くよ？　怪談好きじゃない人も知ってるくらいだし」
「この前行ったのは●●●トンネルの何個か手前にあった別のトンネル。どういう反応するか見てみたくて、わざと違う場所に誘導したんだ」
おまえだまされやすいぞ、と高橋さん。
「でも、遠藤さんは肩が痛くなったり変な声聞いたりしたって、なにか色々いってたよ？　それにさっき熱がでて学校休んでるって」
「全部ただの思いこみ。あいつはなんでもかんでも心霊現象に結びつけすぎなんだよ。そりゃ肩に霊しょって肩が痛くなるやつもいる

よ。でもこの前のはただの肩こり。だいたい、普段からちょっと転んだくらいで幽霊幽霊いってるやつなんだ」
絶句してしまった。
霊感がある人を何人か知っているので、彼もきっと本当にそうなんだろうと思っていた。
「じゃ、じゃあ車についてた手形は？　私も見たけど、来たときはあそこまでついてなかったよ？」
不機嫌そうに眉根を寄せていた彼がようやく笑った。
「手形なんてさ、だれにでもつけられると思わないか？」
「まさか……」
「皆が先にトンネル入ったすきにパパーッと。あの馬鹿、自分の車汚されて大喜びで写メ撮ってやんの。笑えるだろ？」
そういえばあの時、高橋さんは少し遅れて入ってきたっけ。
「笑えないよ」
「いいじゃん喜んでたし」
それより、と高橋さん。
「宝石商の話覚えてるか？」
「覚えてるけど」
「もし、本物と偽物の区別がつかない宝石商がいたらどうなると思う？」
「店がつぶれるか、クビじゃない？」
現実にはけっこう偽ブランドのバッグや時計が出回っているらしいけど。
「じゃあ宝石商じゃなくて、霊能者だったら？」
「え？」
「本物と偽物の区別がつかない霊能者」
「えーと……やっぱり売れなかったり、倒産したり」
違う違う、と高橋さんが笑う。
「ただのキ●ガイになるんだ」

クマ

休日の昼間。
家でごろごろとテレビを観ていたら、
「高橋さんってたまにすごいクマ作ってるけど、なにか夜遊びでもしてるの？」
母にそんな事をいわれて驚いた。
「え？　クマなんかあったっけ」
母があんぐりと口を開ける。
「信じられない……あんた、毎週2回も会ってるくせに」
「そんなしげしげ見ないからなあ」
綺麗な顔だとは思うけれど。
人見知りのせいか、私は人の目を見て話すのが苦手だ。目が合ったままだと緊張してしまってすぐそらす。あるいは、相手が目をそらしている間にちらっと顔を見る。この悪癖は学校の教師や沙也にさんざん注意されているのでさすがに自分でもまずいと思い、最近ようやく会話中に何回か目を合わせられるようになってきたところだ。
「バイトかけ持ちしてるとか、大学がいそがしいんじゃない？」
「ああ、それはありそう」
高橋さんは髪を染めていないし、口を開かなければ真面目そうに見える。性格も器用というか、世渡り上手なタイプだ。
そのおかげもあって、母はそれだけで納得したようだった。
今度クマがあるか見てみよう、と思っていたのに、いつの間にかすっかり忘れて冬を迎えた。
高橋さんが二週間も家庭教師を休んだ。
インフルエンザが長引いているらしい。
家庭教師の会社から代理の教師を提案されたが、「じきに治るだろうし、まだ受験までだいぶ時間もあるので」と丁重に辞退した。

彼以外の家庭教師なんて考えられない。
部屋で一人勉強していたら寂しくなって、メールを送ってみた。
「大丈夫？　お見舞い行こうか？」
少し前にインフルエンザの予防接種を受けたし、たぶんうつらないだろう。
返信メールには住所と最寄駅だけが書かれていた。
来いということだろうか。
「じゃあ、ちょうど明日休みだから明日の昼ごろ行くよ。なにか欲しいものある？」
「びわゼリー」
と珍しく短い返信があった。
そこは高そうなマンションだった。
駅からも近くて清潔そうで、「将来ひとり暮らしするならこういう所がいいな」なんて考えながら玄関に近づくと、ドブと排泄物が混ざったような異臭が鼻をついた。
「うっ？」
生ゴミか動物の死体でもあるのかと思った。
でも、それらしい物は見当たらない。
今たまたまゴミがないだけで、普段は玄関をゴミ捨て場にしているのかと疑いたくなる匂いだった。
綺麗な所なのにもったいない。
オートロックを解除してもらってガラス張りの玄関に入り、エレベーターへのりこむ。
新しくはないが清潔なその密室で１０階のボタンを押す直前、無意識に背後をふり返った。だれかが後ろにいたと思ったのだが、別にだれものっていない。影で黒くそまったガラスが鏡と化し、私の後ろ姿だけが映っている。
気をとり直してボタンを押した。
部屋の前でインターホンを鳴らすと、フラフラの高橋さんが出てきた。

「よ。いらっしゃい」
額に冷えピタをはっているが、それがなくても一目で病人だとわかる。
「……高橋さん、病院行った？　顔が青色とおりこして緑がかってキモイんだけど」
「キモイ！？　……三日寝てないからな」
ショックを受けたらしく、壁にかかった鏡をのぞきこむ。
「インフルエンザかかってる時に三日徹夜とか、死亡フラグにも程があると思うよ」
「そうなんだけどなー……不眠症なんだ」
小さく苦笑した横顔を、つい凝視してしまった。
いつもは処方してもらった睡眠薬を飲んで寝ているが、たまに薬が切れた時などはこうやって寝不足になり、どんなに疲れていても眠れないのだと彼はいった。
薬をもらいに行かなければと思っていた矢先にインフルエンザにかかり、しばらくはインフルエンザ用の薬で眠れていたのだが、それも切れてしまった。
「じゃ、また病院行って薬もらいに行かなきゃ駄目じゃん」
進められるままクッションに座り、買ってきたびわゼリーや栄養ドリンクなどをわたす。
部屋の中はわりと片づいていて、せんとくんクッションなどネタ系グッズがぽつぽつ置かれている。
さっそくゼリーを口にしながら、高橋さんがつぶやいた。
「面倒くさくってなー。だから今日ひなが来てくれて助かった」
「市販の風邪薬で、眠くなるやつ買ってこようか？」
「いるだけでいいよ。だれかいれば眠れる」
「……わかった」
その言葉どおり、高橋さんはゼリーを食べ終えると床で眠ってしまった。
目の下には濃いクマが浮かんでいるし、少しやせたような気がす

る。
いつも笑っているから人生楽しくて仕方ないのかと思っていたけれど、そうでもないようだ。
彼に毛布をかけて冷えピタをとりかえて部屋を換気して、それでやる事がなくなってしまった。
お見舞いの品をわたしてすぐ帰るつもりだったけれど、人がいた方が眠れるというのならもう少し長居した方がいいんだろうか。
迷ったあげくに台所を借りて、おかゆとゼリーを作ってみた。
味見をして「もう少し料理の勉強しておくんだった」と軽く後悔したが、まあ……食べられなくはないし。ゼリーは普通の味だからOKという事にしておこう。
外はまだ明るかったので、あとは部屋の本棚にあった漫画を読んでいた。
夕方が近づいてきたころ。
ちょうど玄関の方だろうか。ドオン、と窓の外で重たいものが落ちた音がした。
なんだろうと顔を上げ、ついでにそろそろ帰ろうと立ち上がったとき、急に身体が引きつった。
動かそうとすると激痛が走る。
足がこむら返りになった時みたいに全身が引きつって、息苦しい。
けいれん？
それとも、これが金縛りってやつだろうか。立ったままなるっておかしくない？　何で？
背中に氷がはりついたみたいに寒くて、だらだら嫌な汗が出る。
するっ、と音がした。
スカートを引きずるみたいな、衣ずれの音。
それが背後から聞こえて、だんだん近づいてくる。高橋さんは目の前で眠っている。部屋には他にだれもいないはずだ。靴もなかったし、ひとり暮らしだといっていたし……それにこんな風にハアハアいいながら近づいてくる人なんて、生きた人間でも嫌すぎる。

「……っ」
高橋さん。
高橋さん、なんとかして。
助けを求めようとするが、声が出ない。
口は動くのに声がかすれて、まったく音が出なかった。
だんだん息苦しくなってくる。
ぽたぽたっ、と液体がしたたる音がした。
「さわんな」
不意に高橋さんが低くうなった。
悪夢から覚めたように唐突に息ができるようになる。やっと体が動いて、私はしばらくゼーハーゼーハーと深呼吸を繰り返した。
室内には私たち以外だれもいない。
液体が落ちたあたりの床を調べても、ぬれた形跡は見当たらなかった。
息を整えてふり返ると、高橋さんはすでに身をおこし、上着を羽織っていた。
「送ってく」
「いいよ、病人だし。ていうか今の」
「平気平気。寝たら調子よくなった。熱も下がったし」
「こっちこそ大丈夫だって」
「じゃあ玄関まで」
二度目に通った玄関は血の匂いがした。
辺りに匂いの元はない。通行人も気にしていないようだった。
「絶対ふり返るなよ。少し寄り道して帰れ」
そういって高橋さんに背中を押される。
とっさにふり返りそうになって、そのまま小走りになった。
「う、うん。じゃあまた」
あそこは幽霊マンションかもしれない、と帰りの電車でゆられながら考えた。
高橋さんの部屋もおかしかったが、よく考えるとエレベーターで

気づくべきだった。
ふり返ってガラスを見たなら、ガラスに映った自分と目が合わなければおかしい。どうして自分の後頭部が映っていたのか。
ぞっと悪寒が走って、軽く首をふった。
これ以上考えるのはよそう。あそこにはもう行かない。それでいい。
駅まで眠ろうと座席で目を閉じていたら、近くにいた私服の女子高生が、
「なんか血の匂いしない？」
とヒソヒソ話を始めた。
高橋さんの言葉が脳裏に浮かぶ。
ふつう、暗くなる前にまっすぐ帰れといわないか。以前もあまり夜道を歩くなと忠告してくれた。
なのにどうして今日は「寄り道して帰れ」といったのか。ふり返ったらどうなるのか。
血の匂いの源が私についてきているから、それをどこかでまいてから帰れということ？
進行方向とは違う車窓の外を目で追いそうになって、とっさにうつむく。
いたたまれなくなって車両を移り、駅からは本屋に寄って帰った。

◆

その次の週。
高橋さんが家庭教師に復帰した。
クマは消えているし、血色もいい。
「治ったんだ。良かったね」
「ああ、この前はありがと。ゼリー美味しかった」
おかゆの味については聞かないでおこう。
お礼にもらったミスドのドーナッツを机の前でかじっていると、

この前の説明をしてくれた。
あのマンションは半年に1度くらい、飛びおり自殺がおこるらしい。
今まで5人くらい飛びおりたのだが、みんななぜか10階のわたり廊下から玄関の前へ落ちていくのだそうだ。
怪奇現象にあう人も多く、窓の外でだれかが飛びおりたのを目撃してあわてて下をのぞくとだれもいなかったり、エレベーターの中でミンチみたいに潰れた肉塊を見たり、部屋で金縛りにあったりするので空室も多い。
そんなわけで家賃が安いので住んでいるらしい。
特に高橋さんの部屋は去年飛びおりた人が住んでいた部屋で、クローゼットから骨や脳みそがはみ出た女が出てきたり、勝手にシャワーから水が出たり、夜中に首をしめられたりする。
普段はそういう悪さをしないように押さえこめるので時間をかけて浄化していたそうなのだが、この前は高橋さんが弱っていたので出てきてしまったそうだ。
「……行くんじゃなかった」
高橋さんが笑う。
「また来いよ。もう部屋には出ないから」
「成仏したの？」
「いや、ムカついたから消した。だから他のはともかく、俺の部屋にはもう出ない」
「他の場所には出るの？　玄関とか」
「でるよ」
「じゃあ行かない」
いうと、高橋さんが不服そう顔をした。
「友達みんなそういうんだよなー」
引っ越せばいいのに。

首つり

高橋さんが変になった。

毎週のように遊びに誘ってくる。買い物とかカラオケとか、オカルトと関係ない所だからそれはいいけれど、さりげなく「かわいい」とかいってくる。以前は手にふれるのも躊躇して気を使っている節があったのに、軽めのスキンシップが増えた。気のせいか、たまに女を見るような熱っぽい目でこちらを見つめている。

トドメはこの前の家庭教師の日。

いつも通り私の部屋でおやつにシュークリームを食べていたら、カスタードがはみ出て左手がべたべたになってしまった。

人前でなめるのもお行儀が悪いかなと思ったので手を洗いに行こうとしたら、高橋さんに笑って手をとられた。

「手、べたべたじゃん」

くすぐったい痺れのような感覚とともに、熱くて湿ったものが手のひらを何度かなぞる。

一言でいうと、犬みたいにペロペロなめられた。

もう石化状態というか思考停止状態というか、声も出せずにいたら、高橋さんが蠱惑的な目でこちらをまっすぐ見つめたまま、私の指先にちゅっと口づけた。

うぎゃあああああああああああ。

叫ばなかった自分を褒めてあげたい。

気障すぎてクサすぎて鳥肌が立つ。同時になぜか、心臓がきゅうううううっと絞めつけられた。

「次のカテキョの日、どーすればいいと思う……？」

後日、人気のない学校の裏庭で友達の明里と沙也に小声で相談しながら、私は軽くうつむいた。

明里がうっとりした表情で目を輝かせる。

「ひなちゃんが嫌か嫌じゃないかが大事だと思うんだけど」

沙也は対照的に顔を引きつらせた。
「ありえない。教え子に手だすって最低じゃん。クビにしなよ」
「沙也だって、大学生の彼氏がいるくせに」
明里がからかうように告げる。
「と、歳のことはいってないでしょ！　光一さんは紳士だし！　そんな変なことしない」
「……クビにはしたくないな。高橋さんの授業も怪談も好きだし。ふつーにこのままの関係でいたいっていうか。スキンシップ過剰なだけかもしれないし」
つぶやくと、二人はまた対照的な顔をした。
「もう少し、様子みてみれば？　ヤバいと思ったらいつでもクビにできるでしょ」
と明里。
その言葉でちょっと気分が軽くなった。
「そうだね。そうする」
沙也がじとりとにらんでくる。
「ひなた、隣のクラスの遠藤君好きっていってなかった？」
「うん、そうだけど。遠藤君、最近林さんとつき合い始めたんだって。だからもういーかなーって。ほとんど話したこともなかったし」
軽く笑っていうと、なぜか盛大にため息をつかれた。
そういえば、と明里がいう。
「あたしも相談があるんだ」
家族で買い物に出かけた、帰り道。
すっかり日も落ちて暗くなり、一日の疲れがでて明里は後部座席で眠っていた。
家まであと少しというころ。
突然、車の窓にバンっとなにかがぶつかる音がして目が覚めた。
父が鳥でもはねたのかと思った。
けれど父は平然と車を運転しているし、助手席の母も音に気づいていないような顔で前を見ている。

気のせいだったのかな、とまたうとうとしたとき。明里の真横、後部座席の窓からなにかをたたきつけるような激しい音がバンバンバンバン連続で響く。

まっくらな窓の外に首にロープを巻きつけた腐った男がいて、後部座席の窓を激しく両手でたたき続けていた。全身緑がかっていて口からはだらりと長い舌をはみ出し、首が異様にのびている。身体にはびっしりとうじが湧いていた。

停車中も走行中もそれはずっと張りついたようについてきて、今も近くの木の影にいるという。

ずっと明里についてきているのだ。

「どうしたらいいと思う？」

彼女は困ったように笑った。

「戸和さんに相談してみたら？　あの子こういうの得意でしょ」

戸和さんはクラスで評判の霊感少女だ。

沙也の言葉に明里はほおづえをついた。

「戸和さん苦手。……ひなちゃん」

なんとなーく目をそらしていたら、明里がしゃがみこんでかわいく視線を合わせてきた。

「高橋さんに相談してくれないかな」

◆

「お礼になにしてくれる？」

次の家庭教師の日、ニヤニヤしながら高橋さんがいった。

「……お金はちょっとしかない」

私のお小遣いは月千円だ。

バイトしようにも、中学生を雇ってくれる所なんてほとんどない。

「けっこうさ、そういう相談は多いんだ。オカルトで飯食ってくつもりはないけど、無償で引き受けてたらこっちの身がもたない。どうしても引き受けるものと、断るものの基準を作らざるを得ないん

だよ。なぜかっていうと、そういう相談事を持ってくるやつはたいてい霊媒体質で祓っても祓っても霊を拾ってきたりする。俺が一生守ってあげるわけにはいかないだろ？　嫌だし。拾わないように気をつけるとか自分で祓えるようになるとか、その人自身がなんとかするのが一番いいんだよ」

「でも、困ってるんだよ」

「だから、なんかしてくれるなら引き受けてもいいよ。例えば俺の家に遊びにくるとか」

「え」

ぎしり、と錆びたロボットみたいに身体が硬直する。

この前は知らなかったが、姉情報によると一人暮らしの男の部屋に行くというのは「やらしーことされても文句いえない」的な意味があったりするらしい。

まさか、そういう意味で誘われているのか？　いやいやまさか。勘違いだろう。友達と違って私はモテないし。

「でるからヤダ」

「部屋にはでないよ」

イスに座ったまま、高橋さんが軽く身をのりだす。

「マンション全部どこにもでないならいいけど」

「それはちょっと無理かな。バッチリ霊道通ってるし。だいたい霊なんて、まったくでない所の方が珍しい」

また行きたくない要素が増えた。

「ま、嫌ならいいよ」

高橋さんが私の髪をなでて、テキストの採点を再開した。

その横顔を見ながら少し考えて、答えた。

「いいよ、行くよ」

やらしーことされる覚悟を決めたわけじゃない。

彼の目の下にクマが浮かんでいたからだ。

変なことしたら、噛みついてやる。

◆

学校帰り。
通学路の途中のファミレスで私たち四人はおちあった。
「カッコイイじゃーん」
面白がるように明里がささやき、
「腹黒そう」
沙也は鋭い視線を注いでいる。
沙也の好みはがっしりした男らしい人、平たくいえばマッチョなので高橋さんとは真逆だが、なにも敵視しなくてもいいと思う。
「ろりハーレムだな」
なんだと。
高橋さんはなんかゼリー系のデザートを食べていた。
ゼリーばっかり食べて飽きないんだろうかこの人は。
一同が注文を済ませて店員さんが下がったあと、おもむろに高橋さんが口を開いた。
「明里ちゃんさあ、お父さんにこのこと話した？」
「え、ううん。うちのお父さんこういうの信じないから」
「俺にいわれたっていうのは伏せて欲しいんだけど、聞いてみな。あごにホクロがある三十歳くらいの、Tシャツ姿の男のことなにか知らないかって」
「すごーい。本当に見えるんだぁ」
喜ぶ明里。
沙也はあからさまに渋い顔をしている。
「明里のお父さんがなにかしたっていうんですか」
高橋さんがくすっと笑った。
「そうはいってない。お父さんが家に連れて帰ってきたものだけど、明里ちゃんのそばが居心地よくってくっついてるんだろ。これは今日俺が持って帰るから、もう明里ちゃんの所には出ない。それでいい？」

明里と私の方を見る。
ケーキに夢中になりかけていたのがバレたのだろうか。
「ありがとうございます」
二人でうなずくと、高橋さんがこの前のような話をした。
やたら長くて丁寧な説明だったが、要約すると「今後は自分でなんとかしなさい」ということ。
明里は霊を引き寄せやすい体質で、おそらくそれは治らないらしい。今回の霊はそんなに厄介なものではないし、徹底的に無視するだけでいつの間にかいなくなるものもいるからそうしろ。今回は特別にお金はとらないが、霊能者なんてものに頼めば法外なお金を請求されたりむやみに脅されたり、逆に変な霊をつけられたりすることもある、とかその他もろもろ。
あんまり長いので私は途中から聞いていなかった。
ちなみにファミレスの代金は全員分、高橋さんがおごってくれた。
高橋さんと別れてから、げっそり疲れたような顔つきで沙也がいった。
「……そんな悪い人でもないかもね、あの人」
「うん。怒られちゃった」
同じような表情で明里がうなだれる。
当事者だけあってあの長い話を上の空で聞くわけにもいかず、全部まじめに聞いて疲れたのだろう。私も家庭教師のときたまに同じ目にあう。
「幽霊、いなくなった？」
話題を変えようと思って問うと、明里がにっこり微笑んだ。
「うん。ありがと！」
後日。
明里の父はデパートの設備管理の仕事をしているのだが、そのデパートのトイレで首つりがあったのだと教えてくれた。
発見し、遺体をロープから降ろしたのは明里の父で、首をつったのは三十二歳の男。あごにホクロがあり、汚れたTシャツを着てい

たという。

◆

その週の土曜日。
お守りとパワーストーンと、防犯ブザーをカバンに入れて高橋さんのマンションを訪れた。
ちなみに、今日の玄関はゲロの匂いがした。
怖くて上は見れなかった。
そしてエレベーターの後ろガラスも見れなかった。
のってから気づいたけれど、もし次があればエレベーターまで迎えにきてもらおう。さりげなく天井にお札がはってあるのが怖すぎる。
「よく来たな」
「約束だから」
上機嫌の高橋さんにうながされて奥へ入る。
部屋にはプレイステーション3が設置されていた。そばにはソフトが何本か転がっており、DSやDVDもある。ナナシノゲエム目というゲームが非常に面白そうだった。
「好きなので遊んでいいよ。俺は寝る」
なんだ、やっぱり勘違いだったんだ。彼はただ睡眠不足を解消したいだけだった。
恥ずかしいようなほっとしたような、複雑な心境で胸をなで下ろす。
「また薬切れたの？」
「いや、わざと飲んでない。少しずつ薬なしでも眠れるようにしていこうと思って慣らしてるんだ」
「……それはえらいと思うけど、それで寝不足で困ってたら意味なくない？」
「ヤバいと思ったら飲んでるよ」

家で作ってきた桃とりんごのゼリーをわたすと、喜んで食べ始めた。
「高橋さんって偏った食生活してそう」
「心外だなー。俺は料理上手いよ。あんま作らないけど、作る時はけっこう本格的にやるし。今度作ってやるよ」
「ふーん」
だれか人がいれば眠れるんなら、家族と同居すれば困らないんじゃないかな、とふと思った。
でも、それはいってはいけないような気もした。
「なんで眠れないの？」
高橋さんがスプーンを置いて、こちらへ寄ってきた。
「寝たら殺されるような気がするから」
息がかかりそうなくらい顔が近くてドキリとする。
高橋さんはふっと笑って、私のひざで眠ってしまった。

斉藤さん・前編

「またゲームしにおいで」

そんな言葉につられたわけではないが、別に変なことはされなかったし、共同玄関から異臭がしたり変な音が聞こえるくらいであまり怖くなかったので、あれからたまに遊びに行くようになった。

やがて、私は中学三年生になった。

「この調子なら志望校のランク上げれますよ」と高橋さんがうちの親に余計なことを吹きこんだり、そのおかげで進路についての家族会議が開かれたりしたが、それなりに平穏な日々を送っていた。

そんな時期に彼のマンションで聞いたのだが、高橋さんは小学校低学年のとき母親に殺されかけたそうだ。

家でうたた寝をしていたらいきなりクッションを顔に押しつけられ、泣いても暴れてもやめてくれない。もう駄目かと思ったとき、物音を不審に思った弟がドアを開けて入ってきて、ようやく母は手を止めた。

「今はふつーに仲いいんだけどな。当時はいろいろ大変で、精神的にキてたらしいんだ」

父の仕事の都合で転勤を繰り返していたのだが、そのころはちょうど幽霊アパートに住んでいたと彼は語る。

夜中にだれかがドアをかきむしる。だれも来ていないのにピンポンが連続で鳴る。壁に人形のシミが浮いている。寝苦しくて目を覚ますと、腹の上に不気味な影が乗っている。その他いろいろな心霊現象に高橋さん一家は悩まされたが、彼の母を精神的に追いつめたのは、子供の高橋さんが人形のシミと楽しげに会話する光景だった。

しかも、ふとした瞬間に人形のシミの部分に変な女を見たり、高橋さんと会話する知らない男の声が聞こえてくる。彼を叱るとラップ音が響き、窓が割れた。

そのうえ高橋さんは外でも幽霊が見えるなどというので小学校に

呼び出され、近所からずいぶん不気味がられた。
「ほんと限界だったんだろうな」
夜中におきると母が包丁を手にじっとこちらを見つめていたり、突然知らない土地に一人置き去りにされ、考えなおしたように翌朝迎えに来たりされたこともあった、と彼は苦笑した。
「俺が幽霊幽霊いわなくなって、アパートも引っ越した後はそんなことまったくなくなったけど」
「……」
それでずーっと不眠症をわずらっているのか。
幽霊に殺されるから眠れないのかと思っていたのに、想像以上のヘビーな話に私はなにもいえなくなった。
とりあえず、彼にクッション投げは厳禁だ。
「ごめん、引いた？」
高橋さんが顔をのぞきこんでくる。
「深刻そうに聞こえたかもしれないけど、俺はただの怪談レパートリーの一つくらいにしか思ってないから」
気にすんな、とほおをペタペタ触られた。
「あ、うん。眠れるように……なるといいね」
気の利いた言葉が浮かばず、高橋さんの頭を両手でなでると、彼はくすぐったそうに笑った。
「ちゅーしていい？」
「嫌だ」

◆

春先のある日。
いつものように高橋さんのマンションでゲームに熱中していたら、チャイムが鳴った。
来客なんて初めてだ。
高橋さんをおこそうかどうしようか迷ったあげく、インターフォ

ンに出る。
カメラには大学生くらいの男の人が写っている。
金に近い茶髪で目つきが悪くてしかめっ面で、背が高い。普通体型なのに筋肉質で、なにかスポーツというか暴力をたしなんでいそうなただならぬ雰囲気がただよっている。服は普通のシンプルなものだが、いかんせん眼光がするどすぎる。
高橋さんにこんな友達がいるとは信じがたいが、ひとり暮らしの彼を訪ねてきたんだからやっぱり友達だろう。……危ない知り合いでないことを祈る。
なんか怖そうなので居留守を決めこみたいが、あいにく部屋の主は私ではないのでそうも行かない。
「ど、どうぞ」
マンションの入り口はオートロックになっていて、中の住人にそれを解除してもらわないと玄関にも入れない。なので一言つげて玄関のカギを開けると、少しだけ驚いたような顔をして入ってきた。
しばらくして、さっきの人がやってきたらしく部屋の方のチャイムが鳴る。
「すいません、高橋さん今寝てて」
ドアを開けて伝えると、ギロリと睨まれた。
「妹？」
「えっ」
「高橋の妹？」
「いや、ただの生徒です。家庭教師の」
勧めるまでもなく靴を脱ぎ、中へ上がっていた男がつと足を止めた。
「まさか今シャワー浴びてるとか？」
嫌そうなつぶやきに、こちらも思わず嫌そうな顔をしてしまった。
「いや、寝てますって」
「裸で？」
「違います！」

ただの生徒だといったのになにを考えているのか。
ソファでだらしなく寝転がる家主を見せると、男が目を鋭くした。
「おこせ」
自分でおこせばいいのに。えらそーに。
内心少しムッとしたが、怖いので大人しく高橋さんをゆさぶった。
「高橋さん、高橋さん。お客さんきてるよ！」
ところが彼はなかなかおきない。
いつも夕方くらいまで熟睡しているから、それが癖になってしまっているのだろう。
しばらくゆさぶったのち諦めてふり返ると、男は放置されたままのゲーム機をじっと睨んでいた。
「あのー、おきないんで、自分で」
ずいっと紙袋をつきつけられる。
「そこのロリコンにわたしとけ。中身は見るなよ。１８禁だから」
冗談なのか本気なのか、男は嘲笑するように口をつり上げた。
「はあ」
とりあえず受けとると、意外とけっこう重かった。見下ろすと箱のようなものが入っている。
男はすぐにきびすを返し、さっさと帰って行った。
夕方、目を覚ました高橋さんに伝えると、
「あー、斎藤かな。バイト仲間だよ」
と軽く笑っていた。
「バイトって、カテキョの？」
「そー、カテキョ」
あんな濃い茶髪に仏頂面で家庭教師がつとまるのか。よく見たらヒゲも生えていてピアスまでしていたけど。
こっそり思ったが、いわないでおいた。

◆

二度目の遭遇はそれから一月もしない内におこった。
「またおまえか」
「保月ひなたです。斎藤さん」
例によって高橋さんのマンションで、おきない家主を前にして斎藤さんとやらが睨んでくる。
「こいつといて気味悪くないのか？」
幽霊が見えることだろうか。
知らないふりをした方がいいかなと迷ったけれど、高橋さんの友達なら平気だろう。
「高橋さんは変だけど面白いし、私もオカルト好きだし、他にも霊感ある人しってるから、別に」
「あっそ」
斎藤さんは小さな紙袋を置くと、その辺にあったメモ帳になにかを書いてこちらに押しつけた。
「ロリコンにはいうな」
それきり帰ってしまう。
来年には高校生になるし、そんなロリロリいわれる歳じゃないんだけど。だいたい、高橋さんにはからかわれているだけだと思う。
複雑な心境でメモを見ると、そこにはこう書かれていた。
「5月10日PM2時●●駅」
ちょうど休みだったので来てしまった。
なんとなく、高橋さんのことで話があるんじゃないかと思ったのだ。
が、そこには話どころか本人がいた。
「ひな。どっか行くの？」
改札前で驚いたように問われて返事に困ったら、
「俺が呼んだ」
後ろにいたらしい斎藤さんが答えた。
「は？」
高橋さんが今まで見たこともないような形相でキレて、血の気が

引く。
「こいつも連れてく」
「意味わかんねーんだけど」
冷え冷えした声音が怖すぎる。
よくわからないけれど、来てはいけなかったみたいだ。
「ごめん、帰る」
「いいから来い」
斎藤さんに射殺するような目で睨まれる。
どーしろというのか。
高橋さんは珍しく厳しい顔で押しだまってしまった。
でも、もうここまで来ちゃったし。
どうにでもなれと切符を受けとり、電車に乗った。
移動中、高橋さんは一言も口を利かなかった。斎藤さんは無口だし私もそんなに話す方ではないので、やけに静かだった。
駅からはバスになり、市民病院で降りた。
初めて来た所だがけっこう大きくて古い病院だ。壁が黒ずんでいて、所々ひび割れも見える。それでも患者は多いようで、駐車場はそこそこ車で埋まっていた。
「病院で何するの？　お見舞い？」
「見ればわかる」
「ひな。そこの売店で一時間くらいお茶してまってててくれないか？」
ようやく喋った高橋さんが猫なで声を出し、斎藤さんがそれをさえぎる。
「往生際が悪い」
二人の間に火花を見た気がした。
病院の受付で高橋さんが名乗ると、ほどなく白衣姿の男の人がやってきた。
たぶんお医者さんの一人だろう。
少しおどおどしていて、ころっとした体型がなんだかハムスターに似ている。失礼かもしれないが、ちょっと可愛い印象のおじさん

だ。年上の年齢はよくわからないけれど、五十代後半くらいだろうか。
「遠くから来てもらって悪いね」
「いえ。こいつが前に話した斎藤です。この子は……まあ、邪魔はしないんで気にしないでください」
さっきまでの不機嫌はどこ吹く風といった様子で高橋さんがいう。
名札を見たところ、お医者さんは東山さんというようだ。
東山さんがきょとんとする。
「この子もなにかできるの？　除霊とか」
除霊。
その単語を聞いてつい高橋さんを見る。
もしかして、心霊関係の用事でここに来たんだろうか。ちょっと前、山田さんに「心霊相談するなら金とるよ」とかいってたけど、もしかして本当にお金もらって霊能者みたいなことしてるのかな。悪霊退治とか……ん？
おそらく東山さんは依頼人で、ここはいかにも出そうな病院で。
つまり。
怖い話は好きでも怖い目にあうのは嫌いなくせに、自分で墓穴を掘ってしまったと気づいてひそかに頭を抱えた。
事前にそう説明してくれれば、頼まれてもついて行かなかったのに。体験談を聞くだけで十分なのに……！
激しい後悔にさいなまれたが、もうここまで来てしまったら腹をくくるしかないだろう。
色々あきらめてため息をついた。
「いや、ちょっと勘がいいだけです」
「へえー。すごいなあ」
高橋さんの言葉に東山さんが笑う。
いやホントなにもできないんですといおうとしたら、東山さんが斎藤さんに「君背高いねー」とか話しかけたタイミングと同時に高橋さんが私の耳元でささやいた。

「病院でるまでしゃべるなよ」
笑顔なのに声が不機嫌なのが非常に恐ろしい。
テストで回答欄を間違えた時だってこんなじゃなかったのに。
……そういえば、こんな風に高橋さんに逆らったり怒られたりしたのは初めてかもしれなかった。

斎藤さん・後編

灯りはきちんとついていて清潔なはずなのに、病院の廊下というのはどうしてこんなに薄暗く、不気味な感じがするんだろう。

ぴかぴかに磨かれた床に蛍光灯の光が反射して鏡と化しているからだろうか。あるいは、死人、病人、怪我人が集うところというイメージがそう感じさせているだけかもしれない。赤ん坊だって病院で生まれてくるはずなのに、このつんとした消毒薬の匂いが誕生よりもそちらを連想させるのだ。

東山さんに先導されて到着したのは、だれも患者が入っていない空部屋だった。

外壁と違って特に不潔でもボロくもないし、普通の部屋のように見える。強いていうなら窓ガラスが曇りぎみなくらいだろうか。

おびえる小動物のように、東山さんがぎこちなく室内を指さす。

「ここで看護士が何人も変な影を見てるんだ。それに、あのベッドを使った患者はなぜか容態が急変して亡くなってしまう」

同時にキインと耳鳴りがして、内心飛び上がりそうになった。

非常に嫌すぎるタイミングだ。

昔だれかが「耳鳴りは幽霊と目が合った合図」なんてエグイこといってたのを思い出す。やめて勘弁してただの生理現象だよこんなのそーいうことにしといて。

目の前にあった高橋さんの背中あたりの服をつかむと、彼はふとふり返り、私にデコピンを食らわせた。絶妙な手加減でまったく痛くないが、びっくりしている間に無情にもすたすた室内に入ってしまう。いつの間にか斎藤さんも入っていて、私は東山さんと二人で部屋の前に立ちつくした。

「ベッドの下」

高橋さんの言葉に、斎藤さんがベッドの下にもぐる。

なぜか、ほこりを被ったクマのぬいぐるみをもって出てきた。

手のひらサイズくらいの小さなもので、ガムテープがへばりついている。
「ベッドの裏に貼りつけられてた。……看護士の女だな。痩せ型で歳は三十路くらい、髪を後ろで一つにしばってて、胸ポケットにガチャピンのシャーペン差してる」
「●●さん？　●●さんがどうしたの？」
東山さんが驚いたように部屋をのぞきこみ、高橋さんが補足した。
「その●●さんって人がこのぬいぐるみを使って呪いをかけてたんですよ。このベッドを使った人が死ぬように」
「え……！？　なんで彼女が」
高橋さんはちらっと斎藤さんを見る。
「そこまでは。とにかく、これでもう大丈夫だと思います。このぬいぐるみどうします？　良かったら処分しますけど」
処分してくれと即答して、東山さんが信じられないといった顔でぬいぐるみを凝視した。
「……そんな、ただのぬいぐるみで呪いなんかかけられるもんなの？」
「藁人形なんか使わなくても呪いはかけられますよ。人形やぬいぐるみとか、生き物の形をしてるものが使いやすいのは確かですけど。自分や呪いをかけたい相手がよく使ってる愛用の品とかでもいいし」
説明は高橋に任せる、といった様子で斎藤さんはぬいぐるみを紙袋につっこんでいた。
その後、東山さんに許可をもらって駐車場の隅でぬいぐるみに酒と油をかけて燃やし、私たちは病院をさった。
帰りぎわ東山さんが二人に封筒をわたし、私にどこからか持ってきたワッフルを1個くれた。
「高橋さんと斎藤さんって、霊能者だったんだね」
バスをまっている間ワッフルを食べつついうと、高橋さんが複雑そうな表情をした。
「ああ、まあ。……たまに知り合いに頼まれるんだ。こいつと会っ

たのも友達の紹介なんだけど、俺は人間の幽霊が得意で斎藤は人形とか物が得意だから、今日みたいに協力することもある」
「普段は一人なんだ」
高橋さんはともかく、斎藤さんが一人でやってたら依頼人に怖がられそうだ。
ただ、斎藤さんって終始ブチキレているように見えるけど、顔と態度が怖いだけで根は普通かもしれない。いかにも女慣れしてますって感じの高橋さんはいつもの事なのだが、さりげなく私のとろとろした歩調に合わせてくれるのだ。同い年の従兄弟でさえ、一緒に歩くとたったかたったか私を置いていってしまうのに。成人男性が女子中学生の歩きに合わせるのはさぞイライラするだろうと思うのだが。
「今回は交通費込で一人十万。いつもは平均で8万くらいだな」
斎藤さんの言葉に耳を疑う。
「高っ！？」
交通費なんて、５００円くらいしかかかっていないはずだが。
病院にいた時間もせいぜい一時間程度だし、使ったお酒と油だってどんなに高くても2万もしないだろう。
「なんでそんな高いの？」
「ぼったくってるに決まってんだろ」
斎藤さんが皮肉っぽく笑い、高橋さんが眉をひそめた。
「わざと高くとって、依頼もってこないようにしてんだよ。前にもいったけど俺はコレで食ってく気なんてないし、依頼がなくなっても構わないんだ。……なのに、高い金とっても泣いて頼んでくるんだから馬鹿馬鹿しい。俺だって素人みたいなもんなのにさ。有名な寺にでも行ったほうがマシだっつっても聞きゃしねえ」
以前明里に「霊能者なんてロクなもんじゃない」と諭していた彼が霊能力でぼったくっている。
それを知られたくなくて不機嫌だったんだろうか。
「斎藤さんはどうして私を呼んだの？」

彼がなにかいいかけたとき、タイミング悪くバスが来た。
駅について電車に乗って、もうすぐ最初の駅につくというとき、高橋さんのケータイが鳴った。
「はい」
電話ごしに叫び声のような、動揺したような声がかすかに届く。
よく聞こえないけどトラブルだろうか。
「あー……東山さん。呪いって、そういうもんなんです。人を呪わば穴二つっていうでしょう？　彼女は自業自得です。あのベッドで何人死にました？　東山さんが気に病むことないですよ。それともあのベッドでまただれか死んだほうが良かったですか？」
ぞくりと背筋に悪寒が走った。
そのいい方じゃまるで、●●さんという人が。
「はい、それで終わりです。あのベッドも使って大丈夫ですから。それじゃ」
高橋さんが通話を切る。
「今のって」
「●●さんが脳梗塞で死んだって」
あのぬいぐるみを燃やしたから？
平然としている二人を前に、乗り物酔いをしたみたいに気分が悪くなった。

◆

駅について、ここで解散かと思ったらなぜか二人ともついてきて、歩きながら斎藤さんがいった。
「俺やこいつみたいなのとつるんでると、霊感がなくてもとばっちりを食うときがある。俺の妹はおかしくなって死んじまったし、こいつの友達も一人行方不明になってる。……なのに、他人を平気で巻きこむこいつの気がしれない」
それを聞いて、彼は私に警告するために呼んでくれたんだと、よ

うやく気づいた。
マンションで金縛りにあったときを思い出す。
あれは怖かった。苦しかったし、死んでしまうかと思った。あれよりもっと怖い目にたくさんあったから、高橋さんのお母さんは精神的に追いつめられたんだろう。
「俺は友達も彼女も作んないなんて無理だ」
冷めた口調で高橋さんがいって、斎藤さんも淡々と返す。
「線引きくらいできるだろ」
その日はそれで解散した。
色々なことがあったからゆっくり考えたくて、それからしばらくプライベートでは高橋さんと会わなかった。家庭教師の日には会ってちゃんと会話もするけれど、内容は勉強やたわいもない雑談だけで、なんだか気持ちは上滑りしていく。
不思議と、高橋さんも私を誘わなかった。
毎週のように遊んでいたのがウソみたいだ。こちらから「週末遊びに行ってもいい？」と一言聞けば済む話なのに、なぜかそれがいえない。正直、途中から「誘われるまでは行くものか」と意地になっていた。
認めたくないけれど、高橋さんが好きみたいだ。
すやすや眠る彼のそばでゲームするのが楽しくて、仕事以外の時間に優しくしてもらえるのが嬉しかった。彼の怪談は好奇心をそそられるし、怖い目にあったときも助けてくれた。正当防衛っぽいし、合法の範囲内とはいえ彼らのせいで人が死んだり、おかしくなってしまった人や行方不明になった人がいることも忘れたわけではないけれど、それらを差し引いても距離を置きたいと思えない。
会えないと寂しい。
土曜日のお昼過ぎ。
気がつけば、彼のマンションまで来てしまっていた。
……約束もしてないのになにやってんだろう。留守かもしれないのに。

チャイム押して出なかったら大人しく帰ろう、と一大決心でインターフォンを押すと、無言で玄関のロックが外れた。
いる、みたいだ。
恐ろしいことになれてしまったのか、はたまた浮き足立っていてそれどころではないからか、今日はもう怪異すら気にならず、一人でエレベーターにのって部屋の前までたどりついた。
緊張しつつ部屋のチャイムを押すと、
「忠告してやったのに」
相変わらず怖い顔の斎藤さんがドアを開けてくれた。
「ごめんなさい」
眉尻を下げると、彼は自分の腕にはめていたパワーストーンのブレスレットを外して私の手にかけた。
「つけてろ」
「……自分のパワーストーン持ってるけど、それじゃ駄目なの？」
ついタメ口になってしまったが、彼は気にした様子もない。
「念がこもってないと意味ない」
「へー。ありがとう」
奥へ入ると、高橋さんはカーペットの上で寝ていた。
確かにそろそろ暑くなりはじめてきたけれど、なぜベッドで寝ないのか。そばにソファーもあるのに。
「じゃあな」
いつも通り荷物と紙袋を手に斎藤さんは帰ってしまった。
あの紙袋には、以前のぬいぐるみみたいな怪しいものが入っていたりするんだろうか。
「高橋さん、遊びにきたよ」
声をかけると、まぶたが少しだけ動いた。
話がしたいけれど、おきるまでまった方がいいだろう。今日もやっぱり寝不足みたいで泥のように眠っている。寝顔を見ながら考えごとをしていたら、昨日あまり眠れなかったせいか、いつのまにか私まで寝てしまった。

ぼんやりまどろんで目を閉じていたら、ふと汗の匂いがした。
さらりと、だれかの髪が顔にかかる。
くすぐったいなと思っていたら、温かくてやわらかいものが唇にふれて、息が止まりそうになった。というか止まった。
ちょっちょっとなにしてんのなにしてんのうあああああああ。
顔から火が出そうだったけれど、身動きしたらおきているのがバレてしまう。どんな顔していいかわからなくて、必死に寝たふりを続けた。されたのはほんの一瞬だったけれど、ものすごく長いようにも感じた。やがて、軽く息がかかって離れる気配がする。じーっと見られている気がしてしばらく目を閉じていたら、本当にまた眠ってしまった。
だから、本当に夢だったのかもしれない。
おきたとき、不気味なくらい高橋さんの機嫌が良かったけど……。

海

告白するつもりだったのに、しそびれてしまった。
でも、あれからまた高橋さんが遊びに誘ってくれるようになったから結果オーライかもしれない。……セクハラが増えたのは困惑したけど。
それと悩みも増えた。
以前からそうなのだが、高橋さんと遊ぶと食事代などをいつもぜんぶ出してくれるのだ。悪いからと断っても出してくれるし、お菓子やらアクセサリーやら服やらくれる。さらに先日、彼のマンションの最寄り駅までの定期券までわたされてしまった。嬉しいけど、もらってばかりでいいんだろうか。睡眠不足解消くらいしかしてあげられないのに。
なんてひそかに考えていたころ。
夏休みに入ったので、友達の明里と沙也と一緒に海へ出かけた。
食べて泳いで、夕方。
駅をめざして歩いていたはずなのに、いつのまにか人気のない海岸沿いに出てしまった。血のように毒々しい太陽が海に少しずつ沈んでいくのが見える。空は紫と赤とオレンジに染まり、建物は影で黒くぬりつぶされている。浮世離れした光景のせいか、夢の中に迷いこんでしまったかのように現実感が薄かった。
「迷ったね」
「うん、迷った」
「やっぱりさっきの道、右だったかな」
ああでもない、こうでもないと道端で相談していたら、
「あ、あの子に聞いてみようか」
と明里が海を指さした。
そこには小さな人影が一つ。
近寄ってみるとそれは小学5，6年生くらいの女の子で、黄色い

水着に浮き輪姿でぷかぷか浮いている。二つくくりのかわいい子だ。地元の子なのか周囲に親はいない。一人で海なんて、危なくないんだろうか。
浜辺まで歩いて、沙也が手をふった。
「ねえ、お姉ちゃんたち迷っちゃったの。駅までの道教えてくれないかな？」
女の子はこっちに気がつくと笑って手をふり返し、沖からこちらへすーっと泳いできた。やがて、浜から上がってこようとする。
ほぼ同時に、二人がじわじわと後ずさる。
どうしたんだろうとふり返ると、沙也が叫んだ。
「ひなた、早く！」
「え？」
「こっち来て！」
明里まで。
この子に道を聞かないといけないのに、どうしてそんな遠くにいるのだろう。
疑問に思いつつ小走りで二人の方へ寄って行くといきなり走りだし、私もつられて駆けた。
「道、聞かないの？」
「いいから走れ！」
沙也が怒鳴った。
やがて、海から離れた道路まで来てようやく二人は足を止め、事情を話してくれた。
あの女の子が浜から上がってこようとしたとき、明らかに足がつく浅瀬にも関わらず座高が変わらず、腰から下が見えなかったそうだ。
「それに、両手で砂をはうみたいにしてこっちに来ようとしてた」
ぽつりと明里がいう。
夕方になっても暑くてじめじめしていたのに、ひんやりと背筋に悪寒が走った。

「とにかく早く帰ろ。駅、あっちみたい」
沙也が標識を見上げてうながす。
「うん」
返事をして、なんの気なしにふり返った。
視線を感じた、なんて明確なものではなく、手がかゆかったからかいたとかそんな無意識のものだ。
下り坂の先にさっきの女の子がいた。
浮き輪をしたまま、腰から下が存在しないみたいに道路から生えている。目が合うと、嬉しそうにこちらへ手をふってきた。それも異様なほど全力で両手をふりまわすものだから、溺れて助けを求めているようにもみえる。笑顔だが。
「つ、ついて来てるんだけど……！」
「え！？」
「はあ！？」
それから三人で駅まで走り続けた。
電車にのりこんで、「なにあれ」だの「夜の海は怖い」だのとそれぞれ愚痴りまくって、ようやく一息つく。
けれど、私たちは同時に見てしまった。
ほとんど乗客のいない電車の中。むかいの窓の外に広くて暗い海が映っている。そこに、小さな人影と見覚えのある浮き輪が浮かんでいた。とても遠くにいるはずなのになぜか表情までもがくっきりわかる。
恨めしそうな顔をして、あの女の子がこちらをじいっと睨んでいた。

◆

次の週の頭。
「ということがあったんだけど……」
高橋さんの部屋で私は頭を下げていた。

今日は寝不足ではないので一緒に遊ぶつもりらしく、部屋の主はゲーム機をセットしながらぶつくさいっている。
「俺といても見えないのに、なんで明里ちゃんといる時は見えるかなー。つか俺も海行きたかったのに」
女子中学生三人の中に混ざる気か。
「で、なんで土下座？」
「だって、心霊相談嫌いでしょ？」
「え？　俺そんなこといってないけど」
私の顔を両手でもち上げ、高橋さんが驚いた顔をした。
「このまえオカルトで食ってく気ないのに増えて困るとか、馬鹿馬鹿しいとかいってたし。それに私お金もってないし」
「まてまてまて。いろいろ間違ってるけどまず、ひなから金とったりしねーから」
どういうことだろうと見つめると、ちょっと顔が近づいてくる。
かすかにシャンプーの香りがしてドキリとした。
「えーと、1個ずつ説明するからな？　俺はオカルト好きだから。怪談も心霊スポットもコックリさんの類もオッケー。大好き。ここまではいいか？」
「う、うん」
なんとなく腰が引けてしまうと顔から手がはなれて、つつーっとほおやあご、首筋をなぞってきた。
「次に、心霊相談も嫌いじゃない」
「え？」
「面倒くさいのや、俺の手に負えないよーなやつ以外ならな。でも仕事にはしたくない」
「好きだけど仕事にはしたくない、と」
そこはいまいちよくわからないので復唱してみる。
「そ。友達と心霊スポット行ったり、友達の心霊相談にのるのはいい。でも友達の友達とか、ろくに話したこともないやつの相談はごめんだから金とってるんだ。いくら好きでもそこまでやったらキリ

ないし、こっちだってつかれる。馬鹿馬鹿しいっていったのは、ろくに知りもしない俺に高い金積んででも頼んでくる連中のこと。ひなならいくらでも相談していいから。……あ、明里ちゃんや沙也ちゃんの相談は却下な」
「なんで？　私も会って一年くらいしか経ってないけど」
高橋さんがなにかいいかけて私の手をつかみ、もう一度顔を寄せてニヤリとした。
「わかんない？」
だから、そんな目で見られたら困るんだってば。
ドキドキしすぎて変になる。
カッと顔が熱くなって、あわてて目をそらした。
「たか、高橋さんってロリコンなの？」
「さあ。年下は好きだけど、こんな歳はなれてるのは初めてかな」
ぎゅう、と手に力をこめられる。
そこまでいうのに、肝心な言葉は口にしてくれないんだ。
「そ、それで、どうしたらいいかな？　その女の子がまだついて来て、一人になった時とかに出てくるんだけど」
高橋さんが笑って、
「かわいーなー、ひな」
軽くほおに口づけてきた。
「！？」
思考回路が停止する。
そのままのポーズで置物みたいになっていたら、あっさり離れて高橋さんがいう。
「ひなはあまり幽霊に好かれるタイプじゃない。それもつけてるし、あの三人で遭遇したんなら明里ちゃんにつくだろ。明里ちゃんの相談を却下にしたからって自分のことにしてもバレバレだから」
それ、の所で斎藤さんにもらってつけていたパワーストーンのブレスレットを指した。
斎藤さんにもらった物だとバレたときは「あのムッツリ野郎」と

か毒づいていたが、どうやらこれが守ってくれたようだ。
「明里ちゃんと縁切る気ない？」
「本気でいってたら怒るよ」
「ごめん冗談。……でも俺、あの子に次から自分で解決しろっていったんだけどな」
「あ、違う。明里が頼んでっていったわけじゃないよ。明里は私と沙也に愚痴っただけだから」
彼女はそんな子じゃない。ちゃんと自分で解決しようと試行錯誤していたのだ。
「無視は難しいみたいだけど、できるだけ一人にならないようにしたり塩を持ち歩いたりしてるんだよ」
「ふーん。じゃあ、俺がアドバイスしたことは内緒にしてくれよ」
「ありがとう」
喜んでいたら、高橋さんが愛想よくほほえんだ。
「一番、俺とプールに行く。二番、キス。三番、ここに泊まる。どれにする？」
五秒くらい、時が止まった。
「冗談だよね？」
「嫌ならいいよ」
「まって、せめてどれか難易度おとして！　レベル高すぎるよラスボス並だよ」
「なにいってんだひな、こんなのまだまだスタート地点だ。プールなんてだんぜん気軽だろ」
「気軽じゃない」
以前ミニスカをはいたら堂々とガン見しまくってきたのはこの男だ。
妙にまとわりつくような、あんなはずかしい視線の前で水着なんか着れるものか。こちとら手にふれるだけでいっぱいいっぱいの状態なのだ。
それを考えると。

「……三番」
たぶん、ゲームやＤＶＤを観るくらいでいつもとそんなに変わらないだろう。
高橋さんが子供みたいな笑顔を浮かべた。
「今日？」
「また今度。それで、どうすればいい？」
「幽霊に好かれるやつって何種類かあるけど、多いのは不健康と優しいやつなんだよね」
高橋さんは両方っぽい。
「こいつなら助けてくれそう、同情してくれそう、あるいは簡単にこっち側に来そうだと思ってついてくるわけだ。だから時にはキレるのもいいよ」
「そんなことしたら逆ギレしてこない？」
「してくるのもいるけどさー。幽霊って別にホラー映画に出てくるような最強の存在なんかじゃないから。人間の影みたいなもんだから、生きてる人間の方が強い。あつかい間違えたら死ぬようなのなんて俺も一回くらいしか見たことないし。あ、でも神仏関係だけは絶対に怒らせるなよ」
やっぱりヤバいのもいるんじゃん。
冷や汗が出たが、話が進まないのでそこはスルーしておく。
「うん。じゃあ、明里には怒ってみたらっていってみる」
「いや、今のはただの今後の助言。明里ちゃんて人形とかぬいぐるみもってる？　生き物の形のキーホルダーとか。できるだけ長くもってかわいがってる古いやつ」
「もってると思う」
彼女はかわいいもの好きだし、家にぬいぐるみもたくさんあった。
「それに”助けてください”とか”身代わりになってください”とかって頼んで、ついて来てるやつに投げつけな。その後はふり返らずダッシュ。お盆が終わるまで、できるだけ水には近づかないこと」
ホラー雑誌に載っていた除霊方法ということにして明里にそれを

伝え、さっそく三人で実践した。
人目のない林の中へ行き、ぬいぐるみを投げて走る。
私にはあの時の女の子は見えなかったけれど、逃げる最中なにかが水に落ちたような、じゃぶんという音がした。
それ以来、あの女の子は出なくなったそうだ。
けれど少し困ったことがある。
明里と遊んでいると昼夜とわず、変なものが見えるようになったのだ。

西崎さん

高橋さんの休みの日。
約束どおり泊まりがけで遊びに行くと、
「晩飯好きなの作ってやるよ。なにがいい？」
とのことなので、荷物をおいて材料の買い出しに出かけた。
なんか本当に料理上手そうでちょっとくやしい。
とか思いつつも、手を恋人つなぎされて私は内心デレデレだった。
周りに変な目で見られないか気にはなったけれど来年は高校生だし、高校生と大学生ならそんな変じゃないからいいやという事にしておいた。
いつもこれくらいのスキンシップなら歓迎なのに。
手をつなぐ前にキスしたりなめたりする方が変なのだと内心うなずいていたら、
「やっぱ車で行くか」
「え？」
高橋さんに手を引かれ、早足で駅のホームを引き返した。
アナウンスが鳴ったから、もう電車がくるのに。
「どうせこの電車止まるから」
わけがわからないまま一緒に階段をおりる。
直後。
「うわあああああああああ！？」
部屋ごしみたいに少しくぐもった悲鳴。
不可解で気色悪いグチャッ、という音とともに電車がホームへ到着する気配。短く息を飲むような悲鳴。急ブレーキ音。
それらがすべてごちゃ混ぜになって鼓膜を襲った。
異様な空気に全身の鳥肌が立つ。
つかのま、身動きどころか息すら忘れた。
「……今の」

かすかにのぞく頭上の空はまぶしいくらい青く晴れわたっているのに、駅の中は影で黒くぬりつぶされ、立っている人の顔も判別できない。
にごった沼のように暗いそこを影たちが動きまわり、ざわざわと騒ぎ始める。
「きゃあああああああ！」
ホームの方から悲鳴やだれかが吐瀉する音が響く。
とっさに足を止めてふり返ってしまっていた私の手を、もう一度高橋さんが引いた。
「行こう。飛びおりだよ。グロいもん見たくないだろ？」
どうしてそんなに平然としていられるのか。
数分前に通った改札を再びくぐっていく。
「なんで電車がくる前にわかったの？」
「あのおっさん、すでに顔が死んでたから」
向かい側のホームにサラリーマンのおじさんがぐったりして座っていたらしい。
顔を見たら、「ああこりゃ飛びこむな」と思ったので引き返してきたとか。
「……全然わからなかった」
呆然としていたら、高橋さんが苦笑する。
「こういうのは俺より隼人の方が得意だったんだけどな」
後ろの方で「ただいま人身事故が発生いたしました」というアナウンスが響いた。

◆

西崎隼人（にしざきはやと）という高橋さんの友人は、第六感だけで生きているような人だったらしい。
実生活や社会で役に立つようなことはほとんどできない。
「すっげー馬鹿だし、どん臭かった」

けれどおそろしく勘がよくて、いつも当たり前に幽霊を見ていた。
失せ物探しもできたし、天気予報は百発百中。５万くらいの宝くじも数回当てていた。
特に死やケガ、病気の予知が得意だった。
中学生のころ、あんまり彼の成績が悪いので「このままじゃ留年だ」とテスト前に無理やり勉強させようとしたが、
「テストは延期になるからまだやらなくていい」
と教科書を見もしない。
「なんで延期になるんだよ？」
高橋さんの問いに彼はこういった。
「今日か明日くらいに校長が死ぬ。全校集会で葬式やるからテストは延期」
校長は５０代。歳ではあるが元気で持病もない。
勉強したくないいい訳だろうと思っていたら、翌日。
朝のホームルームで校長が車に轢かれて亡くなったと知らされ、西崎さんのいったとおりになった。
ただ、延期されたテストの直前になっても彼は一度も勉強せず、赤点をとりまくった。
本当に留年しかけたが担任教師が奮闘し、各教科の先生と交渉して学校を休みがちなことと授業で寝ていることへの謝罪文、プラス課題を提出すれば単位をもらえるようにしてくれた。
「別に不良とかじゃなく、ぼけーとしてるやつだったんだ。休みがちなのも寝坊したから休むとかそんなだし」
と高橋さんは語る。
またあるとき、西崎さんがクラスメイトに向かって、
「今すぐ眼科行ったほうがいいよ」
と告げた。
まったく関係ない話をしていたので周囲はいつもの天然ボケだろうと思ったそうなのだが、いわれた本人にはすぐ通じた。
「やっぱり？」

最近、目の前に黒い点がたくさん浮いて虫のように動いて見えるとか。
後日、眼科で網膜剥離になりかかっているといわれたそうだ。
そんなエピソードが山ほどあるらしい。
中学時代は西崎さんや他の友だちと馬鹿なことをいっぱいした。
放課後、教室でコックリさんをしたら教室が黒い影と笑い声で満たされ、それ以来でると評判の教室になってしまった。
深夜、神社でかくれんぼをして肝試し。
投身自殺の名所と呼ばれる崖のある海にあえて泳ぎに行ったら、得たいの知れない黒い渦のようなものに飲みこまれ、危うく死ぬ所だった。
心霊スポットでわざとヤバそうな霊にちょっかいをかけて、無事に戻ってこれるかどうかで賭けをした。
その他、たくさん。
西崎さんは中卒でフリーターになったので卒業後は会う頻度が減ってしまったが、それでも楽しかった。
だが、別れは突然おとずれた。
高橋さんが彼と最後に会ったのは、高校二年生の秋。
どきりとするほど赤味がかった、巨大な満月の夜に西崎さんがやってきた。
アポイントなしに遊びにくるのはいつものことなので気にせず部屋に上げたが、彼は座らず、なにかいいたげにこちらをぼうっと見ている。
「どうした？」
妙に空気が重い。
西崎さんは少し気まずそうというか、はじらうように苦笑した。
「うん……実はさ、俺死んだんだ」
「え？」
「おまえには最後に会っとこうと思って」
普通なら冗談いうなと怒る所だが幽霊は見慣れているし、彼は基

本的にウソをつかない。
「マジで？　いや、死ぬなよ。おまえ事故とか予知できるじゃん。それで何人か助けたこともあるし、おまえだってまだ」
西崎さんが困ったように笑う。
「それは、無理だなあ。事故でも病気でもないし……それに俺１７で死ぬってわかってたから」
「わかってたならもっと早くいえよ！　そしたら死に目くらいには会えたかもしれねーのに」
「どーかなー……俺は変に同情されるより、普通に遊べて楽しかったよ」
そこで唐突に目が覚めた。
西崎さんの姿はなく、月明かりにてらされた室内で時計の音だけが響いている。
時刻は４時まえ。
その日は疲れていて風呂上がりにソファで横になり、そのまま寝てしまっていたようだ。
けれどただの夢とはとても思えなくて、非常識を承知で彼のケータイに電話した。
でない。
寝ているんだろう。寝てるだけだ。
そう思いつつもほうっておけず、着のみ着のままで西崎さんの家へ向かう。
西崎さんは両親がおらず、親戚とも不仲なので中学時代から仕送りでひとり暮らしをしている。
彼のアパートのドアは鍵がかかっていなかった。
暗い室内にはぬぎ散らかした衣服やカバン。物が散乱しているのはいつもどおりだが、心なしか生き物の気配がしない。首つってるんじゃないかと思うと電気をつけるのが怖かった。
けれど、西崎さんはいなかったそうだ。
遺書も書き置きも、なんの印もなく彼は行方不明になった。

◆

そんな話を聞いて、高橋さんがやたらと私を心霊スポットに連れて行きたがるのは、西崎さんと遊んでいたころの名残かもしれないなとひそかに思った。

「前に斎藤さんがいってた、行方不明になった高橋さんの友達って西崎さんのこと？」

「そ。あいつの妹のことは俺も知らなかったけど」

「西崎さんが行方不明になったの、別に高橋さんのせいじゃないと思うんだけど」

あの時の斎藤さんは高橋さんのせいだとでもいいたげな口ぶりだった。

「ひなに警告したかったんだろー。あいつ、ひなを自分の妹と重ねてるみたいだし」

話している間に買い物も終わり、マンションにもどって料理しながら高橋さんがいった。

なんだかやたら丁寧に作っている気がする。見習おう。

「妹さんに？　中学生なんて他にもいっぱいいるのに」

「……ま、嘘はいってないし。俺にかかった呪いや霊障が俺じゃなくて家族や友達に行ったこともあるから、あいつが警告する気持ちもわからなくはないよ」

呪いかけられたりすんの？

それは怖いなあと考えていたら、なぜか高橋さんが真顔でこちらを見つめていた。

なんなんだ。

「高橋さんはいなくならないでね」

キッチンの隅で立ったまま告げると、高橋さんの顔がまっかに染まった。

「ワンモア！　もっかいいって」

「え……し、失踪しないでね？」
「うわ、デレた！　ひながデレた！　すげー、やべー、もう1回いってもう1回！　録音する！」
鍋も包丁も放置し、謎のテンションでケータイをとりに行く。
まさか本当に録音する気じゃなかろうな。
「デレた、って」
心外だ。
私ってそんなに普段ツンツンしてる？
毎週通って態度で示しているつもりなんだけど、もう少し考えてることを口にしたほうがいいのかもしれない。鍋の火を止めると、笑顔全開の高橋さんがケータイを手にこちらへやってきた。ちょっとムカつくのはなぜだろう。
ケータイを没収して、口を開いた。
「あの、伝わってなかったみたいだからいうけど、毎週高橋さんに会うの楽しみにしてるよ。休みの日も週1で遊んでるけど、普段は友達と遊ぶのだって月1くらいだし。返信しようがない内容のメールはたまに放置したりしてるけど、ちゃんと全部読んでるし。こんなしょっちゅうやりとりするの高橋さんくらいだし、男友達は高橋さんと斎藤さんくらいしかいないし……だから……別に私ツンツンしてないよ」
むしろデレデレのつもりだよ！
少しは伝わっただろうかと様子をうかがうと、
「すげー嬉しい」
くくっと笑いながら高橋さんが抱きついてきた。ぎゅーと力をこめられて、苦しいやらはずかしいやら。ほんのちょっと気持ちよくて、胸が熱くなる。そわそわと視線をただよわせていたら、さっきとり上げた彼のケータイが目に映った。録音しようとしていたので、画面が開いたままになっている。
まち受け画面には、私の寝顔が登録されていた。
「は！？」

がばっと体をはなそうとするが、はがい絞めにされていてぬけ出せない。
「ちょっと、なにこのまち受け。いつのまに撮ったの？」
「あー、それか。無防備な寝顔だったから、つい」
ついって、他人に見られたらどうしてくれるのだ。肖像権とかいうやつの侵害だ。
「写真フォルダ見るよ」
他にもこんな変な写真があったらどうしよう。
こわごわとフォルダを開こうとするとパスワードがかけられていた。
「パスワードは？」
「教えない」
ゴロゴロのどを鳴らすネコのような仕草で私の頭に頬ずりしながら高橋さんがいう。
腕の中からぬけだすのに5分。
パスワード教えろ教えない戦争が停戦されるまで４０分くらいかかり、結局、まち受け画像を変えるという妥協案で落ちついた。

修学旅行・前編

夏休みの終わりごろ。
一人で街へ買い物に出かけ、ぶらぶらと服や靴をながめていたら、嫌いなクラスメイトと遭遇してしまった。
「あっ、姫！」
訂正、大嫌いだ。
くるっときびすを返して見なかったことにしようとしたのに、すたすたと後をついてくる。
「姫、姫どこ行くの！？　買い物！？　一人！？」
でかい声で姫姫よぶなはずかしい。
茶髪にちょっと派手な服装。
いかにもチャラ男風の外見も苦手だが、なぜか私を姫よびしてくるのが一番気に食わない。鈴木君は教室でも外でもこんななので、できるだけ避けていた。
「……その、姫ってよぶのやめて。はずかしいから」
「じゃあジュリエット？　シンデレラ？」
ぎゃあああああやめろ鳥肌が立つ！
美少女でモテモテの明里ならサマになるかもしれないが、私がそんな風によばれたら笑い者にしかならないだろうが。嫌がらせか厨二病か知らないが迷惑だ。
「普通に苗字でよんで。あと声大きいからもっと小さい声でしゃべって」
「うん、姫」
わかってない。通じてない。
めまいを覚えたとき、
「嫌がってるからやめてやれ」
ぽすっとだれかの手が頭にのせられた。
ふり返った先には茶髪とピアス。不良というよりヤクザ寄りの怖

い顔。派手な外見でも、見慣れたせいかこっちはほっとする。
「斎藤さん」
「え……姫のお兄さん？」
ドン引きって顔で鈴木君が問う。
地味で大人しい私にこんな知り合いがいようとは、思いもよらなかったんだろう。
「保月」
訂正するようにらむと、
「……保月」
しぶしぶといった感じに訂正した。
ちょっと気味がいい。
「じゃあね」
長居は無用、と斎藤さんとその場を後にする。
「ありがとう。助かったよ」
「ああいうのは相手にするな」
「する気なかったんだけど目が合っちゃったし、ついてくるから……」
こういうとなんか幽霊みたいだ、鈴木君。生きてるけど。
「そうだ。聞こうと思ってたんだけど、このブレスレットって浄化？　とかした方がいいのかな」
パワーストーン特集がのった雑誌などを読むと、定期的に塩や日光で浄化したり水晶の上にのせたりした方がよいとよく書かれている。
斎藤さんはふと私の手首をもち上げると、そこにかかっているブレスレットを数秒見つめ、
「まだしなくていい」
とだけ答えた。
「したら良くない？」
「念も薄くなるからな。なにかあるのか？」
するどい。

「ううん、ちょっと気になっただけ」
夏休み明けに修学旅行へ行くのだが、色々とそういう噂の多い場所なのでお守りを強化しておきたかったのだ。
修学旅行の当日。
「5日間もひなに会えないなんて死ぬ。干からびて死ぬー」
高橋さんからのメールを見て、笑ってしまった。
修学旅行自体は2泊3日だが、今週はカテキョがお休みなので会えるのは5日後の週末なのだ。いつもカテキョも含めれば週3回くらい会っているけど、5日間なんてあっという間なのに。
「お土産買ってくるね」
返信して、クラスのバスへ乗りこんだ。
すでに半数くらいが乗車していて、みんな眠い目をこすりながらも楽しそうに雑談している。
「おはよう」
「おはよ」
沙也と挨拶がてら両手をタッチして、隣に座る。
明里がまだ来ていないことを確認して、ちらりと視線を交わす。
「お守りもってきた？」
「この日のために神社で買ってきた。６００円だけどね」
沙也が財布からちらりとお守りをのぞかせる。
彼女は”でる”所へ行くと頭痛や吐き気を覚える体質だが、霊を見ることはない。私と同じように明里といる時だけ見えてしまうそうだ。
そして旅行中はずっと明里も一緒に行動する。
お互いごくり、と息を飲む。
「楽しい修学旅行にしようね」
「当然！」
沙也がいい切った。
なにごともないといいけど。
飛行機に乗りかえて沖縄へ到着し、そこからは観光バスで現地の

ガイドさんと共に各地を回った。
ガイドさんが歌ってくれた沖縄民謡が素敵でみんな明るい気分だったけれど、途中からは慰霊塔や戦争記念館、防空壕といった所をめぐり、お年寄りの体験談を聞いたのでなんだか気が滅入ってしまった。平和学習は必要だとは思うけど、好きになれない。
同時に、お守りをもってくる必要はなかったかもなと少し思った。たぶん、こういう所は先祖の墓参りをするような気持ちでいれば大丈夫だ。
黒い影がたくさん見えたりしてものすごく怖かったし、頭の中ではずっとお経を唱えていたけれど、むやみにおびえて騒ぐのは良くない気がした。
その後はホテルへ行き、晩ご飯を食べてお風呂に入って、就寝前の自由時間になった。
そこで私たち三人は固まった。
クラスで集まって怪談をしようというお誘いが来たからだ。
正直、興味はある。怪談は好きだ。でも明里もいるし、メンバーには変なのに憑かれてる奈緒美ちゃんも霊感少女の戸和さんもいるのだ。なにもおこらないはずがない。
「どうする？」
「面白そう」
と明里。
「クラスのみんなが集まってるっていうなら」
と沙也。
大部屋に割りふられた子の部屋で集合らしいのでそこへ行くと、すでにみんな来ていてかなりの密集具合になっていた。女子部屋なのだが、男子までちゃっかり集まっている。
「保月、保月！　こっちこっち！」
鈴木君がばしばしと自分の隣をしめす。そんな周りに男子しかいない場所へ行くわけがない。
困っていたら、

「いちいち相手しないの」
明里にぽんと肩をたたかれた。ついでに「嫌だって」と鈴木君を追いはらうように手をふる。
沙也がいたわるような目をむけてくる。
「嫌なら嫌ってちゃんといわないと駄目だよ」
「うん。ありがと」
二人に感謝しつつ、三人で壁際にすわる。
ラッキーなことに戸和さんの近くだ。彼女のそばなら安心な気がする。
「じゃ、あたしから時計まわりでいい？」
奈緒美ちゃんがあたりを見回して、怪談を始めた。
語り上手でけっこう怖かった。
その後も、聞いたことはあるけどなかなか面白い怪談が続く。
明里が沙也に抱きつき、私は明里に抱きついてきゃあきゃあ固まり、三人で毛布を被りながらも楽しんでいた。
そうして、戸和さんが語る番になった。
しんと静まり返った室内でカーテンが風でゆれる音だけがひびく。
「半年前の話なんだけど、毎晩夜中の二時に間違い電話がかかってきてたの。非通知着信なんだけど、いつも同じ人だってわかるんだ。なんでかっていうと、いつも”早く帰ってこい。こんな時間にでかけるてなに考えてんねん。飲酒運転になるやろが！”って録音を残すから。いっつも怒ってておんなじこというんだ。それがちょっと面白かったんだけど、一ヶ月くらい続いていい加減しつこかったから電話にでたんだよね。そしたら」
無言。
だが、こんな時間に非通知でかけてくる知り合いなどいない。なんてしらじらしい奴だとカチンときた。
「あの。いっつも番号まちがえてますよ。もうかけてこないでください」
謝ってくるか、ブツ切りされるか。

そう思っていたが、
『間違うてへん』
男はいい切って通話を終えた。
「それきり電話がかかってこなくなったから、ただの逆ギレだと思ってたんだけど。このまえ、留守録の容量がなくなったから古いの消すついでにおじさんのやつを再生し」
コンコン。
戸和さんの怪談の最中、隣の部屋から壁をたたくような音が大きく響いた。
一同がびくっとそちらをふり返る。
静まり返っていた室内でそれはあまりにハッキリと聞こえた。
「なんか呼んでる？」
「イタズラじゃね」
クラスメイトたちが軽くざわめく。
いつもそろいの髪型で双子のように仲がいい二人組の少女が、こわばった顔でつぶやいた。
「隣、あたしらの部屋だからだれもいないはずなのに」
なんともいえない、不気味な沈黙が広がった。
風かなにかで物がぶつかった音だと考えるには生々しすぎる気配がしたからだ。
だれも動けず話せずにいたらふと、戸和さんが笑った。
「お開きにしたほうが良さそうだね。私ついてったげようか？」
なぜか代わりに奈緒美ちゃんが返事をする。
「ううん、ゆっこたちこの部屋に泊まるからいらない！」
「そう」
二人が心細そうな視線を送るが、戸和さんはあっさり引き下がった。
一気に空気がゆるみ、すっかりお開きモードでみんなそれぞれ雑談しながら自分の部屋へ帰っていく。
明里たちと団子のように固まっていた状態からはなれ、私は戸和

さんの後を追った。
消灯時間がせまり、ぼんやりうす暗い廊下に彼女を見つけるが、
「小林くん、昼間に防空壕でイタズラしたでしょ。修学旅行おわったらすぐお祓い行ったほうがいいよ」
クラスの男子に小声でささやくそれを聞いてしまって、声をかけられなくなる。
小林くんはびっくりしたような顔をして、
「し、してねえよ」
足早にさって行った。
いや、その顔はしたでしょ。
あんな洒落にならない場所でなんて怖いもの知らずな、とあきれていたら戸和さんがふり返った。
「どしたの保月さん。なにか用？」
「あ、話の続きが気になっちゃって。留守録を再生したらどうなったの？」
彼女は軽くふき出し、笑顔でバシバシ肩をたたいてきた。
「保月さんてばもー、あんなの留守録がぜんぶ気持ち悪いノイズに変わってたってだけのオチだよ！」
「え、それじゅうぶん怖」
「非通知拒否っても非通知でかかってくるからイラッとしたけどさー、私の電話番号に執着してただけみたいで。番号だけ変えたらかかってこなくなったんだ」
「たまたまその番号になっちゃったら怖いじゃん。何番だったの？」
「えっとねー」
将来ケータイ番号を変えたときのためにそれを暗記しておく。
ノイズが入った留守録をまだとってあるそうで「聞く？」と目を輝かされたがお断りした。
怪談を聞くだけなら自分的にセーフだが、そこまでしたら夢に出そうだからアウトだ。
「じゃね。おやすみ！」

ひらひら手をふって彼女がさっていく。
「おやすみー」
戸和さんってちょっと高橋さんに似てる。
明里と沙也のまつ部屋へもどりながら、そんなことを考えた。

修学旅行・後編

じんわり暑い闇の中。
正確にはわからないけど、おそらく3時か4時くらい。耳元でぼそぼそと話し声がした。
「ダメ。連れていけないの」
明里の声だ。
「くぅーん」
「こんな所にいないで早く成仏しなさい」
「きゅーん」
ぱさぱさ、と奇妙な音。
薄目を開けると、茶色のしっぽがゆれているのが見えた。
犬？
ぼんやり視線を動かすと、しっぽの先が存在しない事に気がついた。
犬のしっぽのようなものだけが床に存在し、ぱたぱたとゆれている。
え？　これ、幽霊？
ちょっとかわいいかも。
おきようとしたが、身体が動かない。
「あか、り」
代わりに口を動かすと、かすれた声が出た。
とたん、しっぽの辺りから「ヴヴッ！」と獣の唸り声。今にもこちらに飛びかかってきそうな殺気に血の気が引く。
けれど、
「こらっ！」
明里が一喝すると気配ごとしっぽが消えた。
同時に身体が動くようになって、どっと冷や汗が出る。
「……あ、明里。なにと話してたの？」

彼女はジャージ姿のまま、疲れたように壁にもたれた。
「わかんない。犬かと思ったけどなんか凶暴だし……キツネじゃない？」
「茶色かったよ？」
「なんだろうね？」
どこから来たのか知らないが、いきなり顔をなめられて目が覚めたという。
それから二度寝して起床時間におきると、隣の布団で寝ていた沙也がおきるなり顔をしかめた。
「獣くさい」
朝食を終えると、高橋さんからメールがきていた。
「おはよー。今日は授業だけでヒマ。そっちは夜這いとかされてない？」
「されるわけないでしょ」
「ひなは隙だらけだから」
そんなことはない……と思う。高橋さんの前だとちょっとガードが緩くなってしまうだけで。
昨夜と今朝のことを話すと長くなるので、簡潔に返信した。
二日目の午前中は海水浴をし、午後からは自由時間ということで、私たちは三人で街を歩きながらお土産を物色していた。
食べ物かキーホルダーか、アクセサリー系か。
どれにしようかと頭をひねっていたら、
「保月、ちょっといい？」
めずらしく普通の声量で鈴木君が声をかけてきた。
沙也が私の肩をつかむ。
「ひなた。嫌なものは嫌ってハッキリいいな」
「ちょっと話したいっつっただけだろ！」
顔を赤らめるクラスメイトを見て、冷や汗が伝った。
え？　……もしかして、鈴木君ってそうだったの？　今までのって完全にただの嫌がらせだと思ってたんだけど。

「えーと、じゃ、ちょっと行ってくる」
「ひなちゃん、勢いに負けちゃ駄目だよ」
と神妙な顔の明里。
どんだけ押しに弱いと思われてるの。
これでも訪問販売を断るのは得意だ。お母さんはいませんといってやる。
「大丈夫だよ」
冗談はさておき、連れられるまま人気のない場所に移動すると、おもむろに鈴木君がいった。
「もうわかってると思うけど……好きだ！　姫！」
姫っていうな。
なんて文句も出ないほどぽかんとしてしまった。
いや、確かに数分前から気づいてた。気づいてたけど、生まれて初めて告白されたよ私。
以前自分も告白しようとしたからわかるけど、告白するってすごい勇気いるのに。すごいなあこの人。
「私なんかのどこがいいの？」
「や、姫ってけっこう……アレだし」
アレってなに。
「今度姫ってよんだら無視するから」
「じゃあ保月ってよぶから」
妙に真剣な目で見つめられて、ちょっとドキッとしてしまった。
「ご、ごめん。ありがとう。気持ちは嬉しいけど」
「嬉しいならいいじゃん」
良くない。
「好きな人いるから」
友達以外にこれを伝えるのはけっこうはずかしい。
「えっこの前のヤクザ？」
「違う違う、別の人」
あとたぶんヤクザでもないと思う。

「じゃ、カテキョとつき合ってるってマジ？」
とっさに言葉につまってしまった。
つき合ってるわけじゃないけど。
「だれに聞いたの？」
明里と沙也にしか話していないけど、二人は違う。
三人で話しているのをだれかに聞かれたか、高橋さんと遊んでいるのを見られたかだろう。
「マジなんだ。えー、じゃあカテキョのたびに部屋でやらしいことしてるわけ？　それって犯罪じゃね？　援交みてーじゃん」
「変なことなんかしてないよ」
……ちょっとしか。
思わず顔が熱くなる。
髪をなでられたり肩を抱かれたり、手なめられたりはしたけど。
ちゃんといつも勉強している。私だって受験生だ。
「じゃ、相手にされてないんだ」
距離をつめられてなんとなく後ずさる。
「それは……鈴木君には関係ない」
「今告ったじゃん、関係ある」
「ない。片思いでも私は高橋さんが好きなの」
いってしまってから急に恥ずかしくなった。
うあ。鈴木君も目が点になっている。
いたたまれなくなって、私は逃げ出した。

◆

もう9月なのに、沖縄の空は真夏のように日差しが強い。気温も高く、あちこちに陽炎がゆらいでいた。そばの土産物屋からはエキゾチックな三味線の音が響いている。
「あれ、明里は？」
二人と合流して、少し落ちついたあと。

道端で紅いもアイスを食べていたら、明里がふらりと歩いて行ってしまった。
「明里？」
「ネコでもいた？」
後を追うと、彼女は暗い路地の中でぽつんと立ちつくしている。
日差しの中から急に影に入ったので、目の前がチカチカして軽いめまいがした。
「あれ」
明里が指さした先で、陽炎がゆらぐ。
いや、陽炎じゃない。ゆらゆらと手まねきするようにゆれるそれは、白い女の腕だった。目が正常にもどると同時に全身の毛穴がざわりと開く。
明らかに生きた人間のものではない。
それは小さな古道具屋の、のれんの隙間から生えていた。残りの体は見当たらず、下からは暗い店内だけが見える。腕のむきから考えて、どうがんばっても身体を隠せそうな所はない。奇形を見た時のような説明できない生理的嫌悪感がこみ上げてきて、無意識に後ずさった。
「キモイ」
同じ気もちらしく沙也が吐きすてる。
ところが明里は気にした様子もなく近づいていく。
「でも別に怖くないし。悪いものじゃないのかも。”おいで”っていってるみたい」
正気かと激しくつっこみたい。
霊に好かれる人って霊に惹かれやすかったりするんだろうか。
「あたしはむちゃくちゃ怖いけど。ていうかキモイ」
引きつった顔で沙也が明里の腕をつかみ、大通りの方へ引き返そうとする。その隣を歩いていたら、背中が急にヒヤッとした。反射的にふり返ると、のびきったゴムのような白い手が明里の背中をつかんでいた。

血の気が引いてとっさに彼女の腕をつかむ。沙也もつかんだままの明里の腕に力を入れて踏みとどまろうとするが、まるで止められずに三人そろって落下するように引きずられた。
思わず死を覚悟してしまったとき、けたたましい犬の鳴き声が響いた。
近所の犬みたいな生やさしいものじゃない。猟犬が獲物をかみ殺すために追いたてるような、聞いているこっちまですくみあがる野生じみた獣の声。
いつのまにか私たちを引っぱる力はなくなっていた。
白い手は消え、犬もどこにもいない。
しばらく呆然としていたら、沙也が顔をしかめた。
「獣くさい」
私にはわからないけれど、たぶん彼女の方が感覚が鋭いんだろう。
明里は大丈夫だろうか。
様子をうかがうと、恐ろしいことに彼女はさっき引きずりこまれそうになっていた店内に自ら入ってしまった。
「明里！？」
自殺行為にもほどがある。あんな目にあってもあの手は悪いものじゃないというつもりだろうか。あわてて後を追うと、いつのまにか中に店員さんがいた。
「いらっしゃい」
頑固そうなおじさんだ。こちらを一瞥するなり、広げた新聞に視線を落とす。私がびっくりしている間に、明里はいろんな物が雑多に飾られている棚からなにかをとり、おじさんにたずねた。
「これ、本物ですか？」
黒とこげ茶が混ざる、小さな毛皮のキーホルダー。
見た瞬間にあっと声を上げそうになった。今朝のしっぽが小さくなったみたいにそっくりだ。どことなく生っぽいというか、剥製から作りましたという感じの独特の毛づやをしている。
「ああ、犬の毛だよ」

お爺さんの言葉に明里は少し眉をひそめたが、
「これください」
と財布を出した。
千円くらいだった。
「キモイキモイキモイありえない！　返してきなよそんなの。犬殺して皮はいで作ったやつでしょ？　動物の死体なんてもち歩いてなにが楽しいの？　悪趣味じゃん。呪われそう」
店の外でまっていた沙也が露骨に嫌な顔をする。
その意見には賛成だし、明里もきっとそうだろう。しかも怪しげな店で買ったものだ。でも、今回に限って反対する気にならなかった。
「それって、もしかしてさっき吠えた犬？」
明里がうなずく。
「あそこで売ってるって知ってたの？」
「ううん。でもきゅんきゅん鳴いてたからそうだと思って……助けてくれたから、連れて帰ってあげることにしたの」
このキーホルダーは今朝の犬だと思う、と彼女はいった。
「そいつさっきの手とグルなんじゃないの？　泣いた赤鬼的な」
沙也が冷ややかなまなざしを向ける。
「そんなことないって」
と明里。
「見てもいい？」
本当に犬の毛なのかと手をのばしたら、耳元で低い唸り声が響く。
「それが嫌いみたい」
明里が私のブレスレットを指さした。

◆

修学旅行から帰ってきた週末の昼下がり。
ミスドでお茶しつつ私は高橋さんに旅行中のことをかいつまんで

話した。ひと通り聞き終えて、高橋さんがなぜか軽くふてくされたように問う。
「なんでミスド？」
「落ちつくし長話しやすいからだけど。嫌いだったっけ？」
というか、主に怪奇体験を話したのにそれについての感想はないのか。
高橋さんは私のほおを軽くなでた。
「嫌いじゃないけど、ここじゃ抱きしめられないじゃん。5日ぶりなのに」
人前でそーいうことをいうんじゃない。
「だ、抱きつかなくていいの。会って話せれば」
今のところ周囲の客たちはお互いの会話に夢中で、こちらの事なんか気にしていないようだったけれど、つい小声になってしまった。
高橋さんがほおづえをつき、なんとも意地悪そうな顔をする。
「本当に？　ひなは俺にさわりたくない？」
「……っ」
本当は、ちょっとだけ。
さらさらした黒髪をなでたいし、歩いてる間に手をつなぐのが嬉しい。
でも、鈴木君の言葉が脳裏によみがえって胸がざわざわした。せめて、家庭教師の期間が終わるまではこれ以上のスキンシップを避けた方がいいんじゃないだろうか。
そもそも高橋さんのこういう態度がわからない。好意は感じるが教え子をからかっているだけなのか、一時の火遊び的感覚なのか、本気なのか。
「高橋さんって、私のことどう思ってるの？」
「かわいーと思ってるよ。すっごく」
聞きたいのはその言葉じゃない。
複雑な心境で口ごもると、
「なんかあった？」

高橋さんが優しげにたずねた。
「カテキョとやらしーことしてるのかとか、相手にされてないんじゃないかとかいわれた」
「へえ。なんでそんなこと言われたわけ」
「さあ。たぶん今日みたいに会ってる所を見られたんだと思うけど」
「そーじゃなくて。そもそもどうしてそんな話になった？」
「え」
それは非常にいいにくい。
思い出すと勝手に顔が熱をもった。
「告白されてふったら逆ギレされたとか？」
なんでわかるの。
驚いて高橋さんを見ると、彼は一瞬だけ不機嫌そうな表情を浮かべ、おだやかに微笑んだ。

お姉ちゃん

「このまえ同い年くらいの男にからまれてたらしいけど、そいつ？」
チクったな斎藤さん。
やましいことなんかないのに、妙な後ろめたさがこみ上げてきて視線をそらす。
「でももう断ったし。それよりカテキョの会社や親になにかいわれるほうが心配じゃない？」
「ひな本人が訴えたんじゃなきゃどうとでもなるよ。最悪ほかのバイト探すし」
それきりしばらく会話が途絶えた。
普段は高橋さんの方がよくしゃべるので、黙られると困ってしまう。そわそわしたあげく、話をもどしてみた。
「明里の所にでた犬、どう思う？」
動物愛好家としては仲良くなってみたいけれど、パワーストーンを嫌う所をみると、よくないものなんだろうか。
「明里ちゃんの話は聞きたくない」
酷くつっけんどんにいわれて、おどろいた。
「ごめん。別に明里の心霊相談をして欲しかったわけじゃなくて、高橋さんも怪談好きだから興味あるかと思って」
「……」
はああ、と大げさにため息をつかれた。
「明里ちゃんの自己責任だよ」
「えっ」
「本人が望んでそばに置いてるならほうっておけばいい。ただ、その犬が”守ってやるからいうこと聞け”とかいい出したら赤信号かな」
「……覚えとく」
おっかなびっくりうなずくと、外へ出ようとうながされた。

無言。
ひたすら無言で街中を歩く。
気まずくて仕方ないが、このまま帰ったらもっと気まずくなるんじゃないかとヒヤヒヤして脳内で必死に話題を探した。けれど、滅多に見ない不機嫌な横顔に話しかける勇気が出てこない。
やがて駅につき、しぶしぶ改札に向かおうとしたらそちらではなく、ふだん通らない地下への階段を降りて、うす暗く寂れた場所にきた。この先には非常階段くらいしかないからか人っ子一人おらず、しんと静まり返っている。
「俺あの子嫌い」
高橋さんがつぶやく。
「あの子？」
「明里ちゃん。”あたし可愛い”オーラ出まくってててなんかムリ。守ってもらって当然女の子あつかい当然みたいな図々しい所とか。あのこびこびのネコなで声なんとかならないの？　学校にくそ派手な髪飾りつけてく神経も理解できないけど、なんか天狗ってか勘違いしてね？　本当にひなと友達なの？」
彼がだれかの悪口をいうなんて珍しい。どうしてこんなに不機嫌なんだろう。
緊張で裏返った声がでる。
「友達の悪口は聞きたくないよ。それに明里は優しくて賢い、いい子だよ」
高橋さんが嫌そうな顔をする。
「賢いかもしれないけど、優しそうには見えなかったな」
「心霊相談になっちゃったのはごめんってば。沙也のこともそんな風に思ってたの？」
「いや、沙也ちゃんは別に。興味ないっつーかひなが明里ちゃんラブなのが一番ムカつく」
「なにそれ」
いつのまにか壁際に追いつめられていて、正面から覆いかぶさる

ように抱きしめられた。
「ストレートに言わなきゃわかんないだろうから言うけどさ。明里ちゃん明里ちゃんって女同士でべたべたしすぎだろ」
顔は見えないけれどその声は嘘や冗談と思えないくらい感情的で、怖いのか抱きしめられてドキドキしているのかわからなくなった。
「べたべたって、女同士はこんなものじゃない？　別に明里だけじゃなく沙也の話もしひゃっ！？」
ぬれた舌が首筋をなぞる。
それは何度か皮膚をすべり、甘噛みするようについばんできた。同時に手が背中から腰、おしりの辺りをなぞるようになでてくる。
「ぶっちゃけさあ、俺より友達の方が好きでしょ？」
妙にくすぐったいし、耳元で彼の低い声がして、ぞくぞくするような痺れが走る。足が軽くふらついた。
「こ、この前いったじゃん。高橋さんの方が遊ぶ回数もメールも多いって。ちょっ、やめて」
「その割に明里ちゃんの話ばっかだよな。告られたくらいで顔まっかになるし。そんな好みのタイプだった？」
「そんなんじゃないって……っ」
とにかく離せと彼の口を手でふさぐと、指まで甘噛みされてついひるむ。
その一瞬の隙にキスされた。
なんの根拠もなく、拒んでいれば唇にキスだけはされないというか、無理強いはされないだろうと思いこんでいたのでショックで放心してしまった。
好きな人にされて嬉しくないわけがない。
でも、それ以上に裏切られたという動揺のほうが大きかった。
せっかくあの夢はノーカウントにしていたのに。
口をこじ開けて入ってきた舌がからみつく。
未知の感触に反射的に身を引くが、頭と腰に手が回されていて逃げられない。彼の胸をばしばしたたくと、体と体を完全に密着する

ようにされて身動きできなくなった。
むさぼるようにさんざんキスされてわけがわからなくなったころ、ようやく高橋さんがはなれる。
怒っているのか喜んでいるのかよくわからない、熱っぽい瞳が間近でこちらを射る。
「好きだよ。俺の女にしたい。……これがさっきの答え。わかった？」
妖艶で嗜虐的な気配に肩が震える。
「う」
私はごしごしと口をぬぐい、
「た、た、高橋さんの……アホッ！」
走って逃げた。
家に帰って部屋にこもり、ベッドにつっぷして私はぼやいた。
「……友達に妬くことないじゃん」
嫌だっていったのにやめてくれなかった。
こっちも悪かったとは思うけど、普段ふざけていて優しい人があんなに豹変するなんて信じられない。
ちょっと、いやかなり本気で怖かったじゃないか。あのままヤられるかと思った。
「なに泣いてんの」
ふり返ると、ノックもせずに部屋に入ってきたらしい姉が立っていた。
姉妹だから顔は似ているらしいのだが、インドアの私と違ってかなりアウトドア派で体育会系。
部活で鍛えた体は筋肉で引きしまっているし、髪型もベリーショート。
くわえて表情もがははと豪快に笑うか真一文字に口を閉じていることが多いので、あんまり似ていないとよくいわれる。
世にいう姉御肌ってやつだろうか。
「お姉ちゃん」

怒るのも忘れてひしっと抱きつく。また友達とテニスでもしてきたのか、ちょっと汗臭い。
ふと、別の体温と汗の匂いを思い出してしまって反射的に頭をぶんぶんふった。
好きだけど怖いし怖いけど好きだし、嬉しいのか悲しいのか、もうわけわかんない。
「だからなに？　いわなきゃわかんないでしょ。だれかにいじめられたの？」
親には内緒でと頼んで相談したら、姉は奇妙な顔をした。
「好きなの？」
「うん」
「じゃ、ヤらせてやれば？　何発かヤればほとぼりも冷めてがっつかなくなるでしょ」
ぎゃあああああああ信じられない。
「それが姉のいうこと！？」
姉があぐらをかいてふんぞり返る。
あ、ちょっと。そのどろどろ靴下で私のベッドに上がらないで。
「むしろ好きなのに嫌がるあんたがわからん。何度も相手の家にまで行ってるくせに……ある意味かわいそうな男だな高橋。公私とも常に生殺し状態か」
「だっ、だって、そういう理由で行ったんじゃないし。最初は全然そんな気配なかったし。私が嫌がることはしないって信用してたのに」
思い切り鼻で笑われた。
「アホくさ。ガキくさ。馬鹿馬鹿しい」
傷心の妹になんていい草だ。
「別に軽い女になれとはいってない。そんな事されても嫌いになれなくてウジウジウジウジかび臭く悩むくらい好きなら、後で傷ついたとしても後悔は少ないだろっつってんの」
私ってけっこうチョロイというか、単純かもしれない。

さっきまでとても落ちこんでいたのに、姉のこんな一言であっさり立ち直ってしまった。
「そ……そうかも……？」
さあどうぞといえるほど開き直れないが、そう全力で拒否することなかったかもと思えてきた。
「あ、避妊はしなさいよ。生理だっつっても引き下がらない男と避妊しない男にはヤらせちゃいかん」
「お姉ちゃん好き」
生々しい発言をスルーしてくっつくと、彼女はますますふんぞり返った。
「ふふん、敬え」
一時はどうなることかと思ったけれど、姉のおかげでわりと心おだやかに次の家庭教師の日を迎えた。
「最近、８０点以下とったことない」
以前では考えられない点数である。
いつものように私の部屋で机の前にすわり、返ってきた期末テストの束を広げると、
「そうだなー。このままでも合格圏内だけど、どうせだから全教科９０点以上めざすか」
間違えた所だけに軽く目を通していったあと、高橋さんがまじまじとこちらを見た。
「怒ってたんじゃなかったっけ？」
「まだ怒ってるよ」
「へー。なにかすんの？」
面白そうに高橋さんが問う。
「考え中」
ぶっちゃけ何も考えてないけど、まだ怒っているのは本当だ。
彼が笑って私の髪に手をのばす。その手が届くより先にドアが開かれた。
「お茶もってきたよー」

姉が軽いお茶菓子を机に置き、わしっと肩を抱いてくる。
「どーも初めましてえ。ひなたの姉の咲月です。よろしく」
心配して様子を見に来てくれたんだろうか。
「どーも。……姉妹だけあって、目が少し似てるね。雰囲気はぜんぜん違うけど」
爽やかにほほえむ高橋さんにほほえみ返しながら、姉はいった。
「こいつガキなんだから、あんま泣かさないでやってね」
2歳しか違わないくせになにをいう。というか。
「お姉ちゃん」
泣いたってバラすな！
非難の視線を送るが、遅かったらしい。
「泣いたの？」
「無言でボロボロしくしくと」
「これでも優しくしてるつもりなんだけどな……泣くほど嫌か」
高橋さんが低い声を出して、恐怖がうっすら蘇った。
首に回された姉の手をそっとつかむと、彼女は死ぬほど面倒くさそうな顔を浮かべ、
「じゃー、あたしそこで見学してるから。気にしないでつづけて」
室内のソファに腰かけて漫画を読み始めた。
お姉さまありがとう。
「腹くくったんじゃなかったのー？」
高橋さんが帰ったあと、姉にこづかれた。
「怖気づいたな」
くくくと笑われたので、抗議の視線を送る。
「ムカついたから、なんかやり返してからにしようと思ったの」
「……まあ、さっきのも十分嫌がらせにはなっただろうけど。そんなんであたしがいなくなったらどうするつもり？」
「えっ？」
不吉な言葉に目を開くと、彼女は意味深に苦笑した。
「世の中、なにが起こるかわかんないからね」

姉がトラックに轢かれたのは、その二日後だった。
よく交通事故があり、たまに車が横転していたりパトカーが停まっていたりするのを見かける通学路のカーブでのこと。
トラックの運転手によると、カーブを曲がった先に姉がいて避けきれなかったらしい。
直撃はまぬがれたものの服が引っかかり、２０メートルほど引きずった所で止まったのだそうだ。
病院から電話がきて車にのって病院へむかうまではわりと冷静に「あそこの道はよく事故があるから通るなっていつもいってるのに」と母とブツブツいっていたのに、病院に到着していくつものチューブに繋がれて横たわる姉の姿を見たとたん涙が止まらなくなった。
姉は全身にすり傷を作り、左足を二針ぬった。頭部もぶつけてしまったようで、いまだに意識が戻っていない。

目隠し

学校も家庭教師も休んで、病院に泊まりこんだ二日目。
一面まっしろな部屋でちょっと不気味だし、なれない所で寝泊まりするのも緊張するし、姉は目を覚まさないどころかうなされることすらなく、心細くてたまらない。考えたくないがまるで植物のようというか、生きている気配が感じられないのだ。体温すらもヒヤリとして冷たい。
それでも確かに心臓はまだ動いていて、それを希望に母と二人、交代で寝ずの番をしながら見守っていた。
そんなとき、学校帰りに明里と沙也がお見舞いに来てくれた。
二人の顔を見るだけでなんだかほっとする。
母は親戚に電話するために席を外しているが、もどってきたら喜ぶだろう。
「クマできてるじゃん。辛いだろうけど寝なきゃダメだよ」
と沙也。
「うん……でも、寝ると怖い夢ばかりみちゃって」
「あるある、そういうとき。じゃあ、いっそメチャクチャ馬鹿馬鹿しい漫画や映画をみてみるとか」
「……ありがと」
実はそれももう試したあとだ。
昔ペットロスになったときはそれで回復したのだが、なぜか読んでいる最中にぽろぽろ涙が出てきてしまって集中できなかった。大好きな漫画も映画も小説も、人と会話しているときでさえ上の空になってしまうなんて自分が自分じゃないみたいだ。
必死になぐさめてくれる沙也をまえにただうなずいているとふと、病室のドアの前で立ったままの明里が目に入った。
「明里？」
どうしたんだろうと近寄ると、犬の低いうなり声がした。

「ごめん。あたし入れない」
その顔はひどく青ざめ、冷や汗すら浮かんでいる。
彼女のぎこちない視線をたどって、思わず部屋から逃げ出してしまった。
「……ッ」
ベッドに横たわったままの姉の、首から上がなくなっていた。
まるで心霊写真みたいだ。
血は流れていないが、布かなにかで覆いかくされたかのように綺麗に頭部が消え、首と胴体だけが残っている。
そんなバカな。さっきまで普通だったのに。
見間違いじゃないか。見間違いのはずだ。
なんどもまばたきし、十秒でも二十秒でもじっと目をこらすが首から上が見当たらない。
どこへ消えてしまったのか。
「お姉ちゃん」
怖くてドアからうかがうようにしていたら、同じように青ざめた沙也が声もなく病室から出てきた。
彼女にも同じものが見えているのだろう。
もう頭がまっ白になって、食い入るようにそれを見つめるしかできないでいたら、背後から声をかけられた。
「友達がきてくれたの？」
「ひっ」
心臓が飛び出しそうになったが、そこには母が立っていた。
「お、お母さんあれ」
指さすと、姉は普通に病室のベッドで横たわっていた。
相変わらず意識はなく、ぐったりしていて呼吸があるかどうか不安になるような様子だがちゃんと頭もある。
ついまじまじとそれをながめ、二人と顔を見合わせた。
「さっきは」
明里がぽんと肩をたたく。また犬のうなり声がするが、だんだん

気にならなくなってきた。
「気のせいだよ」
彼女は視線をあわせずうつむいている。沙也もかすかに震えている。
明らかに無理をしているが、
「……うん」
私もそう思うことにした。
二人が帰ったあと、私はおそるおそる姉の頭に手をのばした。
顔にすり傷はあるが、頭部に重症になりそうなものはない。
なのに彼女の額はゾッとするほどひんやりしていて、感触もまるで人形の肌を触っているようだった。土気色とはこんなだろうか。
「ひなた、そろそろ帰るよ。学校もあるし、ずっとここに泊まるわけにも行かないから……また明日こよう」
荷物をまとめて、すんと母が鼻をすする。
「うん」
ふと思いついて、腕にはめていたパワーストーンのブレスレットを姉の手首にかけた。
斎藤さんがくれたお守りだが、心霊的なものに効くらしい。
もしさっきの光景が霊的なものなら、これでなんとかならないだろうか。
姉の手首に通したとたん、ブレスレットはバラバラになって床へ落ちた。
まるで彼女は助からないと言われたみたいで、嫌な汗が背中を伝う。
「ひなた？」
母がいぶかしげに呼ぶ。
あわててブレスレットを拾おうとしたとき、ひときわ強い耳鳴りがして、ぷつんとブレーカーが落ちたみたいに視界がまっ暗になった。停電にでもなったのかと辺りを見回していたら母が悲鳴を上げてナースコールを押し、私は失明したのだと知った。

◆

それからしばらく大変だった。

姉の事でまいっていた両親がとり乱しまくり、眼科を5件くらいハシゴさせられた。どの眼科も、また総合病院でも「異常はない」と診断され、原因がわからないため「実は生まれた時から問題があったものが成長して出てきたのかもしれない」という医者もいた。

そんなこんなで、目が見えなくなって早3日。

学校にも外にも行けず、家で退屈していたら高橋さんがお見舞いに来てくれた。

カギを開け、とりあえずリビングへ通してソファにすわる。

「良かった。お父さんは仕事だし、お母さんはお姉ちゃんの様子みに行ってるからすごーく暇で」

見えないといってもそれ以外は健康だし、長年暮らしている自宅の中ならあまり不自由はない。食事、風呂、トイレ、階段の登り降りその他。最初はなにをするにも人の助けがなければできなくて、赤ん坊になってしまったみたいな気分だったけれど、なにかを行うまえにまずぺたぺた触ってから行うようにしてみたらなんとかなってきた。家具の配置なども記憶できているし、外に出なければ大丈夫だろう。そういう訳で留守番していたから助かった。

「思ってたより元気そうで安心した」

頭をなでられて苦笑する。

「周りがパニックになると、かえって冷静になるよね。……ごめんね高橋さん。せっかく勉強教えてもらったのに、もう高校行けないかも」

進学校へ行くのだと期待していた両親にも、ずっと勉強を教えてくれていた高橋さんにも申し訳ない。もう一生両親に養ってもらわなければ生きていけないのだろうかと考えると、顔には出さないが泣けてくる。

「……俺がもらってあげようか？」
唇を指でなぞられて、この人相手に怒っていたのを思い出す。
急にはずかしくなって身をよじると、肩をつかまれ、
「いい加減にしろ」
ゴンッと鈍い音がした。
「こいつに何かされたらいえ。代わりに殴ってやる」
この声は斎藤さん。
「いたの！？」
無口だから気づかなかった。
「そうだ、斎藤さん。あのブレスレット、お姉ちゃんにかけたらバラバラになっちゃって」
事情を説明しようとしたら、
「んじゃこれやるよ」
舌打ちとともにブレスレットらしきものをかけられた。
「あ、ありがとう。でもそーじゃなくてお姉ちゃんが」
「遊んでないでとってやれ」
「ハイハイ。いわれなくてもやるっての」
高橋さんの気だるげな声がして、どこからかほんのり風が吹く。
窓でも開けたのかと思っていたら、いつの間にか目の前に高橋さんの顔。
「え？」
さっきまで暗闇しか見えていなかったのに。
「見える？」
信じられない。
「どうして！？」
なんで？　なんで急に？　なんで！？
視界に光がある。色が映ってる。それがこんなに嬉しいなんて思わなかった。幻覚かと手をのばすと確かに感触がある。医者でも治せなかったのにと呆然としていたら、どっかりソファに腰かけている斎藤さんがいった。

「運が良かったな。えぐられてたら治らなかった」
高橋さんの補足説明によると、小さな女の子の霊が私を目隠ししていたらしい。
それをとってくれたから、見えるようになったそうだ。
「ありがとう……！　もう一生このままかと思ってた！」
実は夜中に泣いたりもしたのだ。感謝してもしきれない。この前のアレは忘れよう。
じんわり涙まで出てきて、ひたすら感激していたら、
「嬉しいか？　一度は見殺しにされたんだぞおまえ」
斎藤さんのそんな一言で涙がひっこんだ。
「いちいち人聞き悪いなおまえは。俺はひなには害がないと思ったから」
「知ってて放置したんだよな」
「……どういうこと？」
たずねると、いいにくそうに高橋さんが告げた。
「ごめん。咲月ちゃんのこと、わかってたんだ」
このまえ会ったときから、姉が祟られていて、なにか良くないことがおきるだろうと気づいていた。同時にそれは高橋さんの手に負えないものだということも。そして、祟られているのは姉で私には影響がないと思ったので見ないふりをしていたらしい。
「うかつに手だしたら死にそうだったから」
何度か病院へ見舞いに行こうとしたが、急用の電話がかかってきたり、目の前で交通事故が発生したり、飛び降りで電車が止まったり、車のエンジンがかからなくなったり、タイヤがパンクしたりなにもない道でスリップしたりと、色々な事がおきて行けなかったそうだ。
「お姉ちゃんが祟られてるって、どうして」
「わかんねーけど、首がない人形が怒ってる。なんか悪さしたんだろ……てか、ひなは怒んないの？」
「命がけで赤の他人を助けろなんていえないよ。こうして目も治し

てくれたし、気にしないで」
なぜか高橋さんが苦しそうな表情をした。
「あああ、ひなのそーいうとこが好き！　大好きなんだけどそれすげー皮肉！」
「いってやれいってやれ。赤の他人で冷血人間って」
しかめっ面のまま斎藤さんがからかうように告げる。
「いや、嫌味でいったわけじゃないから。気にしないでいいよ」
本当に、と伝えると高橋さんが眉根をよせる。
「崇られたのがひなら助けた」
それはフォローになってない。
「……うちのお姉ちゃん、もう助からないの？」
しんと静寂が流れた。
つまりそういうことだろう。
医者も手をつくしてくれているし、神だのみでもするしかないか。
うつむくと、二人がつぶやいた。
「やるだけはやるよ。斎藤もよんだし」
「期待はすんなよ」
そういってくれただけで十分だった。

人形塚

空は今にも降り出しそうにどんよりとしていて、たまに雷の音だけが小さく響いている。
風も湿気をふくんで肌寒い。
まだ昼間なのに、嵐の夜みたいだ。
「ひなは助手席で」
高橋さんの車の後部座席にのろうとしたら車主がいった。
なにかこだわりでもあるんだろうか。
助手席のドアに手をかけたとき。ロックがかかった音がしてつい高橋さんを見た。
「なんでカギかけたの？」
彼が苦笑する。
「いや……俺はなにもしてない」
といいつつ車の屋根を見る。斎藤さんがそこへ無造作に拳骨を落とした。痛そうな鈍い音がして、高橋さんがぼやく。
「へこんだらどーすんだよ」
「事故るよりマシだろ」
もしかしてなにかいたのかな、と思ったが深く考えるのはやめておく。
再びカギを開けて車内に入り、姉が入院している病院へついた。
斎藤さんは人間の霊は苦手だが、人形やいわくつきの物には好かれやすく相性がいいらしい。が、彼はぐったり横たわる姉を一目見るなり、
「無理」
といい切った。
「危ないと思ったらいつでも逃げてね」といったのは私だけど、すごく早かった……。
「そ……そう」

「相手が悪いな。これ●●の人形塚だろ。人形と子供がうじゃうじゃ乗っかってんぞ」
なんだか姉の方からねばっこい視線を感じた気がして、悪寒が走った。彼女はずっと眠ったままなのでそんなはずないのだが。
「とりあえず、気休めだけしてジジイに頼むか」
高橋さんが白い紙をとりだし、姉のベッドの下にぺたりと貼りつける。ちらっと見えただけだが手のひらサイズくらいで、人の形に切ったものに姉の名前とよくわからない文字が書かれていた。まだ諦めたわけではないようだ。
うながされて廊下へ出ると、トイレから母が出てきた。
「ひなた!?」
視力が戻ったのを喜んでもらえたのはいいが、いい訳にものすごーく苦労した。
しどろもどろで説明していたら、途中から高橋さんがしれっと「ストレスで一時的に見えなくなってたのかもしれませんねー。家で愚痴きいてたらいきなり見えるようになって、どうしてもお姉さんの様子が気になるっていうんで連れてきたんです」とか「まだ落ちついてないみたいですし、ちょっと気分転換させてから家まで送っておきますよ」とかその他いろいろ助け舟をだしてくれて、それを聞いている内に母は納得したようで、最後には「暗くなる前に帰ってきなさいよ」とかいっていた。
高橋さんって頼もしいけど、敵に回したら恐ろしい事になる気がする。
病院を出てから、だいたい一時間半くらいたったころ。
そこそこ大きな神社へついた。
たしか観光名所にもなっている所で、私もお正月に一度だけ来たことがある。この天気のせいで人気は少ないもののちらほら参拝客がいて、境内はすんだ空気で満ちていた。奥へ進み、神主さんの住居スペースらしい所へ入ると白髪のおじいさんがこちらへ歩いてくる。

「それ以上入ってくんじゃねえ」
私とそう変わらないくらいの、小柄な人だ。
けわしい表情でしかめっ面なのに、目が優しそうだからか不思議と愛嬌があって怖くない。私服姿で、白い紙袋を抱えていた。
「また厄介事もってきやがったな。素人のくせに出しゃばるからだ」
高橋さんが苦笑する。
「悪い。こんどお礼すっからさー」
「しばらくこき使ってやる」
おじいさんぐっと眉をつり上げるが、なんだか親しそうだ。以前いっていた神社やってる親戚ってこの人だろうか。
「この子の姉ちゃんなんだよ」
高橋さんが私の頭をぽんぽんたたく。
おじいさんがちょっと表情をゆるめ、それからわざとらしく怖い顔をした。あんまり怖くない。
「嬢ちゃん、こいつのいうことなんか信用すんじゃねえぞ。こいつはな、修行もせずに勝手に見聞きして覚えて生意気いいやがるし、そのくせたまに間違ってっから腹が立つ」
「は、はあ」
たぶん、高橋さんの師匠みたいな人なんだろうな、このおじいさん。
おじいさんは持っていた紙袋を斎藤さんに手渡した。
「人形には人形だ。清めてあるから上手く使え。酒と菓子も入れてある。あんたが持った方がいいだろう」
「ああ」
斎藤さんが短く答える。
この二人も顔見知りなんだろうか。
「事情を話してあったの？」
こっそり問うと、高橋さんが投げやりに答えた。
「いや。このジジイ、いつ来てもこうなんだ」
車内にもどると、斎藤さんが紙袋から人形をとり出した。

陶器でできたおかっぱ頭の市松人形で、群青色の綺麗な着物をきている。大きさはだいたい５０センチくらいだろうか。おっとりと優しそうな顔立ちだ。
斎藤さんが手馴れた手つきでその人形の服をぬがして、ぎょっとした。
どきりとするほど精巧に作られたまっ白な人形の肌があらわになり、マジックペンをわたされる。
「姉の名前を書け」
身代わりにするんだろうと察しがついて、ほっとする。
人形など、こういった人を模したものは人にふりかかる厄災を身代わりに引き受け、人が無事に過ごせるよう祈って作られたものでもあると以前高橋さんがいっていた。
「なんかエッチなこと考えた？」
高橋さんにささやかれてカッと顔が熱くなった。
「ち……ちょっとドキッとしただけ」
こんな綺麗な人形を身代わりにするなんてもったいないけれど、姉の命には代えられない。
ごめんなさい。お願いします。
心の中でこっそり祈って名前を書くと、斎藤さんが人形の着物を着つけていく。人間の着物と同じくらい着せるのが難しそうなのに、完璧に元通りになっていた。なんて器用な。
その人形をもってまた車で１時間ほど移動し、大きくて古そうなお寺へついた。
こんな場所があるとは知らなかったが、人形供養で有名な場所らしい。木と瓦でできた門をくぐるとたくさん庭木が植えられた境内に大きな石塚があり、花や水、お菓子などが供えられている。台風の前のような空模様のせいか庭木に影がかかり、えもいえぬ雰囲気がただよっている。ぜったい夜にはきたくない場所だ。
斎藤さんが奥へ入って声をかけると、和服姿のおばさんが出てきた。

少々白髪の混じった黒髪をきちんと結いあげ、簡素だが上質そうな着物を上品に着こなしている。
キツネのような切れ上がった目をした、色っぽい女性だ。
「どないしはったん、お人形みたいな女の子つれて。あら、イケメンさんもおるやん！　入り入り」
きゃっと笑う。
第一印象と違ってかわいい感じの人みたいだ。
和室に通され、温かいお茶までいただいたあと彼女がいった。
「わたしここの住職の娘で、藤田公恵（ふじたきみえ）いうねん。斎藤くんとは5，6年くらい前からの知り合いかな。別に弟子でも身内でもなんでもないねんけど、この子忘れたころにきはるからなー。縁ってやつがあんねやろなあ。あ、あんたらは？」
私と高橋さんが名乗ったあと、イライラしたように斎藤さんが問う。
「高校生くらいのガキが人形の首おとしたりしなかったか」
藤田さんの表情がくもる。
「……あんたらの知り合いか。人形は怒ったら怖いからイタズラしたらあかんよ、って何度もいうたんやけどなぁ」
お姉ちゃんのバカ。
本当にそんなイタズラをしたのだとしたら、意識がもどったあとしばらく説教してやる。
申し訳なくて頭が下がった。
「えらい贔屓にしてくれるとこのお嬢さんがお友達と見たい、いうから特別にあの人形みせたげてん。あ、あの人形いうのはちょっと難儀なやつでな。うちで毎年人形供養してるの知ってる？　それできちんとやってんのに未だにオチてくれへんいわくつきの子なんよ。しゃーないから奥にしまって、毎日お念仏あげてんねんけど」
「いそいでんだ要点だけ話せ」
斎藤さんがガンを飛ばすと、藤田さんは負けず劣らずの迫力でにらみ返した。

「人形蔵の大掃除やってもらおか。あとこの前の台風で瓦とんだからそこもよろしくな。なんかまた台風きそうやし。それと運んで欲しい荷物がいくつかあんねん。ああ、怖てさわれへんから人形とりにきて欲しいいうてる檀家さんもいてたなあ」
うっと斎藤さんが面倒くさそうな顔をする。
「事が片づいてからな」
「今週の土日にやって」
チッと大きな舌打ちが響く。
おお、斎藤さんがいい負かされた。なんかすごい。
「私も手伝います」
ぺこりと頭を下げると、藤田さんと高橋さんが同時にしゃべった。
「なにいうてんの！　ぜんぶ力仕事やしオバケいっぱい出るし女の子にはムリや。男にやらせとき」
「俺のときには手伝うっていわなかったのに酷くねえ？」
「た、高橋さんのももちろん手伝うよ」
「おまえにはムリ。足手まとい」
斎藤さんが事もなげに告げる。
そんなにハッキリきっぱりいわれると少しショックだ。力仕事はできなくても、雑用くらいはと思うのだが。返す言葉もなくて大人しくしていたら、斎藤さんが少したじろいだようなまなざしを向けてきた。
「……いい返せよ」
「いや、事実だし」
情けない顔をしてしまいそうで目を合わせられないでいると、ぽんぽんと高橋さんに頭をなでられた。
「えらい気に入られてるなぁ」
と藤田さんが笑った。
学生の子たちにいわくつきの人形を見せてあげたらそそくさと逃げ帰り、怪しいと思ったら人形の首がとれてしまっていた。修理して丁重に供養したが、見学にきた5人の学生の内3人が怪我や病気

に遭った。あわてて謝りにきたその子たちのお祓いをしたが、住職の手応えはいまいち。
その後、彼らと連絡がとれないのでもしかして……と思っていたと藤田さんは語った。
「わたしは普段お世話しとるから平気やけど、高橋さんと保月ちゃんはここでまっといたほうがええと思うわ。昔、霊能者さん呼んで頼んだこともあんねんけど、その人帰り道に事故で亡くなってしまったし。できるだけ見んほうがいい」
「はい」
うなずいたが、
「いや、俺らも行きます。なんかもう目つけられてるみたいなんで。ついてったほうが安全そうです」
と高橋さんがふすまを指した。
藤田さんがちょっと眉をあげ、ふすまを開ける。
うす暗い廊下に髪が不ぞろいにのび、ぼさぼさになった日本人形が立っていた。

お手玉

ぱっと見ただけで背中がぞくっとくるような不気味な表情をしていて、今にも動き出しそうだ。夢に出そうで見たくないのに、猛獣に出くわしたみたいに目が離せない。さっき廊下を通ったときにこんなものはなかったし、他のだれかが置いていった気配などなかった。

まさか自分で歩いてきたのか。

「うわ……ほんまやなぁ……この子もつれてこか」

藤田さんはひょいと人形を抱え、廊下を先導した。

なんでこの人たちだれも動揺しないの？

慣れきっている感じのその様子がちょっとだけうすら寒く、三人のあとをあわてて追いかける。あちこちの物陰に人形たちがいて、それらがじいっとこちらを観察しているような、一人でいたらたちまち襲われてしまいそうな錯覚を抱く。

それくらい、この建物は異様な気配に満ちていた。

広く開かれた本堂では、住職さんらしい年配のお坊さんがお経を上げていた。

つるりとした坊主頭のおじいさんで、袈裟とかいう黒い着物をきている。年のわりに体格はがっしりしていて、お腹がぽっこりモチのようにふくらんでいた。

その対面には緑の着物をきた、短いおかっぱの市松人形。

ちらりとその顔を見たとたん、「あ、生きている」と思ってしまった。

おだやかにほほえむそれは明らかに人形の顔ではない。あどけない5歳くらいの女の子がほほえんでいるようにしか見えないのだ。そうとしか思えないくらい生気にあふれている。目が合ってしまってじわりと冷や汗をかいていたら、いきなりポロリと人形の首が落ちて転がった。

「ひッ！？」
反射的に高橋さんの腕をつかむと、彼がぽつりといった。
「さすがに迫力が違うな」
「おお？　お客さんか？　こんな天気にようきたなあ」
住職さんがふり返る。
「客やけど客ちゃうで」
藤田さんがもろもろの事情を説明し、斎藤さんが紙袋から人形とお菓子、お酒をとりだして住職さんにわたす。
「そらこっちもＶＩＰの子供が巻きこまれとるし、これ以上人死にみたくないしでなんとかしたいのはやまやまなんやけど……お！　ええもん入っとるやん。これで機嫌なおるかなぁお嬢」
住職さんは斎藤さんがもってきた群青色の着物の人形を抱えると、緑の着物をきた、首のとれた人形のまえへさし出した。
直後、もってきた人形の首がとれた。
あどけない顔が転々と床をはね、ごろんと高橋さんの前で止まる。たまらず私は彼の背後へ逃げ出した。
「あかんか。こんなけお経あげてお供え物もいっぱいして、よーしてるんやからそろそろ機嫌なおしてもええんちゃう？」
と住職さん。
新品同様だった人形の首がとつぜんとれる理由がまったくわからなくて、私はただ言葉を失っていた。それ以上に不気味なのが、住職さんが完全に人形を人間の子供あつかいしていて、周囲もそれを当然のように受け入れていることだ。あれはそういう人形なのだと、頭では理解していても感情がなかなか追いつかない。
この空間では私が異端なのだ。
うすら寒いものを感じて身震いしていたら、斎藤さんが人形に近づいて片膝をついた。やんわり頭を拾って、ささやく。
「こんど新しい着物を買ってやるから。見逃してやってくれ」
聞いたこともないような、おだやかで優しい声音にドキリとした。
彼は乱れた人形の髪をクシですき、首をはめて着物も整える。

不意に耳元で、
「あお……」
かすれるような女の子の声がして全身の毛が逆立った。
ばっと横を見るが、そこにはなにもいない。
周囲のみんながほっとしたような顔をしているのが不思議だった。
「そーか、青い着物が欲しいんか。知らん子が綺麗なべべきとるからうらやましくなったんやなぁ。……よっしゃ！　ほな着物代はうちで立て替えたるから、頼むで斎藤くん」
「ん」
斎藤さんが人形を住職さんに返し、神社からもってきた群青色の着物をきた人形を庭でお焚き上げした。
これはもう役目を終えたのでいいらしい。残しておくとかえって変なものが入ってよくないとか。
住職さんと藤田さんに丁重にお礼と謝罪をして、私たちはお寺をさった。
家に連絡を入れたので大丈夫だとは思うが、空はすっかり黒くそまってしまっている。
時計をみると、すでに七時を回っていた。
「上手くいった……んだよね？」
なんだか実感がわかなくて帰りの車内でたずねると、高橋さんが笑った。
「交渉成立したからなー。まだ油断できないけど大丈夫だと思う。てか、斎藤のタラシ声に寒気がした」
「私もびっくりした」
目つきが凶悪だが顔だちは整っているし、男前って感じの魅力があるので優しく声をかければコロッといく女性は多そうだ。
「勝てねーから下手に出るしかなかっただけだ。あのガキいつか燃やしてやる」
斎藤さんが苦々しげに毒づく。
なにこの豹変ぶり。ずっとさっきみたいにしていればいいのに、

もったいない。
「二人とも本当にありがとう。お姉ちゃんのためになん時間もかけて移動したり、いろんな人に頭下げ……下げてはなかったような気がしなくもないけど。すごく嬉しかった。大したお礼はできないけど、私にできることあったらいってね。なんでもするから」
まだ姉の意識がもどったわけではないので安心できないけれど、例え意識がもどらなくてもここまでしてくれた事実がありがたい。
「馬鹿」
なぜか斎藤さんに怒られた。
高橋さんが意味深に笑う。
「なに頼もうかなー」
その意味に気づいたのは、家について彼らと別れてからだった。

◆

夜というか朝というべきか迷う、深夜2時44分。
姉が目を覚ましたと病院から電話がきて、身支度もそこそこに家族総出でかけつけた。
医師と看護士の会話だけがひびく病室で、彼女は白いベッドに腰かけ、足を組んでぼうっと天井をみつめている。短い髪は汗ばみ、体にはまだ脈拍計や点滴がつながれたままで、パジャマからのぞく素肌には包帯や絆創膏がはられていて痛々しい。けれど、その表情には生気がもどっている。
「お姉ちゃん！」
よぶとこちらに目をやって、気まずそうに笑った。
「ああ……なんか悪いね。心配かけたみたいで」
医者によると二日後には退院できるそうだ。
詳しい話を聞いたあと病室で一時間くらい家族でいろいろ話していたが、朝になると父はそのまま会社へ行った。私と母は家に帰っていったん仮眠をとり、昼に出直してそれからずっと姉につきそっ

ていた。また学校を休んでしまったが、非常事態だし目も治ったばかりだからと両親からは二つ返事でＯＫがでた。
そして、おやつ時くらいのこと。
母がまた親戚や学校への対応で席を外している間。
検査が終わって脈拍計も外れ、ベッドでごろごろしながら姉が事の顛末を語りだした。
夏休み中、友達の家に泊まりに行って遊んでいたら、近くに怖い場所があるから見に行こうという話になった。古くなった人形を供養する人形寺という所で、友達の親が贔屓にしているから、そこに保管されているいわくつきの人形を見せてもらえるのだという。それで人形を見て、きゃあきゃあいいながら写真を撮ったりしてふざけている内に友達のひじが当たり、人形を落としてしまった。
衝撃で首がとれてしまい、怖くなって逃げ帰った。
けして最初からイタズラするつもりではなかったのだと姉は念押しした。
信じてなかったわけではないけれど、高橋さんたちがいっていたことが本当に当たっていたのだと改めておどろく。
「素直に謝ればよかったのに」
つぶやくと、彼女はフンと鼻を鳴らした。
「同じ状況ならあんただって逃げるよ！　ぜったい」
いばるな。
「だってさー、落とした張本人は半泣きでまっ先に逃げちゃったし。残りの3人も早く退散しよーって感じだったし。高そうな人形だったからね。弁償なんてできないし、あたし一人が責任とらされたら嫌だし、つい……まさか死んじゃうとは思わなかったな」
「えっ」
「あたしこのまえお葬式行ったでしょ」
人形を落とした子が、駅のホームから転落して亡くなった。
自殺ではないかという噂もあるが、姉はそう思っていないらしい。
一緒に人形を見に行った3人も自転車で崖から落ちたり、高熱が

下がらなかったり、調理中にありえない角度から包丁が飛んできて腕に刺さったりと次々不幸に襲われた。
「霊とか信じてないけど、あたしにもなんかあるかもとは思ったねー。さすがに。まあこうしてケガだけで済んだわけだけども！」
だからどーしてそんな偉そうなのか。
ふっと一瞬むなしそうな表情を浮かべて、姉が枕の下からなにかをとりだした。
「みて」
大量の黒い髪の毛。
「きっ！？」
きもちわるっ。
彼女の抜け毛かと思ったが、姉は茶髪に染めている。
「なにそれ」
つい身構えると、彼女はポツリとつぶやいた。
「戦利品」
は？
車にひかれてから病院でめざめるまでの間。
姉は長い夢をみていたそうだ。
おばあちゃんちみたいな古くて大きな家の座敷で、小さな女の子がお手玉で遊んでいる。5，6歳くらいのおかっぱ頭に緑の着物姿。白目のないまっ黒な瞳で終始ほほえむその顔を見て、座敷わらしだと思った。
「いちかけ、にいかけ、さんかけて」
座敷わらしはわらべ歌に合わせてぽんぽんお手玉を投げている。
落としもせず器用なものだとながめているうちに、それは小豆を包んだ布などではなく人間のパーツだと気づいて全身がぎくりとこわばった。ぞわぞわと冷たい悪寒が背中を逆なでし、声すらあげられない。
「姉さん姉さん、どこゆくの」
宙をまっているのは葬式でみたばかりの友達の顔。生首だ。おび

えてひきつったそれと目があって身震いする。胴体もないのにまだ生きている。身をすべて削がれて骨だけになっても生きている、活き造りの魚のようだ。
いっそ殺してやってくれ。
「切腹なされし父様のお墓まいりにまいります」
思い切りさけんで逃げ出したいのに体が動かない。
次に飛ぶのは女のうで。包丁が刺さった友達のうでだと直感した。ならば隣の目玉は崖から落ちて片目を失った少女のものだろう。お手玉にされているのはその三人。
高熱で寝こんでいた友達は助かったのだろうか。
「お墓の前で手を合わせ、南無阿弥陀仏ととなえます」
歌が終わり、座敷わらしが手を止めた。
「次はお姉ちゃんの番」
さあ、と生首と腕と目玉をさしだしてくる。
断ったら自分もお手玉にされるのだろうか。
空気がねばっこいというか重いというか、まとわりつくようで気持ち悪い。無意識に肩がふるえ、冷や汗がだらだらと背筋を流れる。目玉を手のひらにのせられそうになって、ようやく声がでた。
「てか、あんただれ？」
座敷わらしはほほえんだまま、だまっている。この表情しかできないのではないだろうか。さっきから少しも顔が動かない。
「知らない子とは遊ばない！」
「知らない子じゃないよ。前に遊んだよ」
「あんたなんか知らない」
「どうしてそんなこというの？」
いきなり至近距離につめ寄られて後ずさる。けれども生首たちが視界の隅に入って、カッと頭に血が上った。
こんなガキに殺されてやるものか。
座敷わらしの頭をつかみ、髪をむしってむしって無我夢中で引きちぎりまくってやった。途中で首に激痛が走り、視界がぐるっと回

転して青い着物をきた自分の胴体が目に映り「首を切られた！　ちくしょうこの野郎ちくしょうちくしょう！」と怒り狂ったところで、病室のベッドで目が覚めた。
「そしたら手に髪の毛つかんでてさー。みてよこれキモイったら」
がははと姉が笑う。
私は両手で顔をおおっていた。
なんかもう、どこからつっこめばいいのか。
「……無事でよかったよ」
「うん！　ありがと」
「それとまず、無謀すぎ。無茶しすぎ。夢とはいえなんでそんな危ない場面でそーいうことしちゃうの。本当に死んでたらどーするつもりなの？　だからお姉ちゃんは昔からケガばっかしてるんだよ。女の子なのに殴り合いのケンカとかするし」
「だって友達をあんな風にオモチャにされたらムカつくじゃない。機嫌とって生きるより噛みついて死んでやるわ。死んでなんかやらないけど」
そんな風にいわれたら怒れないではないか。
「座敷わらしはいい妖怪だから、それとは違うと思うよ。その女の子って、お姉ちゃんの友達が壊しちゃった人形じゃないの？」
高橋さんと斉藤さんが助けてくれたこと、人形寺の人たちも困っていたことなどを話すと、彼女は小馬鹿にしたように笑った。
「あんたいつかツボ買わされるよ」
できれば姉も一緒に彼らへお礼をいって欲しかったのだが、この顔を見るかぎりやめたほうがよさそうだ。
「もしそれが本当なら……その人形が身代わりになってくれたからあたしの首は無事だったってことになるね」
そんなつぶやきにドキリとする。
「あ。そっか、時間差はあるけどあのとき人形の首が落ちたのは……そういうことだったのかも」
単に着物の柄を妬んで首を落としたのかと思っていた。だとした

ら、身代わり人形を作るのがあと少し遅れていたらどうなっていたんだろう。
急にまた不安になってきて、明るい話題に切り替えた。
それからしばらく後に聞いた話だが、高熱で寝こんでいた姉の友達も同じ夢を見ていたそうだ。
古くて大きな座敷で着物姿の少女にお手玉をせがまれ、泣く泣くグロテスクなお手玉で遊んでいた。途中で嫌になって「帰りたい」と訴えると「ダメだよ。お姉ちゃんはずっとここにいるの。ずっとずっと遊ぶんだから」と告げられてもう発狂しそうだった。熱が下がった今はその夢を見ることもなく、元気に暮らしている。
けれど、もう一生日本人形は見たくないといっているらしい。

寝言

後日、休日の昼さがり。
直接お礼がいいたくて、高橋さんのマンションへむかおうとしていたら、出がけに母が「これ親戚に送ったやつの余りだけど、もって行きなさい」とお茶菓子をいくつかくれた。
「友達の家に遊びに行ってくる」としか説明していないのだが、なにかいいたげな顔でみつめられる。
「咲月がおきない時にね、何度か気持ち悪い影を見たんだけど、いつのまにか見なくなったんだよね。あんたなにか知らない？」
明里や高橋さんほどではないが母にも霊感があり、勘がするどい。
高橋さんたちのことを話そうかと迷ったが、やめておいた。
姉は当事者だからいいが、それ以外の人に話すと高橋さんが嫌がりそうだと思ったからだ。病院で母と会ったときも霊の話はかくしていたし……今思い返すと、明里と沙也に話していたと知ったときも彼はひそかに嫌がっていた気がする。特に口止めもされていないし、出会ってまもないころの私に軽く話したくらいだからわりと他人に話しているのかと思っていたが、そうでもないのだと最近ようやくわかってきた。
「知らない」
とだけ答えて、家を出た。
マンションには斉藤さんも訪れていて、ちょうどよかったので二人にお茶菓子をわたすと共に礼を告げた。
「力仕事は無理だけど、掃除とかお使いくらいなら手伝えるからいくらでもいってね」
「じゃ、来週の土日てつだってもらおうかな。ついでにジジイを紹介してあげよう。あれでなかなか面白い人だから」
と高橋さん。
「うん。土日あけておくね」

「斎藤もくるか？」
「俺は俺でいそがしい」
心なしか疲れているようだ。午前中に一仕事おえてきたのかもしれない。
「あ、肩もむよ」
手伝いを押し売りしても鬱陶しいだろうし、このほうがいいだろう。
斎藤さんが一瞬「は？」という顔でこちらをにらんだが、けっきょくなにもいわなかったので気にせず手をのばした。
「意外とこってないね」
マッサージ素人だが、たまに母や姉ともみあいっこしているのでこっているかどうかくらいはわかる。幅の広い肩はしっかり筋肉がついていて分厚く、つかむのに苦労した。
「なんで斎藤には自分からさわる……？」
高橋さんが恨みがましげにつぶやく。
「追いかけ回されると逃げたくなるものだよ高橋さん。他意はないしね」
「そして逃げられると追いたくなるという無限ループに陥るわけだ。俺の肩ももんで」
ちなみに、高橋さんの肩はすごくこっていた。
「じゃあな」
用事が済んだらしく、斎藤さんが帰ろうとする。
「高橋さんの家だから私がいうのもなんだけど、斎藤さんもたまにはゆっくりしていけばいいのに」
まだ午後三時にもなっていない。
何気なくいうと、彼は靴をはきながら横目でこちらを見た。切れ長の瞳に私の顔が映る。
「殴って欲しいか？」
「え！？」
「あいつ」

ちらりと視線を高橋さんに動かす。
どうしてそういう話になるのか。
高橋さんはじとーっとした目で静観している。
「ううん、別に」
もしかして、高橋さんと私がちょっと微妙な空気になっているのに気づいていたんだろうか。
首をふると、彼は黙って出ていった。
バタンと無情にドアが閉まる。
「えーっと、じゃ、私もそろそろ帰」
「なんで？　まだ来たばっかじゃん」
するりと腰に腕が回され、耳に息がかかる。かすかに男物の香水の匂いがした。
「……こーいう流れになるかと思ったからだよ」
のしかかるように後ろから抱きすくめられて、顔が勝手に熱をもつ。
「わかってて来たんだ？　期待には応えないとなー」
み、耳をかむんじゃない。
確かに姉の言葉で「いいかな」とは思っちゃったけれど、やっぱりちょっといざとなるとひるむというか、斎藤さんがいてホッとしていたのに。
「寝不足なら大人しく寝てなよ」
「昨日は薬なしで寝れたし平気」
「え？　眠れるようになったの？」
「ん？　前から薬飲まなくても眠れるときはあるよ。眠れないときのほうが多いっていうだけで」
「へー」
いつか治ればいいのに。
なんて思っていたら大きな手のひらが胸にふれてきて、体がこわばる。どうしていいかわからずにいたら、彼が笑いながらささやいた。

「大丈夫、今度はちゃんと優しくするから」
正面にまわって顔を近づけてくる。
「それとも俺のこと嫌い？」
黒い瞳に自分が映っているのがはずかしくて顔をそらしそうになったけれど、ほおに手をそえられていてそらせない。
「……すき」
観念して、かなりかなりかなりはずかしかったけれど目を閉じた。
熱をもった感触に背筋がぞくりとする。
この前とちがい、それは優しく優しくついばむようにふれてくる。ふれるだけのキスなのに気もちよすぎて頭がぼーっとしてしまって、とろんとしていたら高橋さんのケータイから着信音が鳴り響いた。
電話のようだ。
ぼんやり我に返ると、服を着たままブラのホックが外されていて、スカートの中で太ももをなぞられていた。手つきが妙にねちこくていやらしい。
「んん……！？」
いつのまに。
おどろいて唇をはなすと、再び口づけられそうになる。
ケータイはずっと鳴り続けている。
「な、鳴ってるよ」
「無視だ無視」
「緊急かもしれないでしょ」
私のパンツをずり下ろそうとしていた手をぺしっと払いのけてスカートを押さえると、彼はがくりとうつむいた。
「しょうもない用件だったら殺す……！」
彼が電話に出たとたん、回線の向こうの声がかすかにこちらまで聞こえてくる。内容はよくわからないがひどくあせっているようだ。重要な用件らしく、高橋さんが眉根をよせる。
「……なんかいそがしそうだから帰るね」

そそくさと乱れた服をもどし、小声で告げて私は部屋を出た。
まだ明るいのに、外は冷たい風が吹いている。
さわられていた感触がまだ生々しく残っていて顔から火が出そうだったから、ちょうどよかった。
「また今度つづきしよ」
「……」
帰宅すると同時に届いた高橋さんからのメールに返信できないまま数日が過ぎ、家庭教師の日になった。
彼がやってきて、いつも通り私の部屋でテキストを広げる。
さすがに授業中は怪しい雰囲気になることもなく、むしろちょっとスパルタ気味に勉強が進んだ。怒鳴ったりキツイ言葉を吐かれたりすることは一切ないが、ちょっとトゲのある言葉が入ったりお説教が長引いたりする。すでに志望校の合格圏内の成績なのだから現状維持でいいじゃんと思うのだけれど、それが彼にとっては「もったいない！」らしい。受験シーズンが迫ってきたからってそんなに気合入れてくれなくていいのに。
「そうそう、神社の手伝い土曜日になったから。朝むかえに行く」
一息入れたとき、コーヒーに口をつけて高橋さんがいった。
「うん。なにすればいいの？　掃除とか？」
彼はニヤリと笑う。
「面白いもんが見れるよ」
あれ、ちょっとヤな予感。
「こ」
怖いのは嫌なんだけど、といおうとすると同時にちゅっとキスされて心臓がはねる。
「さ、勉強勉強」
高橋さんが楽しげに机に向き直る。
話をそらされた気がしなくもない。

◆

約束していた土曜日の朝。
日が昇るのが遅くなってきたようで、辺りはまだうす暗い。霜が降りたせいか、辺りには白くもやがかかっている。風景がはっきり見えないから、一人だったら少し心細くなっていたかもしれない。きっと、タクシーの運転手が雨幽霊を拾うのはこんな雰囲気の日だ。雨は降っていないけれど。
そんな中、移動中の車内で高橋さんが問う。
「寝言に返事しちゃいけないって話、知ってる？」
「聞いたことある。おきられなくなるとか、死ぬとか」
迷信だとは思うけれど、とても試す気にはなれない。
「じゃ、寝言とケンカして負けちゃいけないってのは？」
「ケンカ！？　寝てる人とケンカなんてするの？」
「できるみたいなんだ、それが」
ある所に同棲中の大学生カップルがいた。
女のほうは普段から寝言が多くて、男はたまに話しかけたりしていた。おきているときと変わらない返事をするのが面白かったらしい。
ある夜。
同棲しているマンションでいつもどおり眠る女に話しかけていたら、つまらないことでケンカになった。確か女が男友達と遊びに行ったけど、男も女友達と合コンに参加してたとか、そんなことで。
「俺からしたらお互いさまじゃんって感じなんだけど、気が弱いうえに口下手な男だったらしくてさ」
女は男友達とちょっと昼食を一緒に食べただけだが、合コンは明らかにそういう目的の場所だし恋人がいる身で行くべきじゃない。男のほうが悪い。
そう押し切られて負けてしまった。
さすがに不愉快に思い、男も布団にもぐって目を閉じた。
直後、女が布団から半身をおこす。

なんだ、途中からおきていたのか。
そう思ったが様子がおかしい。
上半身をおこしてまっすぐ前を見つめたまま、一言も口を利かないのだ。
寝ぼけているのか？
肩をゆすって名前を呼んでも反応しない。目を開いているのになにも見ていない。よく知っている彼女ではなく、言葉が通じないなにかと向かい合っているようで身の毛がよだつ。けれどほうっておくわけにもいかなくて声をかけ続けていたら、彼女はいきなり倒れるように眠った。
翌朝、問いただしてもケンカしたことも上半身だけおこしたことも覚えていない。
けれどそれから女は変になった。
おきている間は普通なのだが、夜中の二時ごろになるといつも上半身だけおこしてじっと前方を見つめる。そうしているときは呼びかけても返事をせず、まばたきもしない。だいたい5分くらいするとバタッと倒れるようにまた眠るのであまり気にしていなかったが、それだけではすまなかった。
二週間くらいしたころ。
まだ空が暗い早朝に物音がして男が目を覚ますと、玄関から女が入ってきたところだった。
夜中にどこかへ出かけていたのか。
たずねるより先にぎょっと目を疑う。
女は全裸だった。
汚れた素足で室内へ上がる彼女に声をかけてもまるで反応がない。目は開いているのにぼうっとした顔で寝室へ行こうとする。だれかに暴行されたんじゃないかと心配になってほおをたたくと、今目が覚めたというように我に返った。
「痛い！　なにすんの！」
「そんな格好でどこ行ってたんだよ！」

「格好ってな……！？　なんであたし裸なの？」
女はなにも覚えていなかった。
暴行を受けたような形跡はなかったので少しだけ安心しつつ、事と次第を説明する。
「おまえどうしちゃったんだよ。おかしいよ」
ため息をついた直後。
「うるせえな」
まったく知らない男の声で女がいった。
「えっ」
とっさに後ずさったときには女はいつもどおりに戻っていて、不思議そうな顔をしていた。
それからも女は毎晩夢遊病のごとく歩きまわり、今は精神科に通院している。
「精神病院は行ったほうがいいと思うけど、お祓いにも行ったほうがいいんじゃ……」
怖い話だとつぶやくと、高橋さんが満面の笑みで告げた。
「うん。だから今日くるんだ」

渡辺さん

え。

「ちょっとー！？　今日って今から行く神社に？　お祓いしに？　私ただ雑用とか掃除とかするつも、つもりでっ」

「面白いもの見れるっていったろ」

「バカー！　怖い話は好きだけど心霊スポット行ったり自分が怖い目にあったりするのは嫌いなんだってば。このまえはうちのお姉ちゃんを助けてもらうためだったから我慢してたんだよっ」

なにが楽しいのか彼は爆笑している。

「大丈夫。見るだけ見るだけ。ひなはなにも怖くないって。最近は俺のマンションから一人で行き帰りできるようになったし、幽霊にもなれてきただろ？」

「……マンションはちょくちょく行くから、なれたといえばなれたけど。エレベーターとかはともかく、まだ玄関がちょっと怖いかな」

「あ、うん。エレベーターのやついなくなったんだ。少し前に引っこしてきた5階の人についてる」

「やめてマンションの話は聞きたくない」

ただでさえ寒いのに。

「高橋さんって私を怖がらせて面白がってない？」

「うん。楽しい。怒らせるのも好き」

即答だ。

「……私は優しい人が好きだな」

いつもニコニコしていて、なにをいっても怒らないような感じが理想だ。

「ん？　俺優しいだろ？」

うわ、自分でいった。

「優しいけど、ちょっと意地悪」

「嫌い？」

このまえ伝えたはずだ。
はずかしいからあまり口にしたくないのに、予想外に真剣な顔で見つめられてドギマギした。
「すきだ、けど」
「俺も」
キスされそうになって、つい両手で彼の顔を押しもどした。
「前見てて。運転中でしょ」
「いま信号まちだし」
「見られたらどーすんの」
「だれもよその車内なんか見ないって」
「やだ」
高橋さんがようやく身を引いた。
「シャイだなー、ひなは」
シャイでけっこう。外でべたべたするのはどうかと思う。
ひそかに憤慨していたら、彼が話をもどした。
「心霊スポットとか除霊見学とかってさ、一人で行ってもつまんないんだ」
「斉藤さんと行けば？」
なんだか微妙そうな顔をする。
「三人ならともかく、あいつと二人で行っても全然面白くない。誘ってもたぶんこないし」
仲がいいのか悪いのか、よくわからない二人だ。
お互い一目置いているように見えるのだが。
「一緒におがみ屋みたいなことしてるくらいだし、仲いいんじゃないの？」
「いや、別に嫌いじゃないけど好きでもないというか。お互い利害の一致で手くんでるだけだから」
「……」
聞くんじゃなかったかもしれない。
男の友情に対するあこがれみたいなものに、ほんの少しヒビが入

った。

◆

再びおとずれた神社はやはり、すんだ空気に満ちていた。

朝もやも晴れてすがすがしい青空が広がっている。境内にはまだ参拝客はおらず、ホウキをもった巫女さんが二人いた。バイトだろうか、二人とも高校生くらいの歳だ。

奥へ入り、神主さんたちの住まいらしい部屋へ上がるとほぼ同時に白髪のおじいさんが入ってきた。以前、斉藤さんに人形をわたした人だ。今日は正装なのか、平安時代の貴族みたいな和服姿だ。小柄でお茶目な顔つきをしていて、あいかわらず親しみやすい雰囲気がある。彼は私と高橋さんを一目みるなり、笑いを我慢しているようなしかめっ面を浮かべた。

「おまえ、中学生は犯罪だぞ」

「合意の上だよ」

と高橋さんが笑う。

合意を得る前にセクハラを受けたり無理やりキスされた記憶があるんだけど。というかそこは本来「18歳になるまでは清いおつき合いをする」とかいうべき所じゃなかろうか。でもって、つき合ってるなんて一言もいってないのになんでバレてんの。

「渡辺修造（わたなべしゅうぞう）。俺の母方のじいさんで、ここの神主やってたんだけど今は息子にゆずって好き勝手やってる」

「人聞きの悪い。おまえよりはよっぽど人の役に立っとるわ！」

「引退したって、今日は榊さんがお祓いするんじゃないんですか？」

その格好を見るかぎり。

「神主をゆずっただけでまだ仕事はしてるよ。手こずりそうなお祓いのときとかはじいさんがやることが多い」

高橋さんが代わりに答えた。

「それって、今日くる客もヤバいってことなんじゃ……」

疑わしげに見つめると、にこにこと頭をなでられた。
「俺へのお礼だと思って、たえて」
その言い方はずるい。お礼に除霊見学いっしょに行ってって事なら、最初からそういってくれれば断らないし心構えもできたのに。
そのあと私は白と赤の巫女装束、高橋さんは白と緑っぽい男物のハカマに着がえてしばらく雑用をしていた。参拝場所のそばにある広間にはお酒や米、野菜など様々なお供え物がたくさん置かれている大きなひな壇のようなものがあり、以前家族できたときにそこで家内安全の祈祷をしてもらったことがある。だから今日のお祓いもそこでするのかと思っていたが、どうやら違うらしい。
移動したのは表から見えない奥の広間。
表のものより小さめの祭壇にお供え物が置かれ、そばに祓串（はらえぐし）という白いわさわさした紙がついた棒や榊などが用意されている。天井からは短いみすが下がっていた。そこに人数分のイスと酒、杯を用意していたら、背後でなにか軽い物が落ちた音がした。
なんだろう。
ふり返っても特に異常はない。作業を再開すると天井がきしみ、前方でまたなにかが落ちる音がした。けれどやっぱりなにも落ちていない。
「……」
急に背中がぞわぞわしてくる。
やがて、くだんの客がきた。
女は瀬川と名乗った。
茶髪のロングヘアでスタイルの良いセクシーな人……なのだが、すっぴんで眉も書いておらず、朝なのにひどくやつれた顔をしている。目の下に濃いクマが浮かんでいて、高橋さんみたいだと少し思ってしまった。最近あまり見なくなったけれど、彼もたまにこんなクマを浮かべている。
男は林。
背は少し低い方。大学生のわりに童顔で、女の子みたいな顔立ち

をしている。高橋さんも中性的で綺麗な顔だが……ダメだ。なにを見ても高橋さんと結びつけて考えてしまうくせがついてきている。おそろしい。それはともかく。林さんは話の通り気弱な性質らしく、おどおどと瀬川さんの後について入ってくると、こちらに向かってなんどもペコペコと頭を下げた。

私と高橋さんは隅にすわり、様子を見守る。

「先に済ませましょうか。お話は後で」

渡辺さんが手短に告げ、二人をお辞儀させて鈴がたくさんついた棒と祓串のようなものを振った。その後、二人がうながされるままお神酒に口をつけて着席する。渡辺さんが祭壇の前にすわり、長い長い祝詞を唱え始めた。

だいたい十秒に一度くらいの割合でパキン、パキンッと家鳴りのような音が天井のあたりで響きだす。屋根全体がきしむほどの大きな音だ。まさか天井が崩れたりしないよね、とこっそり頭上をあおいでいたら、横開きの扉がカタカタと震えているのに気づいてしまった。風も届かない室内の扉がどうしてゆれるのか。背筋がひどく気持ち悪くて、今すぐこの部屋から逃げ出したくてしかたがない。つい高橋さんをふり返ると「大丈夫、大丈夫」って感じの笑顔でそっと手をにぎられた。

うわあこの人むちゃくちゃ楽しそう。水を得た魚状態だ。

除霊見学できて嬉しそうな高橋さんがかわいくて、思わずきゅんとしていたら瀬川さんが泣きはじめた。最初は静かに涙を流していたが、だんだん赤ん坊のような大声にエスカレートしていく。大の大人が声をあげて泣くさまは心霊と関係なくても少し怖い。

突然、ガシャンッという物音とともに目の前が暗くなった。

隣にすわっていた高橋さんの顔が近くにあって、一瞬「人前でなにを」と思ってしまって反省する。近くの机に置かれていた予備の祓串二つが私の上に落ちてきて、それらが当たる前に受け止めてくれたようだ。

「ありがとう」

「うん」
まだ除霊は続いているので小声でいうと、高橋さんが軽く机を離して祓串を元にもどす。
瀬川さんは泣きじゃくり、わけのわからないことを叫んで林さんを殴りはじめた。イスにもすわっていられず、床に転げ落ちた林さんに瀬川さんが馬乗りになって拳をふり上げる。あまりの剣幕に近づけないでいると、高橋さんがすたすた瀬川さんの背後にまわり、彼女の両腕をつかむとくるっとひねって床に押さえこんでしまった。一瞬すぎてなにがどうなったのか見えなかったのでもう一度スローでやって欲しい。
冗談はともかく、林さんの顔やら鼻やらが痛々しいほど赤くはれてしまっていたので冷やすものをとりに廊下へでた。奥にいた年配の巫女さんにおしぼりとタオル、氷水が入ったコップをもらって早々に引き返す。
外の空はすっきり晴れていたのに、廊下は夜みたいに暗くてしんとしていた。
どうしてだろうと考えて、窓をすべて閉めきっているからだと気づく。除霊の声や物音が外へもれないようにするためだろうとは思うが、表の社務所と正反対だ。陽の光もささず、電気もついていない。暗い物置の底へ入っていくみたいだ。
「ひどい」
「えっ」
人の声がして、つい立ち止まる。
「ひどい、ひどい、ひどい」
どこかで女の人が泣いている。
どうかしたんですか？
辺りを見回しながら話しかけようとして、ためらった。ここは物がほとんどない廊下だ。部屋がある所はすでに過ぎ、閉じた窓くらいしかない。だれかが近くにいるなら前か後ろにすでに見えていないとおかしいのだ。

すると、この声は。
「ひどい、ひどい、ひどい」
頭の真後ろから声がして、泣きそうになりながら元いた部屋へ走った。おぞましいなにかが肩にのってついてきているような気がしてならなかった。背中がぞわぞわして気持ち悪い。
横開きの扉を開けると「お、もどってきた」とでもいいたげな高橋さんと目が合って一気に力がぬけた。はうようにして近づくと、背中をたたかれる。
「除霊中にでてっちゃダメじゃん」
高橋さんの言葉にこくこくとうなずく。
たわいもない霊なら霊能者が軽く肩や背中をたたくくらいで祓えるそうだが、これで落ちたんだろうか？　危ないのはこの部屋だけかと思っていたら外も怖かった。どうして神社の中にあんな怖いものがいるんだろう。瀬川さんが連れてきてしまったのか、それとも、元々神社にはああいうものが集まりやすいのか。
林さんに氷水やおしぼりなどをわたしてから辺りを見回すと、瀬川さんはすっかり大人しくなっていた。祝詞を唱え終わった渡辺さんが彼女の前にすわり、優しげになにか話しかけている。瀬川さんは赤い目をしてうなずいていたが、やがて眠ってしまった。

フラグ

彼女を別の部屋に運んで休ませたあと、渡辺さんが林さんに告げる。
「あんたら、別れたほうがいいかもしれんなあ」
「え……」
林さんがぽかんと口を開ける。
なんてこというのだ。
端で見ていてハラハラしたが、渡辺さんは続ける。
「あんたら、マイナスとマイナスで運気が下がる組み合わせなんだわ。お互い他の相手探したほうが楽だぞ」
「……」
林さんは困ったように眉尻を下げ、十秒ほどだまりこんでいたが、やがて。
「それは……ちょっと……」
ぼそぼそとつぶやいた。
渡辺さんが軽く頭をかきながら告げる。
「瀬川さんがおきたら瀬川さんにももう一度説明するけどな。あんた、林さん。優柔不断で嫌なことを断れない所があると思う」
「うん、まあ」
「それで嫌いな人間との縁が切れなくて嫌々つき合ったり、ストーカーにつきまとわれたりしてるだろ」
「……わかりますか」
林さんが息を飲んだ。
「わかるわ、それくらい。そんであの姉ちゃんは姉ちゃんで他人の悪口ばっか吐くわ周囲に八つ当たりするわで敵が多いだろ？　二人そろって生活習慣も悪くてろくなもん食ってない。そういう人間には悪いもんがよってきやすい」
「悪いもの？」

「生霊とか、浮遊霊とかだな。嫌なことばかり考えたり、不摂生して体調こわすとそれにつけこんで浮遊霊がよってくる。他人に恨み買えば生霊がとんでくるし、逆に自分もだれかを恨めば生霊とばしてる。心と体が健康ならんなもんどーってことねえんだけどな。あんたらどっちも悪いからモロに影響受けたんだ」
「お、俺にも霊が憑いてたっていうんですか？」
「二人とも憑いてたよ。瀬川さんの方が霊に影響されやすい体質だから目立ってただけだ。一応はらっといたけど、生霊も浮遊霊もあんたら二人が変わらんとまた憑くぞ。寝言とケンカしたってのはただのきっかけだ。特にあんた、ピアスじゃらじゃらの姉ちゃんに気持ちわりい好かれ方してっから早いとこどうにかしたほうがいい。瀬川さんも他人に攻撃的なのをどうにかせにゃ、相当うらみ買ってんぞ」
林さんはぞっとしたように肩を震わせた。
おびえたような瞳を渡辺さんに向けたように見えたのは、気のせいではないだろう。いったいどこまでお見通しなのか。この人の前に立つのが怖くなってくるほどだ。
「清く正しく生きろってこった。健康にいい生活して人に優しく、自分の意思をしっかりもつ。それさえやってりゃ霊なんかなんでもねえよ。霊とか関係なく人生も楽しくなるしな……ま、俺もんなことできねえけどよ」
今なんか最後にボソッと聞こえたんですけど。
「このジジイがまず大酒飲みで糖尿病だしな」
と小声で高橋さん。
いい話が台無しなので、聞こえなかったことにしておいた。

◆

あれから目を覚ました瀬川さんへの説明や室内のかたづけ、雑用などを終え、夕方くらいに私たちは神社を後にした。

帰り道の店で晩御飯をすませ、お祓いを見た感想とか、榊さんは不思議な話をいっぱい知っているから次はヒマな時に行って話を聞こう、などと話しながら駐車場まで歩いていたら。
「おっ、和也(かずや)じゃん！　なにしてんの？」
ふわふわパーマの少女が高橋さんの前に駆けてきた。
モデルみたいにすらっとした綺麗な子で、オレンジ色のコートがよく似合う。
「先生」
連れらしい、ショートヘアーの少女も同じようにほほを染めて彼を見上げる。こちらは黒だが、よく見ると色違いでおそろいのコートを着ているようだ。小動物系というか、チワワのような愛らしさがある。
二人とも私と同い歳くらいで、彼と親しそう。しかも片方は名前よび。
そう考えると同時に、なぜか体がぎくりとこわばった。
「そっちこそなにしてんのー。こんなとこで」
高橋さんがちゃかす。
「二人で買い物いって映画みてごはん」
オレンジコートがへへへと笑う。
「ちゃんと宿題やってんのか？　おまえ成績ギリギリだってもう少し自覚しろよ」
「……」
謎のショックと人見知りが相まって、会話に入れないままぽつんと立ちつくしてしまった。やがて、彼とひとしきり世間話を終えて少女たちがさっていく。
「ごめん。あいつらもカテキョの生徒なんだけど、やかましくてさー……びっくりした？」
ぽんと頭に手をのせられ、じわじわ緊張がとけてくる。
「少し」
「疲れた？　顔色悪い」

彼はしょっちゅう私を見ている。以前、明里にそう聞いた時は信じていなかったが、親友でさえ見逃すようなごくわずかな表情の変化や、うっかりもらした小さな小さな独り言にまで敏感に気づくし、彼を見るとほぼいつも視線が合い、甘くて熱っぽい瞳か、ちょっと引いてしまうくらいマジな目をむけてくる。

今もへこんでいるのに気づいてくれた。

本当に見てくれてるんだなあとちょっと安心した。

「大丈夫。念のため聞くけど、他の生徒にはセクハラしてないよね？」

最近わかってきたが、彼の好みは活発タイプより大人しい子だ。すなわちオレンジコートより黒コート少女の方に私は危機感を抱いていた。

「え？　ヤキモチ？」

高橋さんはあらゆる女性を悩殺できそうな極上の笑みを浮かべ、

「それとも、俺を中学生以下の女ならなんでもいい変態だと思ってる？」

一瞬で真顔になった。

こわっ！

軽く聞いてみただけなのに、二重の意味で心臓に悪い。

「ち、違うよ……かわいかったし、性格よさそうだったし、中学生だし。自分が男ならあっちにほれるなって思っ」

「ひなは顔と性格がよくて大学生の男がいたら間違いなくほれるわけ？」

歳はともかく、顔と性格がよければフリーの女性ならだいたい好きになるんじゃないかな。

と思ったがさらに怒られそうなので頭を下げた。

「ほれません」

「そういうこと」

高橋さんが満足気にうなずき、ふと意地悪く笑んだ。

「あ、でもあんまり欲求不満が続くと魔がさすってことはあるかも

なー」
「え？　それくらいで浮気するなら深い仲になる前に今すぐ別れて他の安心できる人を」
いきなり腕をつかまれて息が止まった。
「嫌だ」
恨みでもあるのかと錯覚しそうなほど激しい瞳がこちらを射る。背筋にぞくりと震えが走った。
「他の男になんかやらない」
怒りをふくんだ低い声。
たまに聞くこの声は苦手だ。怖いのになんか色っぽくてドキドキして逆らえなくなる。
腕を引かれるまま、車の後部座席に連れこまれて冷や汗がでる。
「う、ウソだから！　高橋さんが変な冗談いうから私も冗談いっただけだって！」
「いや、今の本気だったろ」
至近距離でにらまれて息をのむ。
これがヤンデレフラグというやつか。
返答しだいではこの場で押し倒されそうな気がして、慎重に答えた。
「半分くらい……高橋さんが浮気しなければいいだけの事でしょ」
「浮気しなかったら、別れるとかいわない？」
「いわない、いわない」
ぶんぶん首をふると、彼はため息をつきながら私を抱きしめた。
よし、フラグ回避。
夜の車内で目立たないとはいえ、人目が気になる。でも今のところ周囲に人影はないし、ここで抵抗したらものすごーく怒りそうなのでなだめるつもりでそっと彼の背に手を回し、抱きしめ返すとぎゅうっと力をこめられた。
「いっとくけど、中学生にドキドキしたのなんてひなが初めてだから」

「高橋さんでもドキドキしたりするの？」
「さわってみ」
軽く手をつかまれたかと思うと、下から彼の服の中にずぼっとつっこまれ、暖かい素肌にふれる。
反射的に声を上げそうになったけれど、楽しげにこちらを観察している人の前で動揺するのはくやしくて、平気なふりをした。
けれど、思った以上にバクバク鳴っている心臓に目を見開く。
「えっ？」
見上げた彼の顔はいつも通り余裕たっぷりだから、間違えて自分の心音を聞いてしまったのかと思った。
「ひなと居るといつもこんなだよ。びっくりした？」
「……した」
嬉しさと同時にはずかしさがこみ上げてきて、私はそそくさと身体をはなして助手席へ移った。
もうこの話題はいいから早く帰ろうという意思表示だ。
高橋さんが笑って運転席へうつり、車を動かす。ほっとしたのもつかの間。彼が甘い声でいった。
「はじめて会ったときからかわいいと思ってたんだ」
まだ続ける気か。
「目でかくてまつ毛ながいし、鼻ちっちゃいのがネコみたいで。肌も髪もきれいだし声がすげーかわいい。録音したい。身体ほそいのにエロいケツしてるし。あと雰囲気たまらん。神秘的っていうか、立ってるだけでもすげー気になるしたまに妙にエロい時が」
「そ、それじゃ体目当てみたい」
急にほめ殺されて、嬉しいやらはずかしいやらでついぶっきらぼうに話をさえぎってしまった。
普段まったくほめられなれてないから、どうしていいかわからない。
間違いなく今顔がまっ赤なので、窓の外をむいて顔をかくす。
「大丈夫、一番愛してるのは中身だから」

「あっ、愛……！？」
いったことも、いわれたこともない。
映画やドラマでしか聞いたことなかったセリフを直に耳にすると
は夢にも思わなかった。世の恋人たちは本当にこんなセリフをささ
やき合ったりするのだろうか。
「うん、愛してる」
そんな声でそんなこといわないで。
頭がぐるぐる混乱してしまって、言葉がでてこない。口をぱくぱ
くしていたら、憎まれ口がでてきてしまった。
「で、でも高橋さんならもっとかわいい女の子よりどりみどりでし
ょ？」
おそるおそる窓ガラスごしに運転席をみると、端正な顔でにっこ
りほほえむ彼と目が合った。
……あれ、今きづいたけど、外がまっ暗なせいで窓ガラスがもう
鏡と変わらないほど映りがいい。
赤面してもだえていた様子がぜんぶ窓ガラスに映って丸見えだっ
たと気づいて、私はうつむいて両手で顔をおおった。ああもう調子
狂う。
「ひながいい。そもそも、俺そんなモテないし」
小さく笑い声が響く。
「ウソだ」
ちょっと意地悪だけど、こんな格好良くて優しいのにモテないは
ずがない。
「マジだって。顔でよってくる子はそれなりにいるけど、ちょっと
話したらこなくなるよ。理屈っぽいし話長いーって。よくしゃべる
男って女受け悪いから」
「え……？　そうなの？」
つい顔を上げる。
そういえば、明里と沙也も寡黙な人が好きだといっていた。
「私は自分があまりしゃべらないから、しゃべってくれる人の方が

いいけどな」
でないと間がもたない。
「うん、俺たち相性いーと思う」
「あ、でも、今日あった子たち高橋さんのこと好きだと思うけど」
二人ともハートが浮かびそうな目をずっと彼にむけていて、ほとんどこちらを見なかった。思い出すと少し胸がむずむずする。
「あー……俺わりと年下受けするから」
「やっぱりモテるんじゃん」
その反応は好かれ慣れてるって感じだし。
「でも浮気はしないよ。今まで女より男友達と遊んでる方が楽しかったクチだし、ひな以外興味ない」
さらりといって、高橋さんが車を止めた。
ついたのかと外に目をむけて、内心首をかしげる。
いつも家の近くまで送ってくれるのに、ここは彼のマンションの駐車場だ。長く運転して疲れたから、早く帰りたかったんだろうか。しかたない、ちょっと面倒くさいけどここから電車で帰ろう。
荷物を手にとると、座席にもたれて高橋さんがいった。
「今日泊まってかない？」
私はきっかり1分絶句した。
額に手を当て、血が上った頭にクールダウンを試みる。
「やけに口説いてくると思ったら……」
ため息が止まらない。
我が家は一見過保護にみえてかなり放任主義なので、「今日は友だちの家に泊まる」と電話すれば二つ返事でＯＫがもらえる。以前とまりにきたときそういう話題になったので、高橋さんもそれを知っている。
でも。
以前みたいにただ泊まって買い物いってＤＶＤ観て、じゃすまない気配がぷんぷんする。
つい先日途中までしておいてなにを今さらというのはわかってい

る。わかってるけど、途中まででも刺激が強すぎたんだからしかたない。キスだけでも気持ち良すぎて変になりそうなのに。
「……」
あと3年くらいまってくれないかな。
ちらりと彼をみると、とろけそうな瞳をして彼がうながす。
「ひな」
ううう。
「か」
「ひな」
「今日は、かえ」
「ひなた」
帰るっつってんじゃん！
キレる寸前、するりと手のひらを重ねられた。
くっつきそうなほど近くに顔を寄せて、高橋さんがささやいた。
「泊まっていきなよ」
笑ってるんだけど笑ってない。
獲物を狙う目とでもいうのか、嗜虐的な喜びを秘めたそれがひどく艶めかしくて、心臓がひときわ高くはねる。
ダメだ、負けた。
そんな顔で、そんな声でささやかれて断れる女の子がいたら弟子入りしたい。
「……うん」
その夜は、彼の腕の中で眠った。

さっちゃん

私が幼稚園児だったころ。
近所のお姉ちゃんによく遊んでもらっていた。歳は４つ上で、あだ名はさっちゃん。明るくて面白い子で、いつも補助輪のついた自転車にのっていた。それをホウキ代わりにして、よく魔女っ子ごっこしたものだ。
夏の夕方、気温で熱された水道水で手を洗っていたら「温かい水道水で手を洗うと呪われるんだよ！　あーあー呪われたー！」と脅されて大泣きした苦い思い出もあるけれど、なんだかんだで一番かまってくれる彼女に私は懐いていた。
そのころから人見知りで友達が少なかったし、姉は自分の友達と遊ぶのに夢中でまったく遊んでくれなかったから。
そんなある日、さっちゃんが花を見せてくれた。
彼女の家はアパートの一室で、玄関の脇に丸い植木鉢を置いている。そこには色とりどりの小さなパンジーが植えられているのだが、それはとても大事な花なのだという。
「これはお母さんのパンジーだから」
さっちゃんのお父さんとお母さんは離婚して、お母さんが出て行ってしまった。
けれどお母さんはこのパンジーをとても大事にしていたから、いつかきっと取りにもどってくる。その日まで毎日、大事に大事に世話をしている。そうしてお母さんがこれを取りに来たら自分も一緒に連れていってと頼むのだと、彼女はいった。
「内緒だよ？　ひなたちゃんだから話したんだからね」
「うん」
さっちゃんがいなくなってしまうのは寂しいけれど、彼女があまり熱心に語るので、応援しようとひそかに決めた。
それから、だいたい二週間くらい経ったころ。

二泊三日の家族旅行から帰ってきて、お土産を手に彼女の家をたずねた。もう夕方だったけれど話くらいならできるし、久しぶりに会えると思って浮き足だっていたけれど、異変に気づいて息が止まった。

さっちゃんの大事なパンジーがぐしゃぐしゃに荒らされ、植木鉢から土がこぼれている。

それは何度も力強く踏みつぶされたようにぺしゃんこで、大きな靴の足型がいくつも残っていた。

ひどい。彼女があんなに大事にしていたのに。だれがやったのか知らないが、今ごろ癇癪をおこして泣いているんじゃないだろうか。

なぐさめてあげようと思いながらインターホンを鳴らすと、彼女のお父さんが出てきた。

「ああ、ひなたちゃん」

だまっているとキツそうな顔つきだけれど、目が合うといつもにっこりほほえんでくれる。よく美味しいおやつを作ってくれるので、彼のこともわりと好きだった。

「幸子は今風邪で寝こんでて会えないんだ」

「え……そうなんですか。じゃあこれお土産です。さっちゃんにあげてください」

「ありがとう。また遊びにきてね」

ぎい、と軽くきしんでドアが閉じる。

あの花のことを彼に教えればよかったと気づいたのは、自分の家についてしまってからだった。

でも自分の玄関のことだし、きっともう気づいているだろう。

二日後。

再びさっちゃんの家をたずねると、花は植木鉢ごと消えてしまっていた。

「ここにあった花」

どうしたの、と問うまでもなく彼女のお父さんが答える。

「ああ、捨てたよ。枯れてたから」

やっぱりそうなのか。
花が枯れたから捨てる、なんてごく当たり前だがなんだか切ない。
「さっちゃんは」
「幸子はまだ風邪なんだ。ごめんね」
まだ会えないのかと肩を落とすと、彼は申し訳なさそうな顔をしたままたずねた。
「ひなたちゃんは……」
なんだろう。
「いや、なんでもない。また見舞いにきてやってね。幸子も喜ぶよ」
けれど彼女の風邪はなかなか治らず、それから何度たずねてもさっちゃんのお父さんしか出てきてくれなかった。手紙を書いても返事はなく、いつしか自然と足が遠のいて月日が流れた。
中学三年生になり、受験まであと数ヶ月というころ。
なんだか懐かしい気分になって、学校帰りにさっちゃんのアパートの前まで歩いた。あわよくば彼女に会えたらいいなと思っていたけれど、そこは空室になっていた。他の部屋は電気で明るく照らされているのにその部屋だけは暗いままで、表札も空になっている。
どこかへ引っ越したんだろう。もう何年も会っていなかったのだから、そういうこともある。
わかっていても少しさびしくて、家に帰って母に愚痴った。
「いつのまに引っ越したのかな。お別れくらいいいたかったのに」
「え……あんた、あそこの家の子と遊んでたの？」
テーブルで茶をのんでいた母が目を開き、盛大に顔を引きつらせる。
そういえば、さっちゃんとはいつも二人で遊んでいたから、私達が友達だと知っていたのは彼女と彼女のお父さんだけだった。
「昔ね。幼稚園児くらいのころによく家に遊びに行ってたんだよ。ほら、よくドーナッツ作ってくれるおじさんがいるって話し」
「ギャー！？　なにそれ聞いてないっ！」
母がいうには、さっちゃんは十年前、私が幼稚園児のころに殺さ

れていたらしい。
犯人は父親で、娘が離婚して出ていった妻のことばかり気にするのが面白くなく、カッとなって殴り殺してしまった。そうして、他の住人が異臭を訴えるまでの3週間ほど、死体と一緒に暮らしていたそうだ。
何度かお見舞いに行ったあの時、扉の向こうには彼女の死体があったのだろうか。

◆

友達と食べるお昼ごはんは美味しい。
しかし、毎日顔を合わせているとどうしても話題がつきてくる。
中学校の昼休み中。
教室で友達とお弁当を食べていたら沈黙が流れてしまい、どうしようかと思っていたら明里が怪談を聞かせてくれた。
「昔からよく金縛りにあうんだけどね、今までで一番怖かったのは」
「金縛りってのは体が眠ってて脳だけおきてるときにおこる生理現象だよ」
すかさず沙也がつっこむ。
それは私も聞いたことがあるが、実際に不可思議な現象を何度か目にしてしまっているので、どちらかというと霊現象派だ。
「沙也も霊がいる所に行くと頭が痛くなったりするじゃん」
指摘すると、彼女は軽く身をのりだした。
「それはそれ、これはこれ。霊を信じるかどうかは別として、金縛りはただの疲労でしょっていってんの」
「えー、違うよ！　疲れてるときの金縛りと違って、霊がきてるときは窓しめてても必ず風が吹くの」
風はたいてい冷たくて、冷蔵庫を開けたときみたいな感じらしい。
霊感少女の明里によると、金縛りには二種類あるそうだ。
その夜も閉め切っているのに風が吹いてきて、ぞーっと鳥肌が立

つと同時に霊の方だと直感した。
来るな来るなと必死に念じていたら両足をつかまれ、布団から引きずりだされた。体が床にぶつかって痛いのに動けない。悲鳴をあげたくても声はでないし動けない。唯一動かせる目をむけると、老婆のようなしわくちゃの手首が足をつかんでいる。
そのままズーッと引きずられ、やがて壁にぶつかる。さすがにこれ以上は引っぱれないだろうとほっとした瞬間、スルッと自分が体の中から引っぱり出されてしまった感覚に襲われた。ふり返っていないのに、真後ろに自分の体があるのを感じた。
「幽体離脱ってやつ？」
おそるおそる問うと、明里はこくこくうなずいた。
「ヤバイ！　と思った瞬間に体にもどってたの」
ぜったい体験したくない話だ。
「あ、あとねー。去年の今ごろ、お嫁さんの幽霊が出たよ」
「あんたの願望じゃなくて？」
と沙也。
裏表がないのはいいが、たまにひどい。
「ちーがーうー。明里はドレスがいいの」
幽霊は白無垢姿だったそうだ。
夕食後、家族でテレビを観ていたら部屋の隅にそれが立っているのに気づき、必死に視線をそらした。霊感があるのは明里だけなので、そばにいた家族は気づかずに平気な顔をしている。けれど、気づいていることがバレたら殺されると思った。それくらいの威圧感と殺気がただよっている。怖くて怖くてうつむき気味にしていたら、それは何度かそばを通りすぎ、いつの間にか消えていた。
「なんで花嫁がいきなり家にわくの？」
解せぬ、と沙也が眉をひそめる。
「さあ。いつもいきなりっていうか、前ぶれあったことがないし」
つくづくおそろしい体質だ。
「最近は大丈夫なの？」

問うと、彼女はなぜか苦笑した。
「ポチが追い払ってくれてるみたい」
犬の霊に名前をつけたらしい。
「ああ、あの死体の毛」
「その言い方やめて」
沙也のつぶやきに、つい二人で声をそろえてしまった。
「幽霊以外のものまで追い払っちゃうのが玉にキズなんだけどね」
あらぬ方を見る明里の視線を追うと、こちらをにらむ犬の目玉が二つ、窓ガラスに映っていた。

◆

雪がふりそうなくらい肌寒いある日。
冬休みに入り、私は高橋さんと二人で繁華街をうろついていた。年末だけあって道はほぼ人で埋めつくされ、周囲の店は客をのがすまいと必死にセールの呼びこみをしている。
「ひなの方からどっか出かけたいなんて珍しいな」
高橋さんが嬉しそうに笑う。
「なんとなく」
マンションにいたら身がもたない、とはとてもいえない。
「つーか、さっきからすげー歩きにくそうだけど大丈夫？　寒いしどっか入ろう」
「うん、ありがとう」
助かった。元々人混みは苦手だが、今日は輪をかけて人が多く、歩きにくくて困っていたのだ。もう少し空いてそうな場所を選べばよかった。手を引かれるまま近くの喫茶店に入って、目を見開く。
「あ、斉藤さん」
女性客が多い、落ちついた雰囲気の店内。
奥のソファー席に、面倒くさそ～な顔をした斉藤さんと大学生くらいの女の人がすわっていた。彼はほぼ常に仏頂面だが、仏頂面に

も喜怒哀楽その他のバリエーションがあるのだ。
女性はキリッとした感じの美女で、あらわになっている白い胸元や太ももがとてもセクシーだ。腰に届きそうな黒髪がすごく似合っているのがうらやましい。私も黒髪だけれど、あんまりのばすと重たくて暗い印象になってしまうので、あそこまでのばしたことはない。
「デートかな？」
似合いの二人だ。
「だろうな。あいつ枯れてると思ってたけど」
離れた席で楽しく観察していたら、声が聞こえてしまったらしい。
軽くイスにもたれていた斉藤さんと目が合ったかと思うと、彼はテーブルにお金をおいてこちらにやってきた。
「わ、こっちくる。怒ったのかな」
「ほっとけほっとけ。それより注文決めた？」
それよりって。
「ちょうどよかった」
そうこうしている内に斉藤さんが私の隣のイスに手をかけ、
「そこは許さん」
高橋さんが真顔で告げた。
斉藤さんが別の席にすわり直し、一緒にいたお姉さんがこちらのテーブルまで追ってくる。ロングブーツの足がすぐそばで止まるが、斉藤さんは見返すだけでなにもいわない。高橋さんも涼しい顔をしてだまっているので、ここは私が声をかけるべきかと激しく悩んだ。
よかったらここどうぞ、か。用事があるフリで高橋さんと外へ出るべきか。
「あの」
ためらいながら口を開くと、ほぼ同時に彼女が宣言した。
「諦めないから」
化粧は上手いし、お洒落で恋愛なれしていそうなのに、ほおがうっすら赤くそまっているのがかわいらしい。つい見とれてしまって

いる間に、彼女はさっそうと店を出て行ってしまった。
わあ、修羅場だ。どうみても恋愛がらみの修羅場だ。
「彼女？」
わくわくしながら斉藤さんの様子をうかがうが、彼は一つため息をついただけだった。
「知り合い」

くねくね

目立ってしまったのでお茶だけ飲んで店を出ると、高橋さんのケータイに電話がかかってきた。
友達からか、はたまた心霊絡みの相談かはわからないが彼にはしょっちゅう電話がかかってくる。「気にしないで出ていいよ」と伝えているのだが、私といる時は極力でないようにしてくれているらしく、たまに堂々と無視したり電源そのものを切ってしまったりしている。けれど、重要な用件の電話がかかってきそうな時はそうもいかないようで、今日のように一言告げて席を外す。
いつもなんの電話なのか聞いてみたい気もするが、ヤブヘビの予感がするのでその話題には触れずにいる。
ショッピングモールの中。
ここでまっててといわれた、人気が少ないロビーの一角でソファにすわっていたら、斉藤さんに紅茶のペットボトルを差しだされた。
「あ、ありがとう」
そばの自販機で買ってきてくれたらしい。暖房はついているのに少し寒くて、手足が冷えていたので助かった。ペットボトルの温かさを堪能してから財布を出そうとすると「いらん」と先にいわれた。めざとい。さり気なく私が喫茶店で頼んだのと同じミルクティーなあたりもめざとい。
しかし、無口二人だとやっぱり会話が続かない。
電話長いよ高橋さんと思いつつ話題を探していると、斉藤さんからタバコの匂いがした。
「斉藤さんってタバコ吸うの？」
隣で黙々と缶コーヒーを飲んでいた彼がこちらに顔をむける。
「吸わない」
「へー、喫茶店で移ったのかな」
高橋さんも吸わないし、一緒にいたあのお姉さんだろうか。

……というか早くも会話が終わってしまった。だめだ、なんとか会話を広げなければ。
「斉藤さんっていかにも吸ってそうだから、ちょっと意外かも」
いってしまってから冷や汗がでた。
ちょっとまて、この発言は失礼じゃないか？　いくら彼が悪人面で茶髪ピアスでヒゲ生やしてて背高くて筋肉質気味だからって。いやほんといかにも吸ってそうだけど。
「ごめんなさい」
フォローしたいがフォローするための言葉が出てこなくて罪悪感にさいなまれていたら、頭をぽんとたたかれた。
なんだろう。
謎の行動につい見つめ返すと、何事もなかったかのように彼は口を開いた。
「前は吸ってたんだけどな。茉莉（まつり）の体に悪いからやめた」
「茉莉さんって？」
「彼女。生まれつき病弱で、特に気管支が弱かった。二年前に死んだ」
なんかまた激しく地雷を踏んでしまった気がする。
「ええと……亡くなったのって、妹さんじゃなかったっけ」
「ああ、妹は中学生の時に死んだ。ちなみに母親も妹を産んですぐ死んでる」
まるで他人事みたいな口調だけど、こういう時って謝っていいのかな。
リアクションに困っていたらまた頭をなでられた。
うつむくな、ってことだろうか。
「うちはそういう家系らしい」
昔、先祖が自分の娘を人柱にしたそうだ。
当時水害がひどく、川の氾濫を防ぐために人柱が必要だという話になった。人柱には若い娘がいいのだが、運の悪いことに斎藤さんの家に若い娘がいた。それで白羽の矢が立ってしまい、泣く泣く先

祖は娘の手足をしばって生きたまま川へ沈めた。
　それからというもの、彼の家系は代々男しか生き残れなくなった。嫁をとっても急な病死や事故等で亡くなることが多く、娘が生まれた場合は成人まで生きられない。これは祟りだということで慰霊碑を建てたが、祟りは今もおさまらず。
　彼の親戚で生き残っている女はたった一人しかいない。
「だから結婚する気ねーし、うちは俺の代で終わるだろうな」
「結婚しなくても彼女作ってイチャイチャしたらいいんじゃないかな。あの、ほら、さっきの人と新しい恋とかええとその」
　生まれつき病弱だったというなら、茉莉さんが亡くなったのは斉藤さんのせいじゃないかもしれないし。
　断言できないからそこまで口には出せないが、必死にはげまそうとしていたら斉藤さんがかすかに笑った。いつも通り眉間にしわがよったままなのに、細長い目がさらに細くなり、めずらしくつり上がった口元が妙に色っぽい。
「マセガキ」
　自分の失言に気づいてさっと顔が熱くなる。
　ああなんかまた変なことといってしまった。もう高橋さん帰ってくるまでだまってる。ていうか私がマセてしまったのはお姉ちゃんと高橋さんのせいなので文句は彼らにいって欲しい。
　はずかしくてそっぽを向いていたら、高橋さんがもどってきた。
「ひなで遊ぶなよ」
「おまえが置いてったんだろ」
　斉藤さんは悪びれない。
　もしかして、間がもたなくて気まずそうにしていたから気をつかってあんな話をしてくれたんだろうか。
「私は気にしてないよ」
　めずらしく反論しない高橋さんに声をかけると、頭をなでられる。
「ごめんね、置いてって。邪魔者がいなくなったらイチャイチャしような」

なんてこというのだ。
「邪魔じゃないからね」
斉藤さんをふり返ると、彼はすでに少し遠ざかっていた。
「じゃあな」
まさか邪魔者あつかいを本気にしたわけではないだろうが、このタイミングで帰らなくてもいいのに。
「……またねー」
しぶしぶ見送ると、高橋さんが隣に腰かけた。
「ところで、なんで目合わせてくれないの？」
ちっ、バレた。
一年前は人の目を見て話すのがすごく苦手だったけれど、目を合わせるといつも高橋さんがにっこり微笑んでくれるから、それがすごく嬉しくて安心して、ちょっとずつ目を見る回数が増えていった。最近では他の人ともわりと自然に目を見て話せている……と思う。
けれどあの夜以来、彼の目を見れていない。実をいうと顔の辺りをぼんやりながめて見たふりをしている。
「合わせてるよ」
「えー？　ちゃんとここ見てる？」
彼が自分の目を指さす。
つられておずおずと視線を上げると目が合って、火傷したように目を伏せてしまった。
「ごめんちょっと……は、はずかしい」
目が合うと、その……最中を思い出してしまうのだ。優しくふれてくる大きな手や、熱い体がのしかかってくる重み。荒い吐息と汗の匂い。ぞくぞくするほど蠱惑的な声と瞳。あれから2，3日くらい経っているのに全身に感触がよみがえってきて、困る。本当は手をつなぐのもしばらく遠慮したかったが、断るヒマもなくつながれて内心ドキドキしていた。
「ああ、そういうこと。ラブホ行く？」
「ぜったい嫌」

見透かしたように笑いながら小声でささやかれて、即答した。
「本当に？　誘ってるとしか思えない顔してるけど。うずくんじゃないの？」
「う……！？」
女性みたいに綺麗な顔なのに、どうしてそんなエロ親父発言ができるのか。
「行ったら捕まるよ高橋さん」
ていうか公共の場なのに顔が近い。だれかきたらどうするのだ。
「じゃあ普通のホテルか俺の家で」
「大人しく映画でも見ようよ」
つい距離をとりながら辺りを見回して、だれもいなかったことに違和感を覚える。
たまにだれかが通りすがっていく中、一人だけずっと立っている人がいた気がするのだが。会話が聞こえそうなほど近くではないが、常に視界の端に映るくらいの距離で、さっきまでそこにいたと思ったのに。
「えー。俺今すごくしたいんだけど」
「円周率でも暗唱したらいいんじゃないかな。というか、人前でそういうことといわないで」
いいながら高橋さんの方を見たらやっぱり視界の端に人が立っていて、とっさにふり返った。
けれど、そこにはだれもいない。
目にゴミでも入っていて、それを人だと勘違いしたんだろうか。視界の端だからぼやけてよくわからなかったけど、視線を感じた気がしたのに。キツネに化かされたような気もちでながめていたら、
「もしかして、見えてる？」
高橋さんが笑う声がした。
「見えてるって、まさか」
「あ、やっぱ見えてはいないんだ」
ひょいと肩を抱かれ、そのまま耳元でささやかれる。

「あっちじゃなくて、こっち見てみ。たぶん見えやすい」
示された先は大きな窓ガラス。
室内の風景を反射して鏡のようになっているそこに、明らかな異物が存在した。目に入った瞬間、反射的に肩がはねて後ずさる。
「なにあれ」
機械が置いてあるのかと思った。
それはたえずウネウネくねくねと動き続けている。ちゃんと服を着た人間なのに全体的に黒っぽくて、顔がよく見えない。顔を見ようとすると焦点がずれるというか、ずっと顔をぶんぶん振り回しているから観察するヒマがないのだ。まるで踊るように両手両足をくねくね動かし続け、かっくんかっくんと背骨も曲げている。とても正気とは思えない異様な角度だ。関節がないんじゃなかろうか。髪は短いが男か女かもよくわからない。
窓ガラスから目をはなして室内をふり返っても、そこにはなにもいない。
ただ、視界の端になにかがチラつく。
「あの……アレって、田んぼとかによく出るっていう”くねくね”？」
都市伝説の一つで、田んぼなどに出没するらしい。人間に似ているがくねくねと奇妙な動きを続けていて、あまり見続けたり近くでハッキリ見てしまうと気が狂うという。
ここは繁華街のど真ん中だが、特徴がよく似ている。
思い出してから怖くなってきた。そちらを見ないようにして立ち上がり、高橋さんのそでを引く。
早くここを出よう。
「さあ、俺そっちのは見たことないから。潰れそうな店とかでたまに見るけど、今のところなんかされたことはないよ。ちなみに、すごい時は5，6人で踊ってたりする」
そういえば、ここの店舗はしょっちゅう店が入れ替わる。
潰れてまた新しい店が入って潰れて、の繰り返しで二年もったこ

とがない。客はたくさん入っているのに。
「アレのせいで潰れるのかな？」
「んー、理由の一つではあるだろうけど。逆に潰れそうな店が居心地よくてわくのかも……あと、ここの土地が気に入ってるみたいだな。大火事で死人がたくさん出たり、元処刑場だったりしたとこだし」
高橋さんがアレのいた辺りに近寄ろうとしたので、とっさに腕にしがみつく。なにを考えているのだ。
「わかったから、もう行こう」
高橋さんが苦笑する。
「いいけど、アレ以外にもその辺にあちこちいるってわかってる？」
「……私を心霊スポットに連れて行かないでって、何度いえばわかってもらえるの」
「極論をいえば地球はすべて心霊スポット。あ、ごめん。ごめんって」
人気の多い辺りへすたすた立ちさると、あわてて彼が追ってきた。
私は競歩気味だったのにあっさり徒歩で追いつかれるとちょっとくやしい。
ちなみに、今回は最初から心霊スポットに連れて行くつもりだったわけではなく、人混みで私が辛そうだったから空いている場所を、という気遣いだったそうだ。幽霊がいて不気味な雰囲気がただようせいか、心霊スポットはたいてい人気がない。そういうことなら、とお礼をいいそうになったが。
「心霊スポットじゃなくても空いてる場所ってあるよね？」
けっきょく高橋さんの趣味じゃないかとじとりとにらむと、なぜかすごく嬉しそうに微笑まれた。
「やっとこっち見た」
うあ。

登場人物（22話までのネタバレ有り）

●保月ひなた（ほづきひなた／１４歳）
内気で人見知りな女子中学生。成績が悪いのでカテキョをつけられた。
怖がりの聞きたがりで、怪談は好きだが自分が怖い目にあうのは嫌なタイプ。
黒髪で色白。高橋の好みど真ん中。

●高橋和也（たかはしかずや／２０歳）
ひなたの担当になった家庭教師。生まれつき霊感が強く、オカルトが大好きな大学生。
黒髪で真面目そうに見える美形だが、己の欲望に忠実な性格。
不眠症を長年わずらっていて、薬がないと眠れない事が多い。
服装は普通っぽくみえてさり気なくお洒落。

●斎藤（さいとう／２２歳）
高橋の霊能者仲間。いわくつきの物や人形の浄霊が得意で、それらに好かれやすい。
茶髪ピアスひげ三白眼でそこそこガタイがよく、見た目はヤクザ。
無口で無愛想だがひなたに甘い。
ラフな格好が多いが、なぜかなに着てても格好良く見える。

●明里（あかり／１４歳）
ひなたの友人。霊媒体質でしょっちゅう霊体験しているが、
ひなたと沙也以外には霊感があるのを秘密にしている。
彼女のそばにいると、霊が見えない人も一時的に見えるようになる事がある。
ピンクや赤で露出多めの服をよく着ていて、それがよく似合う。

アイドル系美少女。

●沙也（さや／１４歳）
ひなたの友人。霊の近くだと体調が悪くなる性質の毒舌系ボーイッシュ少女。
正義感が強く、友達思い。格好も男っぽいが、たまにショートパンツとか履くと一気に女の子らしくなる。

※年齢は１話時点でのもの。斎藤は初登場時。

帰郷

新年をむかえて、お正月気分が残るころ。
私はいつものように自分の部屋で家庭教師の授業を受けていた。
隣にすわる黒髪の美青年は飽きもせずにこちらをながめている。最初の内は視線が気になって問題に集中できず、「あんまり見ないで」と文句をいったりもしたのだがなぜか喜ばれ、小動物を見るようだった目があやしい熱をもったのに気づいてからは身の安全のため無視するようにしている。もうなれた。
「高橋さんって今まで何人とつき合ったことあるの？　どんな人？」
ふと気になって勉強が一区切りついた休憩中にたずねると、彼が小さく笑った。
「え？　気になる？　聞きたい？」
しかたないなーとかいいつつ嬉しげに語りだす。
「ひなで三人目」
平均どれくらいなのかわからないけど、意外と普通だ。いろいろすごく手馴れているから、多かったらどうしようかと思った。
「一人目は高校の時で、一個下の後輩と二年くらいつき合ってたんだけど、男友達とばっか遊んで彼女放置してたら疎遠になっちゃって別れた。気が小さくて、他人に文句いったりできない子だったからなー。俺がもっと察してあげられれば良かったんだけど、あの頃は若かったというか。悪い事したなぁ」
彼女を放置する高橋さんが想像できない。
「それを教訓にして、毎日メールやら電話やらするようになったの？」
マメに会ってるんだし、別に2，3日に1度くらいでも大丈夫なのに。
「いや、ひながかわいいから。俺の癒し。もうずっとうちに置いておきたい」

彼が私の肩を抱き寄せ、髪に口づけたあと頭に頭をもたれかけてきた。
どこまで本気かわからないが、柑橘系の香水の匂いや固い胸板にドキドキするのでそれくらいにしておいて欲しい。高橋さんは引き締まっているという程度で、けしてマッチョなわけじゃないのになんでこんな全体的に筋肉質で骨ばっているんだろう。男の人ってみんなこうなんだろうか。
「二人目は？」
「二人目は大学入ってすぐの時に同級生と。見た目は大人しいのにむちゃくちゃ気が強くて。つき合って二週間で大ゲンカして別れた。今もたまーに出くわすんだけど、すげー気まずい」
彼が女の子とケンカ？　またしても想像できな……いや、わりと怒りっぽいかも。いつもニコニコしているけど、本当はけっこう気難しいんじゃないかなと思う時がある。
「なんで突然ロリコンに目覚めたの？」
「だから俺ロリコンじゃないって。他の中学生みてもなんとも思わないし……ってか、ひなが悪い」
「私？」
「教え子だし中学生だしで我慢してたのに俺の家に来たりするから……うん、ひなのせい」
「行ったら駄目だった？」
「なんで。嬉しかったっつってんの」
私のほおに2回キスして高橋さんがはなれる。
「ひなは？　恋愛経験」
「まあ無いだろうけど一応聞いとくか」とでもいいたげな満面の笑みが腹立たしい。ものすごく見栄をはりたくなったが、どうせバレバレなのでやめておく。
「……ないよ。高橋さんが初めて」
「うん、知ってたけどな」
彼がニヤリとする。

「なんかずるい」
「ファーストキスくらいは他の男としたかった？」
黒い瞳がこちらをのぞきこむ。長いまつげに縁どられたそれはいつも綺麗で雄弁で、魅入られそうになる。
「ううん、高橋さんがいい。でも、高橋さんの初めてが私じゃないのがムカつく」
じっと見つめ返したまま、彼を見習って素直な気もちをいってみた。はずかしいセリフにどもりそうになるけれど、ほんのり顔を赤くした彼の姿を見て、いって良かったと安堵する。彼は私から身体をはなして口元を押さえ、笑いながらつぶやいた。
「ひなが、ひながカテキョ中に誘惑してくる……密室に二人きりでしかもベッドがそばにあるこの状況で。悪魔だ」
なんでそーなるの。
「してない。してないから安心して。だいたい今までもずっと密室だったのに」
「えー、なに、俺を独占したいの？　ひながそういうならとっときゃ良かったかな～」
「聞いてる？」
「リンゴみたいな顔しちゃってー」
キスしようと再び近づいてきた顔をぺちりと手のひらで押し返した。
「お仕事しなさい」
休憩時間はそろそろ終わりだ。

◆

ある休日。
高橋さんの部屋のソファで、私は大人しく抱きしめられていた。ちなみに二人とも服は着ている。いつもならはずかしくて長い間じっとしていられないのに、なぜか今日は甘えたい気分なのでそのま

ま身を任せている。
どうしたんだろう私。クリスマスやら冬休みやらで何度も押し倒されたからさすがに慣れてきたんだろうか。後ろからがっちり回された二つの腕をやんわりなでながら、原因に気づく。
あ、そっか。高橋さんの元気がないからだ。
いつものように軽口をたたいて私を怒らせたり困らせたり照れさせたりすることもなく、だまってしがみついてきてじっとしている。眠いのかなとも思ったけれど、表情をみるかぎり憂鬱なだけのようだ。普段はカッコイイけど、これはこれでかわいい。
しばらくこのままでもいいかも、なんて思ってしまったが、可哀想なので問いかける。
「なにかあったの？」
彼が私の首筋から顔を上げる。吐息が耳にかかってくすぐったい。
「弟が……」
「弟さんが？」
まさか亡くなったとか。
「実家に帰ってこいってうるさくて」
「帰ってあげなよ」
めずらしく高橋さんがだまりこむ。
「そんなに嫌なの？」
ふり返るために腕をほどこうとしたが、かえって力をこめられてしまった。しかたないので身をよじり、横向きになって彼の頭をなでる。眉間にきざまれていたシワがほんのり和らいだ。
「身内の葬儀でもない限り帰りたくない。だけど、もう3年くらい顔見せてないからなー。去年からしつこくてしつこくて」
「そういえば、いっぱい電話かかってきてたね」
「そー。バイト先とダチと親と弟と心霊相談のやつ2，3人。次々かかってくるからケータイ捨てようかと思った」
「大変だね」
よしよしと頭をなで続ける。

もしかすると、このまえ「俺専用にして。俺もひな専用のもつから」とケータイをプレゼントされたのはそれが理由だろうか。毎月の料金も支払ってくれているのがなんとも申し訳ない。
「でも、なにがそんなに嫌なの？　お母さんとは、今は仲いいっていってなかったっけ」
「……離れた場所で、電話ごしだから仲がいいんだよ」
なるほど。
「会うとケンカする？」
「しない。ギクシャクする」
「わあ」
それは精神的にキツイ。
社交的な彼でもそんなことあるんだ。でも、孝行したい時に親はなしっていうし、なにもない元気な内に会っておいたほうがいいんじゃないかな。
「二人きりにならなきゃいいんじゃない？　顔だけだしてすぐ帰るとか」
「……そーする。来週ちょっと行ってくる」
ため息とともにうつむいた横顔をなぐさめたくて、そのほおに軽く口づけた。すべすべだけど柔らかくない。
「無理はしないでね」
高橋さんが笑った。
「もっとやって」
なぬ。
これ以上は届かないので腕をほどいて中腰になり、彼の肩に手をおいてその前髪をかきわけた。おでこに唇を落とすと、くすぐったそうな声。
「口は？　口にはしてくんないの？」
……しかたないな。
熱くなりつつある顔をよせて、
「なんで目とじないの」

「見たいから」
その肉食獣みたいな目で見られてるとはずかしくて、できることもできなくなるからやめて欲しい。なれたつもりだったけどやっぱりまだたまに落ちつかない。片手で彼の目をかくして一瞬キスすると、待ちかまえたように抱き寄せられた。
「あ」
熱い唇がふれたかと思うと、するりと舌が入ってきた。
「……っ」
ほおの内側や歯列をゆっくりたっぷり味わうようになぞり、こちらの舌に絡みついてくる。それが動くたびに水音が響き、変な声が出そうになるのがはずかしくて必死に声をおさえるが、狙いすましたかのように弱い所ばかりをついてこられて身体がびくりとはねた。
「ん……んんっ」
同時にうなじや背筋を手のひらでなでられて足腰がぞくぞくし、なにも考えられなくなっていく。
「……ぁっ」
吸われたり甘噛みされたりして酸欠になり、はあはあいってしまっていたら、唇をはなして高橋さんが熱っぽく微笑んだ。
「ひなってむちゃくちゃキスに弱いよな。気持ちいい？」
そんな言い方されると照れがきてまた反発したくなるが、自覚はある。
強引なのは怖いしドキドキしてしまうけど、優しく優しくちゅーってされると「幸せー」っていうのと「気もちいー」っていうのでとろんとしてしまって、もうなんにも抵抗できなくなってしまう。
こくりとうなずくと、嬉しげに服を脱がされた。
一週間後の夜。
受験も近いので自分の部屋で勉強していたら、高橋さんから電話がかかってきた。
「高橋さん？」
確か実家に帰るといっていたはずだが。

『ひな……だけど』
電波が届かない場所なのか、ノイズが酷い。それに後ろでネコがエサをねだるような、赤ん坊が泣いているような声が聞こえる。
『来週……か……から』
「ごめん、電波の状態が悪いみたいでよく聞こえ」
反射的に背後をふり返った。
いま部屋には私しかいないのに、フローリングの床に映っていた影が増えた気がしたのだ。まるで背後にだれかが立っていたかのように。けれど、辺りを見渡してももう一度影を見なおしても異常はない。おそるおそるケータイを耳にもどすと、すでに電話は切れていた。
それから電話をかけ直してもメールを送っても返事はこず、家庭教師の会社から「高橋が風邪を引いたそうなので、申し訳ないが一週間休ませて欲しい」とだけ連絡がきた。いつも遅くても一時間くらいで返事をくれるし、毎日メールか電話のどちらかは欠かさなかったのにそれもない。異常事態だ。またインフルエンザでケータイをさわれないくらい寝こんでいるんだろうか。
一週間後には、また会えるよね？
この前の電話や影が妙に気にかかる。
なんだかとても心細くなって、しばらく寝つけない日々が続いた。
マンションをたずねてもだれも出ない。彼の実家をたずねたくても、住所も電話番号も知らない。このまま待つしかできないんだろうか。ずっと一緒にいたのに、連絡がこないだけで簡単に縁が切れてしまう。人間関係ってこんなにもろいんだと考えて、怖くなった。
いてもたってもいられなくて、彼と共通の友人――斉藤さんに電話をかけた。

ネコ

数日前に高橋さんから電話がかかってきて、変な切れ方をした。
それからずっと音信不通で、家庭教師の会社から「風邪で1週間休む」とだけ連絡がきた。
彼はそんなに酷い風邪なのか、大丈夫なのかが知りたい。
そう斉藤さんに話すと、回線ごしにため息が聞こえた。
「1週間くらいすぐだろ。ほっといて勉強しろ受験生」
「勉強はしてるけど、なんか不安で落ちつかなくて」
今も机の上に教科書や赤本を広げているが、ほとんど集中できていない。
次のカテキョは火曜日だから正確には8日間だし、あと4日もなんて長すぎる。メールの1通でもあれば落ちつけるのだが、音信不通なんて初めてで怖いのだ。
「……」
「斉藤さん？」
「ネコ？」
「えっ」
唐突な話題にドキリとした。
高橋さんの電話からネコの声がしたことは話していないのに。
ブツリ、と通話が切れる。
「斉藤さん？」
かけ直すと、「ザァァァァァァ」と耳ざわりなノイズだけが響いてくる。
「斉藤さん！？　もしもし、大丈夫！？」
返事はない。
背中に冷水をかけられた気がした。
「……どうしよう」
頭がまっ白になって、うろうろしてからベッドにすわりこんだ。

ギ、ときしむ音がやけに室内に響く。外はまだ夕方で明るいのに、カーテンの合間から差しこむオレンジ色の光と、室内の濃い黒い影とでできた模様がひどく不吉に見えた。

不意に、床に置いていた通学カバンが「カサカサカサッ」と小きざみに震える。

おどろいて反射的に後ずさり、ベッドによじ上ってカバンを見つめると、また「カサカサッ」とゆれた。わずかにへこんだり膨らんだりしている。

もしかして、虫かなにかが入りこんで暴れているのかもしれない。

そう考えると恐怖がやわらいできた。

そろりそろりと近づき、カバンをひっくり返す。

筆箱や教科書、ノートや定期券などがどさどさと床に広がった。虫がまぎれていないか注意していたけれど、それらしいものはどこにもいない。

空になったはずのカバンの中をのぞきこもうとして、先に電気のスイッチに手をのばす。

室内はだんだん灰色に染まり、暗くなってきていたから電気をつけないとどうせ見れないと思ったからだ。

でも、電気はつかなかった。

カチカチカチカチと、何度おしてもつかない電気にあの夏の夜を思い出し、もうどこかに逃げ出したくてたまらなくなってくるが、ドアを開けようとして開かなかったらもっと怖い気がして壁のスイッチから離れ、そっとカバンの中を上からのぞきこんだ。

なにも入っていない……とは思うが、大部分が影になっていてよくわからない。もう一度カバンを持ち上げようとして、なにかを踏んづけた。ばらまいた教科書の一つだ。理解すると同時に転んでしまい、床にしゃがみこむ。立ち上がろうと近くの床に手をのばしたとたん。

わしゃり。

気味の悪い感触がした。

手のひらの下によくわからない”なにか”がある。それは髪の毛のようにたくさんの糸状で、円形に盛り上がっている。
人の頭の感触にそっくりだ。
高さはゴミ箱と同じくらい。つまり、床から生首が生えているような高さ。それを理解して震えが走った。軽く右下をふりむけば正体がハッキリするけれど、見たくない。手の下のそれから、ものすごく凝視されている気がするのだ。手をはなしてしまいたいけれど、今はなしたら噛みつかれそうで身動きできない。
人形かオモチャかもしれない、と他の可能性を考える。
こんなオモチャ置いてない。マスコットキャラのぬいぐるみならあるが、人形は怖いから一つも置いていない。こんな人間の頭そっくりの感触がするようなものなんて室内にない。ましてや床にあるはずがない。
「た」
高橋さん。お姉ちゃん。お母さん。
助けを呼びたいのに声が出ない。
泣きそうになっていたら、”なにか”がずるり、ずるり、と少しずつのびた。いや、生首から下の部分が出てきたのかもしれない。それはもう床にへたりこんだままの私より高くなり、上に置いたままになっていた手がぶらりと落ちた。
かすかに息づかいが聞こえる。
それはゆっくりと背後から近づいてきて私の両肩をつかみ、間近から顔をのぞきこんできた。二十歳前後くらいの女性で、茶髪のショートヘア。それは暗くやつれて、見るなり顔をそむけたくなるほど恨みがましく、攻撃的な目つきをしている。
彼女はぼそぼそとなにかをつぶやいたが、聞きとれなかった。

◆

気絶してしまっていたらしい。

目を開けると電気がついていて、自分の他にはなにもいなかった。床には通学カバンと教科書が散乱している。時刻は7時まえ。1時間くらい倒れていたようだ。全身にびっしょりと汗をかいてしまっている。あの女の人の顔が、肩にふれられた氷のような手の感触が、すべてが脳裏に焼きついてはなれない。

背中が心細くて、壁に背をつけて呼吸を整えた。

前に海で見た女の子もそうだったけど、普通の人と変わらないほどハッキリしてまったく透けてないなんて反則だと思う。知らない女の人がとつぜん自分の部屋にいるなんて、幽霊じゃなくても怖い。

そもそも私は霊感がないと思っていたし、今までも明里のそばにいるときか鏡ごしくらいにしか霊を見たことがなかったのに、どうして見えてしまったんだろう。

ティッシュで涙をふきながら考えていたら、手首にはめていたパワーストーンのブレスレットがなくなっていることに気づいた。

「あれ？」

お風呂のとき以外はいつもつけているし、ついさっきまであったはずなのに。

いつもブレスレットを置いている棚に目をむけるが、やはりそこにもない。どうしてだろうと手首を見つめていたら、ケータイの着信音が響いた。元々もっていた方だから、高橋さんからじゃない。

「……もしもし」

「大丈夫か？」

斉藤さん。

独特のハスキーボイスを聞いて恐怖が一気にやわらぎ、ベッドの上で身を乗り出した。

「斉藤さんこそ無事だったの！？　さっき変な切れ方したし、かけても繋がらなかったけど」

「あれくらいでどーにかなるわけねーだろ。今から出てこれるか？」

「え？　大丈夫だけど、どこに行けばいい？」

我が家には門限が存在しなかったりする。

特にいわれなくてもいつも夕方には帰るし、これといって悪い遊びもしないので、たまのワガママくらいならと大抵のことは二つ返事で許可してくれるのだ。むしろ、高橋さんと毎週末遊ぶようになるまでは「もっと外へ出かけなさい！　引きこもりになるよ！　お友達作ってきなさい」といわれていたくらいだ。明里や沙也とは遊んでいたんだけど、それ以外は家にこもりがちなのを心配されていたらしい。

「十分後に、お前んちの前の曲がり角」

家族に一言告げて外へ出ると、ちょうど彼が来たところだった。

その姿を見て、ちょうどズボンをはいていて良かったとこっそり思う。

「斎藤さんって暴走族とか入ってたりする……？」

だってこのでっかくてゴツイ大型バイク、その筋の人か走り屋さんが乗ってるイメージがある。バイク自体は派手な色じゃないし、特に装飾もされていないけどけっこうな威圧感だ。

「んなもんに入った覚えはない。たまに峠走るくらいだ」

軽く背中を二回たたかれたあとメットをわたされ、後ろに乗るようながされた。

……どーやって乗るの、これ。座席高いよ斎藤さん足長すぎるよ。

よじ登ろうと奮闘していたらひょいと持ち上げられ、すとんと座席におろされた。

「ゆっくり走っけど、落ちるなよ」

ついたのは近場のカラオケだった。

今日は客足が少ないようで、駐車場はまばらにうまっている。

「ファミレスよりこっちの方が話しやすいだろ」

「な、なるほど。でも別に公園とかでも良かったのに」

てっきり立ち話程度かと思っていた。

「受験生が風邪引いたらまずいだろ」

「ありがとう。でも、私いまあまり持ち合わせないんだけど、足らなかったら借りてもいい？」

ファミレスならギリギリ足りるかもしれないが、カラオケ代はたぶん足りない。
「おまえな。ガキと出かけてガキに金ださせるわけねーだろが。まさか高橋のアホはださせてんのか？」
「いや、いつもおごってもらってるけど……斎藤さんってなにげに紳士だよね」
見た目とのギャップがすごい。
「普通だ。むしろ常識だこんなもん」
個室に入り、お言葉に甘えて夕飯を頼んでそれが届いたあと。
私は気になっていたことをたずねた。
「斎藤さん、首のそれって」
外では暗くてわからなかったけれど、灯りの下だと服の合間にうっすらそれが見える。
「ああ、やられた」
彼の首には、両手で強くしめられたような赤黒いあざが浮かんでいた。
「つか、おまえにも同じのついてんぞ」
いわれて、背中がヒヤリとした。
私との電話中、斉藤さんは高橋さんを霊視してみたらしい。
本人がその場にいなくても顔見知りならすぐできるそうなのだが、そのときはなぜか妨害するようにネコの霊がわらわらと寄ってきた。
「だれかの使役霊だった」
「使役って、ネコの霊を飼ってるの？」
「ちがう。犬神って知ってるか。犬の気が狂うほどむごたらしく殺して、その恨みを利用して作るやつ。それをどっかの馬鹿がマネして自己流に作ったんだ。ネコで」
ペットの死後もはなれがたくて飼っているのかと思っていたら、予想外に不快な話で言葉がでなかった。
霊視をさまたげてネコたちが消えたあと、彼はいきなり背後から首を絞められたそうだ。顔は見ていないが、女だったと彼はいう。

それでとっさに追いはらったものの、あれはまだ成仏していない。高橋さんに憑いていた霊が斉藤さんに気づき、一時的に彼の所へ来ただけなのでまた高橋さんに憑いているだろうという事だった。

ネコたちと女と、２種類の霊に憑かれているなんて。

「高橋さんは大丈夫なの？」

実家に帰っただけなのに、どうしてそんな事になっているのか。

斉藤さんは普段と変わらない様子でつぶやいた。

「あいつは慣れてるし、得意分野だ。自分でなんとかする。……それよりおまえだ。しばらく高橋と連絡をとるな。もしむこうから電話がかかってきても無視しろ。あいつからのはメールも開くな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4345u/

カテキョ怪談

2012年1月10日02時45分発行